

---

# U.C.War Life

ネコ茸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

U・C・War Life

### 【Nコード】

N2310F

### 【作者名】

ネコ茸

### 【あらすじ】

ガルマを護り切れなかったとしてドズル中将より予備役辞令を通告されたシャア。彼は如何にしてキシリア少将の配下に成ったのだろうか？。

## 第1話：中立コロニーにて

（プロローグ）

彼がここに来たのは、とある噂を耳にしたからだ。

キシリア・ザビが個人的にニュータイプ関連の研究機関をこのコロニーに設立した、と言うのだ。

それも表面的には精神異常の分析やカウンセリングをするNGOと  
言うことに成っていた。

彼には同伴者が居た。

15〜16歳だろうか？、浅黒い肌に紺碧の瞳をしたその少女がなぜ彼と一緒に居るのだろうか？。

彼はある確信を持って少女を噂の機関に預ける為に来たのであるが、それはまた別の話である。

雨が降っている。

予定ではあと20分程で止むはずだ。

ここはサイド6リゾート用コロニーである。

いかにもペントハウス風な建物から男が出てきた。

男は表に停めてあったエレカに乗り込んだ。

観光用のオートドライブでは無く自分で運転するタイプだ。

男は雨水を気にする様子は特に無い様だ。

彼が着こんだハーフコートは見た目では分からないが軍用の強力な撥水加工が施されて要るのだ。

男の名はシャア・アズナブルである。

建物の入り口には見送りであろう少女が立っていた。

暫くすると顎髭を蓄えた初老の紳士が少女を中に誘い扉を閉じた。

シヤアが車を出すとペントハウスの陰からもう1台の車が後をつける様に出ていった。

雨は未だ降り続けている。

シヤアの車は街中の駐車場に入った。

クレジットパーキングである。

シヤアは車を降りると足早にとある店の入り口をくぐった。

酒場、シヨットバーだ。

店の中はお世辞にも広いとは言えない。

4人掛けと6人掛けのボックス席がそれぞれ1組づつ、それに5人掛けのカウンター席が有るだけだった。

シヤアが店に入って来るとバーテンダーがお決まりの挨拶を投げ掛けてきた。

「お帰りなさいませお客様。」

シヤアはそれに右手を軽く挙げて応え、カウンター席の一番奥に向かった。

入り口から最も離れた席である。

シヤアが席に着く前にバーテンダーはグラスをカウンターに置き、「

“いつもの”、で宜しいでしょうか?。」と聞いて来た。

「ああ、有難う。」と応えながらシヤアは席に腰を降ろした。

店内のテレビモニターではニュース番組でガルマ・ザビのジオン公国国葬がライブで放送されると繰り返している。

客はシヤアの他はボックス席に一組、どうやらカップルらしい。

シヤアはサングラスを架けてからグラスの中の液体を飲み始めた。

薄めの水割りであった。

無理もない。いくら見た目が落ち着いていても、彼は20歳に成ったばかりなのだ。

シヤアが店の中に消えてから直ぐに車が駐車場に入ってきた。

ペントハウスから後をつけて来た車だ。

シヤアの車を確認するとそこから少し離れたブースに車を停めた。乗っているのは運転手が1人だけであった。

運転手の男は車からは降りずに店の入り口を見張っている。

辺りが徐々に暗く成って来た。

時刻を教える音楽がユツタリと流れて来た。旧世紀の音楽だ。

たしか【新世界】と言う曲だ、と男は思っていた。

この音楽は太陽光取り入れ用のミラーを動かすモーターの駆動音をカバーする為の苦肉の策だった。

薄暗闇の中、新しい車が駐車場に入ってきた。

その車が隣に停車する前に男は運転席から降りた。

190cmは有ろうか？、威丈夫である。

一目で軍用と分かるモスグリーンのコートを羽織っていた。

車が停まり助手席から上官らしい男が降り立った。

落ち着いたグレーの帽子を目深に被り、やはりグレーのコートは襟を立てている。

先の男よりは小柄だが鋭い目付きで今では珍しいカイゼル髭を蓄えていた。

上官は直立不動の男に吐き捨てた。

「キサマ、そんな格好で尾行になると思っているのか？」

「はっ！、申し訳ございません！。しかし規則では……。」

「もういい！。で？、奴に間違い無かるうな？」

「はっ！、間違い無く奴であります。」

「よし、お前はここで待て。何か有れば直ぐに連絡する。」

「はっ！」

男の敬礼を忌々しげに見やってから上官の男は店に入ってしまった。

髭の男が店に入った時テレビモニターではジオン公国総帥のギレン・

ザビがアジっている最中であつた。

店内の人間は皆テレビモニターを視ていた。1人を除いてである。

『諸君らが愛してくれたガルマ・ザビは死んだ……、なぜだ!!。』

「坊や、だからさ……。」

店内で唯一モニターを視ていなかったシャアが誰に言うでもなく呟いた。

それをきっかけに止まった時間がまた動き出したかのように、バーテンダーが入り口に新たな客を発見して言った。

「いらっしやいませ。お客様、初めてでいらっしやいますね?。お一人でしたらカウンターへどうぞ。」

髭の男は促されるままカウンターの一番手前、シャアとは反対側の端に座つた。

バーテンダーがオーダーを取りに来た時、男はシャアに視線を送りながら、

「彼方と同じ物を2つ、1つは彼方へ届けてくれたまえ。」

「……、畏まりました。」

バーテンダーは応えるとまずは男へ、次にはシャアへオーダーされた飲み物、シャアの“いつもの”を渡した。

薄めの水割りだ。

男がそれを一口飲んだ。

(何て酒を……)と思いつつも一度シャアの方を見ると、シャアは男に向かつてグラスを掲げて見せた。

男はそれを合図に自分のグラスを持ち席を立つた。

シャアの直ぐ横に立つた男が声を掛けた。

「シャア少佐、ですな?。」

「キシリア殿の手の者……、秘密警察だな?。」

シャアは質問に答えず聞き返した。

男の顔から一瞬表情が消え、口の両端を吊り上げ、バーテンダーを見つづ言つた。

「少佐、ボックス席にお移り願えますかな?。」

「ここでも構わんだろう。」

男に向き直りシヤアが言う。「しかし……。」「と言って男はもう一度バーテンダーを睨んだ。

「そう邪険にせんで下さい。少佐とはゲリラ掃討作戦からの付き合いなんですから。」

バーテンダーが割って入って来た。

男のバーテンダーを見る目が変わった。

「すると、彼は?。」

「木馬を追って私と一緒に降りたコムサイのコパイロットでな。私の煽りを受けて一緒に処分されたのさ。なあ准尉殿?。」

「勘弁して下さいよ少佐。」

シヤアはもう一度男に向き直り言った。

「まあ座りたまえ。」

「は、それでは……。」

男はシヤアのすぐ右隣に座った。

「この3日間私をつけ回していたのは君の部下かね?。」

男は聞かれない様に舌打ちして自分の部下を呪いつつ言った。

「は、お恥ずかしい限りで……。」

「君らも良く良く暇なのだ。私の様な予備役士官の後を追いつくとは。」

シヤアはわざとらしくさも鬱陶しげに言った。

数十秒間の沈黙の後に……。

「で?、私に何の用が有るのかね?。」

シヤアが核心をストレートに尋ねた。

すると男はまた口の両端を吊り上げて形ばかりの笑いを顔に貼り付けてから言った。

「少佐ア、もうお分かりなのでしょう?。」

「さて、何の事やら……。」

シヤアがとぼけているのは明白である。

「お惚けは無しにしましょうや。フラナガン機関にご自分の手駒を

預けておいてそれは無いでしょう。」

男は真顔に成って続けた。

「ララアとか言いましたな？。中々の素材と報告を受けましたよ。」

「……………」

シヤアは沈黙で応えた。

「少佐はどちらでフラナガン機関をお知りになったのですかな？。」

「なに、都市伝説を真に受けただけさ。」と、シヤアはウソぶいて見せた。

「……………、まあ良いでしょう。今日の本題は他に有りますからな。」

そう言つと男は、いい加減氷の溶けきつたグラスを一気に飲み干した。

「では改めて聴こうか？。」

シヤアも同じ様にグラスを干してから問うた。

「突撃機動軍地球方面派遣部隊へ是非お出で下さい、少佐……………、いや中佐とお呼びすべきですか？。」

バーテンダーが軽く口笛を吹いた。

「……………、弟君を死なせた男を随分と高く買われるのだな？、キシリア殿は。」

「さあ？、私はただ中佐をお迎えするようにと命ぜられただけですからなあ。」

男は例により口だけに笑を貼り付かせながら言った。

この時、シヤアの2階級特進を予想出来た者は居ない。

「で？。正確な配属先は？。」

「北大西洋潜水艦隊であります。」

「私に海へ潜れと？。思い切った事を……………」

「で？、どうなさいますか？、中佐」

向き直つた男からの質問にシヤアは……………。

「……………1つ、私から条件を出したいのだが良いかね？。」

と質問で返した。

「これは……………、昇格だけでは足りませんか？。どうぞ、おっしゅっ

て下さい。」

「准尉も一緒に連れて行きたいのだが、どうか?。」

シヤアは親指の先をバーテンダーに向けた。

「……、中佐の推挙と有らば何も申す事はございませんな。」

男が快諾したのをみたバーテンダーは、

「有難うございます!、また少佐…… あ、いや中佐とご一緒出来るとは、自分は嬉しいであります。」

「ああ、そうだな!、では前祝いと行こう。」

シヤアが空のグラスを持ち上げてそう言うのと、

「それでしたら私に奢らせて下さい。何でも呑みたい物を言って下さい!。」

と准尉に戻ったバーテンダーが言った。

「ほう、大丈夫なのか?。」

「大丈夫であります。このオーナーは母方の祖父ですから。」

それを聞いていた男が……、  
「ふふふ、ならば私はモルガルトンの12年をボトルでもらおうか?。」

それを聞いた准尉の顔色が青くなった。

それはフォン・ブラウン市特産の最高級ブランデーだった。

戦争が始まってからこちら希少性が増して値段は天井知らずなのだ。

「あまり部下を虐めないで欲しいのだがな。」

「ふふ、もちろん冗談ですよ。さっきのウイスキーをストレートでもらおうか。ダブルでな。」

「畏まりました。……どうぞ。」

落ち着きを取り戻した准尉はウイスキーとチェイサーのグラスをほぼ同時に出した。

「中佐もたまには違う物をいかがですか?。」

「そうだな、では准尉に任せるよ。」

「は、ではウイスキーベースのオールドカクテルを……。どうぞ、ラストイー ネイルです。」

「む？錆びたクギ、だと？。」

「はい、転じて“研き直せば光る”と言う意味に成ります。」

「言ってくれるな、准尉。」

「恐れ入ります。」

シヤアが飲み終えたのを確認した男は自分のグラスを一気に飲み干し、チエイサーを一口だけ口に含んだ。

「出航は明日の一番で願います。行き先はグラナダです。お二人ともよろしいですか？」

「了解した。良いな？、准尉。」

「ヤポール（イエスサー）！」

バーテンダーの准尉はジオン軍式の敬礼で返した。

「おいおい！、気が早いぞ。」

「は！、す、すいません、つい……。」

男はつい本気で笑ってしまった。

「ははは、で？、これからどうされます？、中佐。」

「私はホテルに帰ろうと思うのだが、いつもより強い酒を入れてしまったからなあ、車も放つては置けんし……、オートドライブなら良かったのだろうが、どうしても好きに成れんのだよ。」

「なるほど、それであんな薄い酒を……。」

「どうやらシヤアは、呑めない訳では無かった様である。」

「分かりました、お送りしましょう。お車の方も私達で処理致しますよう。」

「すまんな。」

男はコートのポケットに手を入れて襟元の隠しマイクのスイッチを入れた。

「私だ、すぐ出られるな？、そうだ、中佐も一緒だ。」

男は言い終えると出口へ向かった。

「リカルド准尉！、明日は遅れるなよ！」

シヤアもカウンターに声をかけてから出口へと向かった。

「行ってらっしゃいませお客様。」

リカルド准尉はバーテンダーの顔に戻り、お決まりのセリフで二人を送り出した。

辺りはすっかり夜である。

男は車の中から店の入り口を眺めていた。

上官が入店してからどのくらい経つたろうか、突然インカムが話だした。

『私だ、すぐ出られるな?。』

「は、大丈夫であります。」

少々慌てながら応えた。

「それでは承諾したのですね?。」

『そうだ、中佐も一緒だ。』

「中佐ですつて!?。」

男の問いかけは上官に届かなかった。

上官は伝えるだけ伝えたと通信を切ったのだ。

(クソ!、なぜあんな奴が?。)

男は心の中でうめいた。

シヤアを快く思わない若い兵は彼だけでは無い。

彼らの間ではザビ家に媚びて昇進したと噂されていたのだ。

車を店の前まで寄せながらも内心穏やかでは居られなかった。

店の前で車を止めると店内から上官がシヤアを伴って出てきた。

男は運転席から降り、後部座席のドアを開け敬礼した。

「昇進おめでとうございます、中佐。」

男は自分より身長の高いシヤアを見下ろしながら言った。

「やあ、有難う。」

シヤアは男の視線の意味を理解しながらも、気付かない振りをして見せた。

それは男にも解つたらしい。

「あやかりたい物ですな。」

今度はあからさまに嫌味を言った。

「キサマ！、私にどれだけ恥をかかせれば気が済むんだ！？。」

「大尉、私は悔しいのです。こんな若造の風下に立つなど……。」

「バカ者！！。キサマの尾行は初日からバレていたのだぞ！！。」

男は視線をシヤアに移して睨み付けた。

「彼を叱らないでくれないか、大尉、私の説明不足だったのだ。」

シヤアが割って入った。

「彼の尾行を私に教えてくれたのはフラナガン博士に預けたララア

なのだよ。」

方便である。

実際にはシヤアも気付いていたのだが、先に口に出したのはララアであった。

「ほう、すると彼女は本物のニュータイプかも知れませんか。」

男の視線がゆるんだ様である。

「もう車に乗っても良いかね？、あー。」

「キグナン曹長で有ります。大変失礼いたしました。どうぞお乗り

下さい、中佐。」

「部下の非礼、自分からもお詫び申し上げます。」

「ああ、かまわんよ、なれている。」

それを最後に全員車に乗り込みその場を後にした。

“大尉”とよばれた男が襟元のマイクに指示を飛ばし終わると、声を発する者は居なくなつた。

車の中である。

運転席にキグナン曹長、後部座席の右側にシヤア、左側に髭の男

“大尉”が乗っている。

シヤアは一度も道順を指示していなかったが何の問題も無くシヤア

の利用しているホテル……、正確にはパーサー（キッチン付きの格安宿）に向かって走っていた。

キグナンにとってはこの3日間通いつめた道である。

余裕を取り戻したのかルームミラーでなんどもシヤアを覗き見していた。

「キグナン曹長、まだ何か私に言いたい事が有るのかな？」

シヤアは正面を見ながら言った。もつともサングラス越しなので正確には分からないが……。

髭の大尉はそれを聞いてキグナンの後頭部を睨み付けた。

その様子が可笑しいのかシヤアの口元に笑みが浮かび上がった。

「中佐は夜に成ってもサングラスを外さないのですね？」

シヤアの笑みにつられて軽口が突いて出た。

上官が睨んでいるのは気が付かない様だ。

今にも噛みつきそうに成っている大尉に、シヤアは彼の右膝を軽く叩いて制止した。

「自分で運転するときには流石に外ささ、だが目の前に何か無いと、どうも落ち着かなくてな。」

ウソである。

雨の滴を避ける時以外はほとんどサングラスを外さないのだ。

「中佐はMSの操縦だけではなくマーシャルアーツもお強いとうかがいました、一手ご教示願いたいものですなあ。」

キグナンの軽口は止まらなかつた。

大尉は目を閉じ、腕組みして深く座り直した。

もう知らんと言った風情だ。

「本気なら……、」

シヤアが返した言葉を聞いて、大尉はしたたか咳き込んだ。

「駐車場で軽く試して見るかね？」

「よろしいので？」

「大尉の許しが出れば、だが…… 良いようだな。」

大尉はソツポを向いていた。

彼も氏がない中間管理職なのである。

車は無事ホテルの駐車場に着いた。

まだ遅いと言う程の時間では無かったが周りには人影は無かった。

「本当によろしいのですね?。」

聞いたのは大尉であった。

「ああ、もし殴られても文句は言わんよ。」

などと言うわりにシヤアにはコートもサングラスも外すつもりは無  
いようだ。

片やキグナンはコートと上着を脱いで手には組打ち用のオープンフ  
インガーグローブを着けていた。

「それでよろしいのですね?。」

今度はキグナンが聞いた。

言葉に怒気をはらんでいる。

プライドを傷つけられたのだ。

「いつ……、」

始めるのか、とシヤアが聴こうとした時にはキグナンが動いていた。  
ノーモーションからの右ジャブ、それに左脚でのローキックを放っ  
ていた。

対角線の攻撃だ。

キグナンは打撃系を得意としていたのだ。

対してシヤアは、ジャブをスウェーせず一気に間合いを詰めた。

ジャブは左側頭部をかすめ、ローキックはヒットポイントを失い気  
の抜けた蹴りになってしまった。

キグナンは慌てた。いきなりシヤアが目の前に迫ったのだ。

キグナンが蹴り足を引き、体制を整える前にシヤアは右半身になり  
自分の右脚を相手の右側から後方に滑り込ませ刈り取った。と、同  
時に右手でキグナンの右肩を軽く押した。

結果、キグナンは背中から倒れてしまった。

「ゴング無しで殴りかかるとは、気に入ったよ。是非私の隊に欲しいな……。どうかね？、大尉。」

倒れているキグナンに手を差しのべながらシヤアが言った。

シヤアの手を借りて立ち上がったキグナンは呆然としていた。

自分がどのように倒されたのか理解出来ないのだ。

それ以上にシヤアが言った言葉が理解出来ない。

自分の上官を見ると件の通信機で本部と連絡を取っているところであつた。

「キグナン曹長、まさか拒否はせんよなあ？。」

「……………」

何をどう言えば良いのか分からない。

「中佐、移籍の手続きはこちらで処理します。一通りの事は経験済みですので存分に使ってやって下さい。」

大尉が言った。

本部からの許可が降りたのだ。

「ちなみに曹長！、キサマの自由意思は認められんからな！」

「……………」

いまだキグナンは呆然としていた。

「返事はどうした!!。」

「ヤ、ヤボール！、ヘルコマンドール！」

『イエスサー！、上官殿!。』と言って敬礼した。

「ようし、ではキサマは明日、シヤア中佐と同じ便でグラナダへ行け、解つたな。」

「ヤボール！」

「ではキグナン曹長、これからよろしくたのむ。」

「こ、こちらこそであります。」

話は着いたようである。

## エピソード

男が3人いた。

ここは朝一番の宇宙港だ。

男達はシヤアとキグナン、それに髭の大尉だ。

フォンブラウン経由グラナダ行き定期便の搭乗手続きは既に開始されていた。

「……リカルドめ、まさか本当に遅れるとはな……。」  
さすがのシヤアも閉口せざるをえなかった。

「私の部下から入った連絡では出航には間に合うそうですので、搭乗して待つてはいかがですか?。」  
大尉が言った。

その時「ちゅーさあー!。」と気の抜けた声が聞こえてきた。  
リカルドである。

「……。」  
シヤアは右手で自分のコメカミを押さえた。

「遅くなりました、中佐!。……中佐?。」  
どうやらその場の空気を理解した様だ。

「リカルド、ここが民間の施設だと言う事を忘れんでくれ。」  
「も、申し訳有りません。」

言いつつリカルドは見たことの無い大男をいぶかしげに見やった。  
「リカルド准尉殿ですね?、この度シヤア中佐の部隊に編入される事に成ったキグナン曹長であります。よろしくお願いいたします。」  
「あ、ああ、よろしく。……中佐?。」

「経緯はまあ……大体お前と同じだな。」

「は?、すると昨日あの後やり合っただんで?。」  
「いえ、私が一方的にヤラレただけです……。」

「あそこで止めてくれて助かったよ。まだ酔いが抜けていなかったからなあ。」

「そろそろ時間です、搭乗手続きを……。」

大尉が割って入った。

大尉を残して3人の男達は誘導路へと消えて行った。

「ご武運を……。」

1人残された大尉は姿の見えなくなった誘導路に敬礼した。

大尉はシャアから少女、ララアへと託された手紙を検閲すべきか悩んでいた。

いつの間にか彼もシャアを憎からず思う様になっていたのだった。

） f i n ）

## 第2話：軍港の街にて 1

（プロローグ）

その街は“荒れている”としか表現の仕様がなかった。海辺の街である。

緩やかな坂道が港へと続いていく。

その坂道を追い越す様に影が伸びていく。

今は夕刻だ、夜が忍び寄って来ている。

港は軍港、街の名はベルファスト、ヨーロッパで連邦軍に残された港湾都市の一つだ。

都市とは言いがこの荒れようはどうだろうか？。

高層ビルもハイウェイも六割がた瓦礫に成っている。

まるで大地震か空襲の後の様ではないか？。

そう、今は戦争なのだ。

この瓦礫の山はジオン軍のブリティッシュ作戦に始まり第一次、第二次の地球降下作戦がもたらした結果であった。

それでも人々は生きている。

生きて行かなければ成らないのだ。

街中から見た軍港は真新しい外壁が夕日に輝いている。

まるで幻を見ている様だ。

連邦軍は街の復興よりも軍施設を優先させたのだ。

暗闇が迫り、街に明かりが灯り始めた。

こうして見ると街の様子が良く分かる。

明かりの有る所が復旧の進んだ所なのだが、いずれも軍人相手の商売をしているのだろう。

私の名はジャン・バレット、偽名である。だが今は連邦市民として登録されているこの名前を通す事にする。

この廃墟のような街で私が出逢った1人の少女の話をしよう。

私が何者で有るのか、始めに話しておこう。

突撃機動軍地球方面ヨーロッパ地区派遣隊情報部所属専任諜報員、  
いわゆるスパイである。

軍内での階級は大尉だ。

サイド6にある訓練施設で全カリキュラムを修了するのに約2ヶ月、  
最も重要視されたのが“ジオン訛り”を矯正する事であった。

訓練施設を出た私を待っていたのは、ここ数年間音沙汰の無かった  
昇進と地球、ヨーロッパ行きの辞令だった。

任務は現地で独自の情報ネットワークを構築する事だ。

地元民の採用と訓練が主な仕事だ。

私がこの街に着いたのは第二次地球降下作戦が終了してから10日  
後の事だった。

引き渡された引越し越し公社のトレーラー（もちろん偽物だ）には2  
4組分の機材が積み込まれていた。

つまり、それが私の担当ノルマと言う訳だ。

活動資金としてサイド6に有る証券取引所の印章の入った金塊が渡  
された。

これならそうそう足が付くことも無いだろう。

まずは家を探さなければならぬ。

アパートメントでは無く、一軒家が良いだろう。

程なくそれは見つかった。

その家は街と港を一望できる丘の上にあった。

私は【財団法人戦災相互助け合い基金】と言うNGOを名乗り地元  
の不動産屋と接触した。

不動産屋が言うには“政府高官ご一家”がジャブローへ疎開するた  
めに売りに出された物件だそうだ。

それにしても貧相に見える。

そこいら辺を問い質したところ、

「イヤ〜！、良く聞いて下さった！。実はここからがこの物件の良  
いところなんですよ！」

と、汗を忙しなく拭きながら“ご自慢”の地下室と、そこに作り付  
けられた発電機や空気清浄器を得意気に案内してくれた。

「まるで旧世紀の核シェルターみたいだなあ。」

私が言うと、

「正にその通りです！。どうですか、お買い得ですよ〜。」  
と言って手揉みをしていた。

立地と内装は希望通り、と言うか理想的と言えた。

私は交渉の末、言い値の75%で購入した。

借家契約を断られたためである。

不動産屋はホクホク顔で帰っていった。

元から大分吹っ掛けて居たようである。

アジトは確保出来た。

次は協力者を募る番だ。

接触すべき相手はブルーカラー、つまり肉体労働者層だ。

出来れば震災被害者で現在一人暮らしか、それに準じた者が良いだ  
ろう。

周りからの評判等も考慮せねば成らない。

良くも悪くも目だっついていては活動に悪影響が有るのだ。

その上で人付き合いも無ければ為らない。

この街でどれだけの協力者を確保できるのだろうか？。

私はNGO法人の仮事務所を開設して“戦争に関する意識調査”を  
開始した。

“意識調査”とは言ったが、それはインタビュー形式のマイندوق  
ントロール法なのだ。

表面上はインタビューを受け、本人の被害状況を調査判定して一時  
金を渡す、足りなければ査定後に低金利で金を貸すのが仕事だ。

しかし実際にはインタビューを通して連邦への不信を煽り、ジオン

への親近感を増すのが目的だ。

北米地区総司令官ガルマ・ザビ大佐の占領政策、イメージ作戦が良く効いている。

おかげで初日から良い感触を得られた。

事務所開設から3日目に有る老婦人をインタビューしたのだが……。

「あなた！、私みたいな年寄りなんかより子供達を何とかしておやりよ！」

一時金と低金利ローンの説明をしている時に彼女が話し出したのだ。

「はあ？、確かこの街には孤児院が有って年長者にはアルバイトの斡旋をしていると聞いたのですが？」

「その孤児院とアルバイト先が問題なのさ。彼処のオーナーはここいらのヤクザ者のボスなんだよ！」

「……警察には行かなかつたのですか？」

「警察なんてあてになる物かね。だいたい彼処の店は連邦軍御用達なんだ、警察だつて入れやしないのさ。」

「店？」

「“アルバイト先”の事さ。」

「その、ヤクザのボスには何処に行けば会えますかね？」

「そこまでは知らないよ。」

「では店の場所を教えてください。」

「軍港の裏門に行ってみな、“ジョン・ドウ（名無しの権ペエ）の店”で看板が出てるよ。本当に何とかしとくれよ？」

「……まずは調査してみましよう。」

妙な雲行きに成ってきたが地廻りの連中と繋がりを持つのは悪い事では無い。

その店は直ぐに見付かった。

老婦人が言つた通り軍港の裏通用門の真向かいに“ジョン・ドウの店”が有つた。

見るなど言われても目に入ってくる毒々し配色のネオンがその店の素性を物語っていた。

いわゆるピンクバーだ。

（口開けは18:30か、しかし……子供のアルバイト先とは思えんな。）

等と考えながら店の奥に有るカウンター席に着いた。

私は地元の黒ビールを注文してから店の中を見渡した。

客の8割は軍人だ。制服のまま入店している。

その相手をしている女達はどう見ても20歳を越えて要るだろう。

（裏方仕事でもやらされているのか？）と思っていると、

「お客さん、初めてだね。女の子が目当てなら“ボックス席料金”払ってくんないかね。」

とバーテンが話しかけて来た。

「ここに来れば街の顔役に渡りを付けられると聞いたんだが……？」

「アーン？、あんだ誰だい？」

「先日事務所を開設した戦災基金の者です。挨拶したいと思ってね。」

「……チョツと待つてな。」

と言うとバーテンは奥に行ってしまった。

陶器製のゴブレットに注がれた黒ビールを飲みながらしばらく待っている。奥の部屋からサングラスをかけた男が2人出てきた。

男達は私の座る席の左右後方に立った。

「オッサン！、飲み終わつたなら立ちな！」

声からすると10代後半から20代前半と言ったところか……。

チンピラにしても若いな……と思いつつも言葉に従い席を立った。

男達に誘導されてドアの前まで来た。

（？、店の大きさからして、裏口か？）

男達が現れたドアとは明らかに違ったのだ。

私がドアの前で固まっていると、右側の男が焦れて言った。

「行な、お帰りはこちらだぜ。」

ちぐはぐな言い方に思わず口元がほころんでしまった。

裏口から出て、（出直すか。）と思いそのまま帰ろうとした時だ。

「待ちなオツサン！、オレの事笑いやがったろう。」

と言いながら後ろ手でドアを閉めつつ、私の右肩を掴んだ。

こう言う時、チンピラの反応と言うものは有難い。

私は振り返りまた笑って見せた。

「ヤロー！！。」

キレた男が殴りかかって来た。

見え見えの右ストレートだ。

私はそれを右手でさばくと同時に男の右足を刈り払った。

男はパンチに体重を乗せていた為、前のめりに倒れこみ、裏路地の壁に顔面から突っ込んだ。

私は膝を突いて顔を押さえ、うめいている男の髪の毛を鷲掴みにして持ち上げた。

壊れたサングラスの下から出てきた顔はやはりハイティーンの物だった。

（やはりな。）

このボスは孤児院の男子を引き取って自分の“兵隊”に使っているのだ。

「ボスの所に案内してもらっぞ。」

私は男、少年の耳元で言った。

裏口から入って来た私達を見たバーテンはあからさまに呆れた顔で近付いて来た。

「お前はもう良い！、今日は帰って寝てろ。」

と言って少年を追い払うと、顎をクイツと降って私に移動を促した。その部屋には誰も居なかった。

私の前を歩いていたバーテンが一番奥のソファに深くと腰を下ろした。

「オレが“ジョン・ドウ”、アンタの言う顔役って奴さ。ま、座んな。」

言ってからテーブルに置かれた葉巻の端を噛切って床に吐き捨てた。

「私はジャン・バレット、名刺は要りますかな?。」

「んな物ア要らねーよ。」

葉巻に火を着けたマッチを降り消しながら言った。

「ンで?、オレに何の様だい。」

ジョン・ドウは私を舐めるように見ながら言った。

「先ほども言いましたが“戦災基金”と言う低金利の金貸しを始めましたので挨拶をと…………。」

「フウ〜ン?…………その話はもう良い、好きにやんな!、オレア金貸しはやってねえんでよ。それよかアンタ、こっち(地球)の者じゃネーだろ?。」

「ええ、サイド6から来ました。法人本部がサイド6なんですよ。」  
私はさも当たり前と言った風に説明した。

「ン?、それにしちャリーア訛りがネエ、ツーかどこの訛りもネエな?、え?、おい。」

「はっは、まいりましたね。」  
「アンタ、ムンゾ、アー、今はジョンかい…………、から来たんだろ?。」

「ホオ…………流石だねえ?。そう言うお前さんも上から流れて来たんだろ?。」

私は口調を砕けたものに変えた。

「オレも元々こっち(地球)だよ。上には出稼ぎに上がってただけさ。」

「さて、私としては出身がバレるのは甚だよろしくない話なんだが…………どうした物かな?。」

「オレを殺すってか!?、へへ、表(店)にあ軍人がわんさと居るんだぜ?。」

「いや、私がお前さんを気に入ってしまったんで困ってるのさ。」  
私はそう言つと懐から巻きタバコの箱を取り出した。

ジョン・ドウは一瞬体を強張らせたが懐から出てきた物を見て、また身体を弛緩させた。

私はジョン・ドウを“気に入った”と言ったがそれは嘘だ。彼に利用価値を見出したのだ。

それに、私が吸っているタバコも普通の物では無い。

意識誘導、マインドコントロール用の薬剤が混ぜて有るのだ。

この薬は習慣性が殆んど無く、意識混濁も起こさない優れた物だ。

私は解毒用のインプラント（皮膚下埋設式のカプセル型薬剤投与装置）を左の脇の下に埋設しているので煙を直に吸い込んでも薬の影響は受けない。

ちなみにこの“インプラント”は約4年間有効なのだ。

「ジョン、と呼んで良いかね?。」

と、タバコの煙を吐き出しながら言った。

もとより部屋はジョン・ドウの葉巻で煙っていた。

「構わねえよ、そんじゃあアンタの事あ何て呼べば良いんだい?。」

「もちろんジャンで構わんよ。」

「フウ〜ン、本当の名前は教えちゃくれねえのかい。」

「アンタ……ジョンだってそうだろう?、“名無しの権べえ”は無

かるうよ。それに私の本名が知られたら、それこそ……。」

「オレを消さなきゃなんねえ……ってか?。」

「ま、そう言う事さ。」

この部屋の換気扇は掃除を怠っているせいかその作動音とは裏腹に殆んど用を成していない様だ。

しばしの沈黙を破ったのはジョン・ドウの年若い手下(?)だった。

コンコンコン!。

「ボス!、よろしいですか!?。」

ジョン・ドウは一瞬私の方を見てから答えた。

「すぐに行く!、チョツと待ってる!。」

言ってから葉巻の火をもみ消した。

「すまねえな、客商売なもんでよ。」

と言いながら腰を上げかけた。

「……1つだけ良いかね?。」

「手早く頼むわ。」

「孤児院の子供達、全員がここで働いているとは思えないのだが？」

「……明日の午前中に来な、ちゃんと教えてやるからよ。」

そう言われては致し方無い、私はその場を後にした。

翌日の朝早く、私は“ジョン・ドウの店”の裏口に居た。

ジョンは“午前中”としか言わなかったが、それが妙に引掛かりこんな早朝に来てしまった。

しばらく待っている店裏口から数人の男女が出てきた。

「よーし！、皆いるな！」

その中にジョンも居た。

「全員忘れ物はねえな？」

「ハイ！」

「よし、それじゃあオメエらの学費稼いでんのが誰か、チャーッと考えて、しっかり勉強して来んだぞ！。分かったな！」

「ハイ！」

「そいじゃあ気を付けて行って来い！」

「ハイ！、行って来ます。」

そう言う若い男女の一団はジョンを残して街の方へ消えて行った。

「やあ、お早う。」

私はジョンに声をかけた。

「何でエ、居たのかい。」

「なかなか意外な物を見せてもらったよ。」

「チツ！、つまんねえとこ覗きやがって。他の連中にも言うなよ！」

「まあ良いが、街にはジョンを誤解している連中も居るんだがな。」

「へッ！、誤解ネエ。どうせ年寄り連中だろ？、若い頃散々迷惑か

けたからよ。」

「本当に今のままで良いのか?。」

「ガラじゃあネエのさ……。ま、立ち話もナンだ、へえんな!。」  
ジョンに促されて店の裏口をくぐった。

店の中で私が見た物は食い散らかした食事の後だった。

そのメニューたるやおよそ酒場には似つかわしく無い、トーストに  
マーマレード、スクランブルエッグにカリカリの焼きベーコン、オ  
レンジジュースに青菜のサラダ……。まるでホテルの朝食バイキン  
グだ。

私とその光景を眺めていると、

「朝飯未だならアンタもどうだい?。チビツと散らかっちゃいるけ  
ど、結構イケるぜ。」

とマーマレードをたっぷりと塗ったトーストを頬張りながらジョン  
が言った。

「……では、いただきます。」

私はトーストにカラシとマヨネーズを塗ってサラダとベーコンを挟  
みオレンジジュースでいただいた。

「へえー?、中々旨そうな取り合わせじゃねえか。今度オレもやつ  
てみるかな?。」

私はオレンジジュースのコップを持ち上げて応えた。

「それにしても未だ大分残っているな?。」

「アア、後口の連中がもうすぐ来るさ。」  
等と話していると、

「お早うございます!。あれ?、お客さんツスか?。」

また若い集団が入って来た。

「オウ!、お早う!。いつも通り適当に食ったら片付けとけよ!  
足らなかつたらミハル!、冷蔵庫の物で適当に作ってやんな!。そ  
れじゃあ、アンタはオレと来てくれ。」

“ミハル”と呼ばれた少女が「はい!。」と応えたのを背中越しに  
聞きながら、私はジョンと昨日の部屋に入った。

「ジョン、お前さんと孤児院にどんな関係が有るんだ?。」

ソファアに腰を下ろした私は、開口一番質問していた。

ジョンは例によって葉巻に火を着けながら、

「オレアあの孤児院に居たんだよ。もう20年も前の話だがね。」

葉巻を一吹かししてから続けた。

「アンタ昨日はオレの名前にケチ付けたケドよ、これ(ジョン・ドゥ)名無しの権べえ)が本当の名前なんだからしようがねえやな。」

私はタバコに火を付けながら黙って聞いていた。

「オレア親に捨てられたのよ、赤ん坊の時にな。名前の分かる物は無かったつてよ。そんでしようがねえから孤児院の方で捨てられた場所を本籍地にして今の名前を役所に登録しちまったつて訳さ。

登録証がネエと入院させらんネエつて事だよ。」

私のタバコがよほど効いているのか、ジョンは自分の生い立ちを聞かせてくれた。

「そうだったのか、昨日は済まない事を言ってしまった、申し訳ない。」

「ま、初対面だし、しゃああんめえよ。」

葉巻の灰を灰皿に落としながらジョンは話し続けた。

「今の院長がよ、オレの親友なんだわ。性格も頭の出来もまるで違つたけど、妙に気が合つてよ、アイツは回りの目も気にしねえで未だにオレなんかと付き合つてくれてんのさ。」

「なるほどなあ……。これで合点がいったよ。」

私もタバコの煙を一息吐き出してから言った。

「それで?、お前さんがやってるのはアルバイトの斡旋だけじゃ無さそうだが?。」

「アア、朝イチに出つた連中の事かい?。アイツラの半分はオレが身元引き受け人つてのに成つてんのさ。」

「?、院長が居るのにかい?。」

「ま、アンタにやわかんねか……。戦争直前の議会で未成年者保護法つてヤツが改正になつちまってよ、身元引き受け人が面倒見るの

に人数制限しやがってよ。」

「なるほどな……。すると？、アルバイトと言うのは？」

「アア、今下に来てる連中だよ。男は殆んど街の瓦礫掃除だな……、こいつらにも身元引き受け人が要るてんで、へへ、オレのダチに頼んだのさ。」

ジョンは意味ありげに笑ながら言った。

「その“ダチ”ってのは大丈夫なのか？」

「まあ確かにヤツは、あんまり“よろしく無い”部類だかよ、せつかく市民権を持つてるのにもつたいネエだろ？。それにヤツにヤカシがあんのさ。」

「で？、女子たちは？」

「ま、大体は“飲食店”に行ってるな。」

私はその“飲食店”と言う言葉に含みを感じた。

「飲食店……かね。」

「そつだ、飲食店だ。ある程度の器量がありやあどんなに頭が悪くたって何とかやってける商売さ。」

「……その事を院長は知ってるのかね？」

ジョンは葉巻の煙を肺一杯に吸い込み、ゆっくりと吐き出してから応えた。

「アイツからも言われたさ、“そんな事をやらせる為に育てた訳じや無い、お前に頼むんじや無かつた。”てな……。だけどよ、アイツが子供達に叱られたって泣きながらオレに詫び入れて来たのよ。」

「……。」

「私わ身を乗り出して話に聞き入った。自分達は学校に行けるほど頭が良くないから学校に行ってる者の学費を稼ぐんだってな。」

「チョツと待ってくれ、学費と言うのが奨学金はどうなっているんだ？。」

「奨学金か……もらってるよ、14人の中で2人だけな。何でも年間人数枠つてのが有るんだってよ。」

ジヨンは苦々しげに言った。

「それに今度の戦争だ、今もらってる分だって分かったもんじゃネエや。」

「そうか……院長としても背に腹は変えられないって事か。」  
私はいい加減短く成ったタバコをもみ消した。

「だがよ、」  
ジヨンにはまだ言い残しがある様だ。

「もっと悲惨な奴等もいるんだぜ。」  
「ウン?。」

新しタバコに火を付けながら私は聞き返した。

「こないだの空襲で親が行方不明に成った連中さ。」  
空襲、それは第二次地球降下作戦の一環として行われた連邦軍基地への攻撃の事だ。

ジオン軍は第一次降下作戦時に連邦軍による迎撃に会い多大な損害を被っていた。

その反省から実施されたのがその時の空襲なのだ。  
ジヨンは尚も続けた。

「行方不明じゃ保険も出やしねえしよ、孤児扱いもされやしねえ、市当局は分かかって死亡者発表してねえって専らの噂だ。」

「?、なんでそんな事に……?。」

「この市長はよ、保険会社の会長もやってのさ。それに基地の司令官が数字に汚え奴だよ“家の基地は被害がこんなに少なかつたんですよ”てなもんでよ……、死んでつた奴は浮かばねえぜ!。」

ジヨンは語気をあらげて虚空を睨んだ。  
しばらくの間沈黙が続いた。

(クソ!、アースノイドめ!)  
私は心の中で毒づいた。

「それじゃあ両親が行方不明に成った子供達はどうなってるんだ?。」

「殆んどの子供達は親類筋に頼って行つたよ。」

「殆んどの?。」

私は耳ざとく聞き返した。

「ああ、あと一組なんだがな、兄弟が残っちまってよ、避難所に居られるのも後半月位だったかな?。後はオレんとこに引き取るしかねえかとは思ってるんだが……若いのはともかくガキの相手なんざ出来ねえからなあ……。」

ジヨンは頭を抱えてしまった。

「あゝ、私の肩書きを忘れたのかね?。」

「アン?、そう言やあ戦災……なんとか基金とか言ってたなあ、死人が出てなくてもいいのかい?。」

「戦災相互基金だよ。もちろん大丈夫さ、もし両親が見つかったら低金利ローンに移行するし、死亡が確定したら保険会社から返してもらおうのさ。」

「チツ!、そう言やあ金貸しってたな!。」

ジヨンは見損なつたと言わんばかりにそっぽを向いた。

「そう言わんでくれ、一時金は返却義務の無い物だし、リサイクル型の簡易住宅なら直ぐに用意できるしな。」

「なるほどなあ……。」

ジヤンは私の顔を眺めながら考え込んだ。  
トントントン!。

「オジサン!、みんな食べ終わったよ。」

ノックの後に少女の声がした。

ジヨンを呼びにきたのだ。

「片付けは終わったのか?。」

「ウン!。」

「返事は“はい”だろが!。」

「あ!、は、はい!。」

「今行く!。済まねえな、チヨツと待っててくんな。」

「私も一緒に行って良いかね?。」

「好きにしな!。」

そう言う事になった。

私達が部屋から出ると少年少女達は身仕度を整えてジョンが来るのを待っていた。

いや、1人の少女だけ厨房に残って何かやっている様だ。

「良いかお前ら、孤児院と進学組はお前らの稼ぎにかかってるって事を忘れんじゃねえぞ！、分かってんな？。」

『はい！。』

「よし、今日も気張って稼いで来い！」

『はい！、行って来ます！。』

そう言うつと各々の手荷物を持って裏口から出て行った。

「中々の親父つプリじゃあないか。」

「ヨセヤイ！」

カウンター席に座って話をしていると、

「あの、コーヒー入れたんだけど……。」

厨房に居た少女がカップを2つトレイに乗せて持って来た。

「ああ、いつも有難うよ。」

「では私もいたごう。」

私達はそろって入れたてのコーヒーをすすった。

「そう言えば、昨日私に突っ掛かって来た若いのが見当たらなかった様だが？」

私はコーヒーを胃に流し込んでから言った。

「アア、アイツラは残りカスみたいなものだよ、頭はネエわ、根性はネエわ……何やらせても長続きしやしねえ、しょうがねえからオレんとこで面倒見てんだけどもどうにもな……。」

ジョンも空のコーヒーカップを置いてから答えた。

処置なしと言った表情だ。

「あの娘はここで働いているのかい？」

まだ厨房で何やらやっている少女を視線で追った。

「いや、さっき話した避難所の子供なんだが……。」

歯切れが悪い。

ジョンはまた黙って私を見始めた。

「非合法で良ければ……。」

私はジョンが何を思案しているのか察して話始めた。  
件の兄弟を私に任せて大丈夫かを悩んでいたのだ。

「行方不明者の事を調べられるのだから？」

「非合法……かよ？。」

「NGO（ノン ガバメンタル オーガニゼーション＝非政府組織）  
と言ったろう？、圧力団体でも有るんだよ。」

「そうだな、任せてみるか……。オオイ！、ミハルちよつと来い。」

「はい！、ちよつとまつて！、もうちよつとで終わるから。」

ジョンは何か言おうとしたが私は彼の肩を叩きそれを制止した。  
しばらくすると少女が厨房から出てきてジョンにメモを渡した。

「はい、これ、足りなくなってる分ね。」

「オウ。」

ジョンは素っ気なく応えた。

「コイツがミハル、“ミハル・ラトキエ”だ。こちらはジャン、  
戦災……あー。」

「戦災相互基金のジャン・バレットです、よろしくミハル。」

「は、はあ、よろしく……。」

ミハルは何が何だか分からないと言った顔でジョンと私の顔を見比  
べている。

「なあミハル、おめえ明日からこの人の所に行けや。」

「え！？、なんで……！？。」

ミハルはさすが様な目でジャンを見た。

「この人がおめえの両親の事、調べられるってよ。なあそうだよな  
？。」

「ええ、ただし正式に私の組織に登録してもらわなければならないよ。」

「ジョンと私の言葉を聞いて、ミハルは考え込んでいた。」

「君には兄弟が居ると聞いたんだが、私は君たちの助けに成りたい

んだよ。」

ミハルは私の顔を真つ直ぐな目で見つめた。まるで嘘を見透す様な眼差しだ。

「場所、何処ですか?。」

ミハルは心を決めたのである。

ジヨンの店を出た私は事務所に戻りトレーラーのカーゴから小型作業機“クラブマン・クレイン”を出して簡易住宅を組み立て始めた。クラブマン・クレイン、それは全高2m、総重量1.2t、2本の作業用アームを持つ二足歩行式の作業用機械だ。水素触媒を使用した燃料電池により連続3時間稼働させる事が出来る。

ふと辺りを見ると子供達が見物に集まっていた。

私はそれを意に介さず作業を続けた。

簡易住宅の組み立てが終わったところ騒ぎを聞き付けたのか警察官が二人現れた。

「やあ!、良い作業機だな、どこ製のだね?。」

警察官が話しかけて来た。

「さあ、私は法人の方から借用してるだけですから詳しくは知りませんよ。リーア(サイド6)から来た物ですからリーア製じゃあないですかね?。」

私はとぼける事にした。

実際リーア製と言う事に成っている。しかし内情は違っていた。

作業機“クラブマンシリーズ”はジオン公国のジオニック社が設計開発、販売していた製品だ。

ただしそれは3年ほど前までの話である。

ジオニック社は軍からの要請によりモビルスーツの開発をスタートさせた。

その時点を持って作業機の製造は月面都市グラナダの製造会社へと引き継がれたのだ。

名目上は製造および販売権の譲渡と成っているが、実はライセンス生産なのだ。

ここに有る機体に関して言えばグラナダで製造された部品をリーアの企業が輸入してノックダウン生産（組み立てのみの生産）した物をリーア製として地球に輸出しているのだ。

連邦政府によるサイド3への経済封鎖が施行されてから20年、そうした抜け道はいくらでも造れるものなのだ。

「フーン？」

警察官は胡散臭げに作業機を眺めている。

「なんでワザワザコロニー製なんだ？」

もう一人の警察官が私を睨みながら質問してきた。

「勘弁して下さいよ、私は法人の本部から引き渡されただけなんですから。それに地球製の作業機にはこんなコンパクトで使い勝手が良いのは有りませんでしたからねえ。」

警察官は二人とも後ろを向いて何やら話し込んでいる。

しばらくすると片方がこちらを向いて言った。

「邪魔して済まなかったな。続けてくれ。」

警察官達はきびすを返して帰って行った。

この辺りの人間は小型の作業機を見た事が無いのだろうか？。

太陽電池パネルの付設と上下水道の連結を終えたところには見物人はすっかり居なくなっていた。

日が暮れようとしている。

作業の後始末を手早く終えて、私は事務所で少し休む事にした。

私は久しぶりの肉体労働に疲れた身体をソファーベッドに横たえた。自分で感じたより余ほど疲れていたのか、いつの間にかうたた寝をしてしまった。

私はドアを叩く音で目を覚ました。

時計を見ると休憩に入ってからたっぷり1時間は経っていた。

私わ慌ててドアを開けた。

そこには少女が1人立っていた。

そう、“ミハル・ラトキエ”だ。

「やあ、どうしたんだい？、私はてっきり明日来るものと思っていたよ。」

「……………」

彼女は黙って私を見ていた。

「ここで立ち話もなんだ、中に入りたまえ。」

私は彼女を招き入れた。

事務所の接客用テーブルを簡単に片付けて、彼女をソファアに座らせた。

「この時間、表は寒かったらろう？、ミルクティーで良いかね？」

私はティーセットを出しながら聞いた。

しかし返事が無い。

振り返って見ると彼女はソファアに座っておらず、私からある程度の距離を置いて下着姿で立っていた。

自分のしている事を十分に理解して要るのだろう、脱いだ服を胸元で抱え込んで顔を伏せている。

「フウ……………」

私は頭を抱えてしまった。

「君は何をしているんだ？」

「あの……………ジョンオジサンが『せいぜい気に入られる様に頑張んな』って言ったから……………」

「ジョンの奴……………。君はそんな事しなくて良いんだ、早く服を着たまえ。」

私は後ろを向いてミルクティーの準備を続けた。

初めはこのまま帰そうかとも考えたが、悩んだ結果インタビューすることにした。

私は初めから何事も無かった様に話を進めた。

インタビューの結果、ミハル本人の年齢は15歳、現在一緒に居る

家族は9歳の弟と6歳の妹の合わせて3人兄弟だけで有ること、父親は軍の施設を維持管理する請け負い業者、母親は基地内のPX（購買）の売り子をしていて、行方不明当時はどちらも基地内部に出勤していた、と言う事である。

私はミハルと話して引つ掛かるものを感じていた。

大人への依存度が大きい、中でもジョン・ドウは特別な様だ。

それは元からの性格ではなく空襲と両親の安否不明がPTSD（心的外傷後ストレス障害）を誘発させたのだろう。

今のままでは大人達に利用されるだけの存在に成ってしまう。

私は腹を決めた。

彼女を利用される側から利用する側に導く、つまりはスパイとして養育すると言うことだ。

それは単なる同情か、事故満足、欺瞞なのかも知れない。

先ずはジョン・ドウへの依存を断ち切らねばならない。

私はミハルを伴ってジョンの店に行った。

裏口に廻ると若い男が2人しゃがみ込んで何やら話ながらタバコをふかしていた。

「あ……。」

2人を見たミハルは私の影に隠れた。

あの連中が苦手なのだろう。

よく見ると1人は顔のまん中、鼻にガーゼを当てている。

昨日私に突っ掛かってきた男だ。

「ここで待つて居なさい。」

私わミハルを少し離れた所に留め置き、2人に近づいた。

「やあ、今晚は。」

「あー、 teme……、あんたは……！」

途中で呼び方を変えたようだ。

「ボスと呼んできてくれんかね？」

私はわざと尊大な物言いをした。

こう言った手合いは一度負けた相手を立てる習性があるのだ。

「……………」

ガーゼの男はもう一人を伴い、無言で裏口の中に入って行った。しばらくしてガーゼの男だけが出てきた。

「今忙しいから中で待っていてくれって言った。」  
と、ぶっきらぼうに言った。

「いや、ここで待つと伝えてくれ。」

「……………」

男はコクツとうなずいただけで、また中に入って行った。

(本当に“ガキの使い”しか出来んなのだな。)

と、朝、ジョンから聞かされた言葉『アイツラは残りかす』を思い出していた。

またしばらくすると今度は男が2人で出て来て私の前を通り過ぎようとした。

「ジョンは何か言って無かったのか?。」

「好きになつてさ。」

男はそれだけ言うつと街の方に消えて行った。

「フウ、ガキの使いも出来んとはな……………」

私は呆れてつい声に出してしまった。

振り返るとミハルが肩を揺らして忍び笑いしていた、だが私が見ているのに気付くと一瞬ビクツと身体を硬直させた。

私がミハルの側まで行くとマスマスその身を固くした。

「可笑しければ笑っていて良いんだよ。」

「でも、怒られるから……………」

ミハルの心の傷は根が深い様だ。

「良いかい?、これからここで起こる事を目を逸らさずにしっかり見ていなさい。いいね?。」

「……………?、はい。」

ミハルがいぶかしみながらも承諾した事を確認した私は元居た場所、裏口の前行きジョンが出て来るのを待った。

私が“普通のタバコ”を靴底でもみ消し、新しい一本に火を点けた

時、裏口のドアが開いた。

「ヨウ！、待たせたな。で？、何の用だい？」

私はタバコ一息深く吸ってからゆっくりと煙を吐き出し、まだ長いタバコを踏み消した。

「今日私の事務所にミハルが来たんだが……。」

私はジョンの右肩を左手で掴みながら続けた。

「彼女に何を吹き込んだ！？。」

言うが早いか、私はジョンのみぞおちに右拳を叩き込んだ。

「ゲヘエ！」

私は、腹を抑えて前のめりに成ったジョンの胸ぐらを掴み、無理やり起こしてから言った。

「彼女はスラム育ちのアバズレとはちがうんだぞ！」

今度は膝をくれてやった。

ジョンは膝をついてまた腹を抑え込んだ。

私はしゃがんでジョンの髪の毛を掴み、顔を上げさせた。

「良いか！、ミハルに関わるなどは言わん、だが要らぬ入れ知恵はするな、分かったな！？。」

「クツ、ワアツタよ！、クソツタレが。」

ジョンは苦痛に耐えながらうめいた。

「用事はそれだけだ。」

私はジョンをそのままに、ミハルを連れてエレカに乗った。

ミハルがシートベルトをかけるのを待つて聞いた。

「兄弟が居るんだったね？。送るから道を教えてくれないか？。」

「ン、今の時間だともう避難所には入れないの。それにあたし、

……弟達には今日は帰れないかもって言って来たから……。」

「……そうか。」

私は車を出した。

道すがらミハルが質問してきた。

「あの、どうしてジョンオジサンを殴ったの？。」

「……裸で男を誘惑するなんて事を君の様な子に教えたからさ。君

の両親が死んでいるなら、そんな生き方も有るのだろうが、まだ行方不明の段階で教えるべき事じゃあ無い。それとな、ジョンに“オジサン”なんて付けるんじゃない。解ったね?。」

「……はい。」

ミハルは返事をすると思し黙った。

車がアジトの駐車場に停車した時、ミハルがまた質問してきた。

「どうしてジョンオジ……ジョン、の顔じゃ無くてお腹だけ殴ったの?。」

「奴も客商売だからね、あんな顔でも傷を付ければ問題が有るのさ。」

「

優しいんだね。」

「殴ったのにかい?。」

「フフ、そだね。……えと、何て呼べば良いの?。」

「そうだな……、名前はジャンなのだが、似た名前の奴も居るとだし所長とも呼んでくれたまえ。とは言っても私1人しか居ないんだがね。」

「うん。……あ、はい所長さん。」

「所長に“さん”は付けないものだよ。」

「ハイ。」

大分打ち解けてきた様だ。

私達はレトルトで簡単に夕食を済まして休む事にした。

簡易住宅は未だ泊まれる状態ではないので、ミハルは私のベッドで、私は事務所のソファークラウドで休む事に成った。

「さすがに女物のパジャマなんて無いから、私のアンダーシャツで勘弁してくれ。一応おろしたてだからね。」

「有難う。」

「寢室のドアには鍵が付いているから、不安なら掛けて寝なさい。」

「はい、お休みなさい。」

「ん、お休み。」

私はパツケージされたままのアンダーシャツをミハルに渡した。ミハルはシャツの封を破りながら寝室に入りドアを閉めた。

施錠の音はしなかった。

私は上着を脱ぎネクタイとカフスを外してから睡眠導入剤を残り物の白ワインで流し込んでソファベッドに寝転がった。

（さて、このままではいずれ私に依存する様に成ってしまうか……、適当な距離を置かなければ……な……。）

私はそのまま寝入ってしまった。

靴を脱ぐのを忘れていた。

朝、私は何やら良い匂いで目を覚ました。

時計を見ると6:30を少し回った所だった。

「あー、お早うございます。勝手にキッチン使わせてもらっただけど

……良いよね?。」

「ん?、アー、お早う。キッチン?、そりゃ構わんよ、何か作ってくれたのかい?。済まない。」

「あたしこう言うの慣れてるから。」

私に慣れるのは良いのだが、彼女の場合は相手への依存心に起因する行動だろう。

意識してかどうかは解らないが相手に気に入られようとしているのだろう。

「顔はもう洗ったかね?。」

「うん、シャワーも使わせてもらっちゃった。」

「そうか、じゃあ私もサツパリして来るか……。」

私がシャワーを浴びて髭を剃り、歯を研き終ってバスルームから出て来た時には、すっかり朝食の準備が整っていた。

メニューはバタートースト、レタスとオイルサーディン（鰯のオリブ油煮の缶詰め）のサラダ、目玉焼きにソテーしたベーコン、それにオレンジジュースだった。

いつもの朝食とくらべるとえらく豪華だ。

私は（冷蔵庫のスペースが大分空いたな……。）などとぼんやりと思った。

私達はその“豪華な朝食”を平らげて少しゆっくりしてからミハルの家からまだ使える家財道具を運ぶ事にした。

私がトレーラーの準備をし終えて事務所に入るとミハルが朝食の後片付けを終わらせた所だった。

私達はトレーラーに乗り込みミハルの家に向かった。

「1つ言っておく事が有る。」

運転しながら私は言った。

「明日から私の分の朝食は作らなくて良い。」

「え？、美味しくなかったの？。」

ミハルは不満気に言った。

「そうじゃない。君とは距離を置いて付き合わなければならぬのさ。」

「……？。」

私の言っている意味が理解出来ない様だ。

「君を助けようとしているのが私個人では無いと言う事を知っておいて欲しい。」

「……。」

ミハルは返事をせず、何か言いたげに私の横顔を見ていた。

「私に頼ると言う事は今後私と言う個人に負い目が出来ると言う事なんだ。それは私の所属する法人の望む所では無いのさ。」

「助けてくれるのはお金だけって事？」

「それでも無いんだが、何かをするには依頼を受けなければ成らないのさ。」

「依頼？。」

「そう、昨日の事はともかく簡易住宅と今日の引越しに関しては後で書類にサインをもらわなくてはな。」

「……そゆ事かあ。」

ミハルは難しい顔をして考え込んでいたが、とりあえず納得はしてくれた様でった。

ミハルの家は目抜通りから少し入った所のアパートだった。

労働者階層としては比較的良好な生活水準が想像出来た。

今はしかし、空襲の為4割方が崩れてしまった。

「ドロボー、入られてる……よね?。」

ミハルがポツリと言った。

「まあ、仕方ないさ。足りない物は後で買いに行こう。」

私達は各々がフラッシュライトを持ち家の中に入って行った。

中は外観から想像したよりも綺麗だったが、予想通り何者かの出入りした形跡があった。

ゴト!。

どこかで音がした。

「キッチンの方だ!。」とミハルが言った。

誰かが居るらしい。

私が先に成って音のした方へ向かった。

私はフラッシュライトを逆手に持ちバッテリー部分を肩の上に置いた。

ミハルに渡したライトは小型軽量で高出力な物だが、私が持っている物は長さ30cmのアルミボディにバッテリーが8本入り、警棒としても使用可能な頑丈な作りをしている。

私はいつでも警棒……もとい、ライトのボディを降り下ろせる体勢のままキッチンに入った。

「誰だ!、そこで何をしている!?。」

キッチンの棚を物色していた男達に光を当てながら叫んだ。

「な、なんだよ！、ポリの巡回はまだの筈だろ！？。」

「？、何でオマワリがこんな中まで入って来んだよ！？。」

二人は私を警察官と勘違いしたようだ。

「トニー？、それにヴィンセントも何で私ん家に居るのよ！？。」

男達の顔を確認したミハルが叫んだ。

「？、女？、誰だよ！？。」

男達は私達が警察官でない事を知り虚勢をはって叫び返した。

私にもミハルが“トニー”そして“ヴィンセント”と呼んだ男達の顔が確認出来た。

見た顔だ、それも最近。

男の1人は顔の中央にガーゼを貼り付けている。

「お前達か・・・この事、ジョンは知っているのか！？。」

「アア！？、誰だ？テメエ！。」

「声だけでは分からんか？。ミハル、ライトを上に向けて床に置いてくれ。」

「はい。」

ミハルが私の言った通りにライトを置くと部屋全体の様子が見える様になった。

私も“トニー”だか“ヴィンセント”だかの顔から光を外した。

「あ、あんたか、それにミハル？、何でココに居るんだよ？。」

「質問しているのはこっちだ！。それになあ、ここはミハルの家だぞ！！。」

「・・・ボスは知らねえよ、多分・・・。」

「多分・・・か？。分かった！、お前達は取った物を置いて出て行け！！。」

男達は手にした物とポケットの中身を置いて出て行った。

私達は他の部屋をざっと確認してから荷運び用の組み立てコンテナを家の中に運び込んだ。

ミハルは中で小さな荷物の整理を、私は崩れた壁からテーブルやベ

ツド等の大きな荷物を作業機を使って運び出した。

私は大荷物をあらかたトレーラーに移し終えてからミハルの様子を見に行った。

「中の具合はどうかね?。」

「……。」

ミハルは答えなかった。いや、答えられなかったのだ。

私はミハルが泣いているのに気が付いた。

「どうした!、怪我でもしたのか!?。」

私は駆け寄ったが、ミハルは無言で首を降るばかりだ。

私はミハルの視線の先に有る物を見た。

アルバムだった。

私はそっとミハルの肩に手を置き、アルバムを閉じた。

「さあ、少し休もう。そうだ、そろそろランチの時間だよ。車に行こう。」

「……。」

「父ちゃん、母ちゃん……。ネエ、所長!、父ちゃんと母ちゃん、

本当に探してくれるんだよね!。」

ミハルは思い詰めた目で私を見て言った。

「結果を知る方が辛く成るかも知れない、それでも良よければ……

だが?。」

ミハルは目を伏せて、だがはつきりとうなずいた。

「分かった。さあ、食事にしよう。」

私はミハルを立たせて表に誘った。

ミハルは少し、閉じたアルバムを見詰めてから私に振り返り歩き出した。

した。

私達は昼食(朝ミハルが用意した物だ。)を食べ、軽く休憩を取ってから約3時間で作業を終えた。

「今日はこのぐらいで良いだろう。必要な物が有ればまた取りに来

れば良いさ。」

「うん。」

私達はミハルのアパートを後にして避難所に向かった。ミハルの兄弟達を迎えに行くためだ。

「大物の搬入以外は私は手伝わないからね。荷ほどきは君たち兄弟でやってくれよ。」

私はわざと突き放す言い方をした。

「分かった。」

泣き出すか、と思ったがミハルは決然と言つてのけた。

いよいよ自分たちだけで生きて行く覚悟を決めたのだろう。

（よし、強い娘だ。）

私は嬉しかった。

避難所に着いて、私は出所手続きを、ミハルは間借りした部屋の片付けを兄弟達としていた。

「代理人のサインはここで良いですね?。」

「ええ、そうそこで結構よ。で?、あなたラトキエさんとの関係は?。」

「……【財団法人戦災相互助け合い基金】の者です。」

「あらず。じゃ、後はお願いな。」

やれやれ、やっと片付いたと言わんばかりにその女職員は私から書類をむしり取って行った。

（これが連邦の実態か……。）

私は呆れてしまった。

「さ!、ジル!、ミリー!、挨拶しなさい。こちらがあたし達の為に色々してくれてる“助け合い基金”の所長さんよ。」

「やあ!、名前はジャン・バレットって言つんだ。面倒なら“所長”でも“所長さん”でも好きに呼んで良いからね。」

ミハルは自分が所長“さん”と紹介したのに気付いて口を押さえて首をすくめた。

私はそんな様子をみて

（“所長さん”決定だな、これは……。）

と内心溜め息をついた。

「こ、こんにちは……。」

「コンニチは……。」

幼い兄妹は初めて会った私にオドオドしながら挨拶した。

「やあ、こんにちは。さあ、乗りたまえ、君達の新しい家に行こう。」

「

私は子供達を全員後部座席に乗せてトレーラーを発進させた。

家に着き荷物を搬入し終えてから簡易住宅のカギをミハルに渡した。

私は朝の約束通り別々に夕食を済ませてから出かける事にした。

ジョンに確かめなければならぬ事が有るのだ。

今回は店の入り口から入った。

ジョンは一瞬だけ嫌な顔でこちらを見たがそこはプロである。

直ぐにポーカークフェイスを決め込んだ。

私がカウンター席に付くとジョンは近寄って来てオーダーを取る代

わりに言った。

「昨日のこたあ貸しだからな、いいな。」私の意図した事を解っているのだ。

「さて、どうした物かな……。」

私はわざとらしく含みの言い方をした。

「何なんでえ、そいつあよお。」

「トニーとヴィンセントって言ったな？」

「なんでアンタがあの人2人の名前を……？、アア、ミハルから聞いたのかい。で……？。」

「まあな。……あの2人な、昼間何をやってるか知ってたか?。」  
「ん〜?、さあてなあ、俺あ知らねえよ。」

私が真つ直ぐにジョンを見据えていると、ジョンは視線を游がせた。  
「やはりな……。」

「そう言やあ2人とも今日は顔出さねえなあ。」

「今日はミハルの家の引越したんだが、何故か2人が居てなあ。」

ジョンの顔色が変わった。

「……それで?。」

「家の中を勝手に物色していたんで注意して返したよ。」

「……。」

ジョンは内心ホツとしたようだ。

「警察に突き出しても良かったんだが……、これでは借りを返した事には成らんかね?。」

「チツ!、足元見やがって、勝手にしろ!。」

「有難うよ。」

これで貸し借りはチャラに成ったようである。

私が事務所アジトに戻ってみると入り口の前にミハルが座って待っていた。  
私が近づくと伏せていた顔を上げて私を真つ直ぐな目で見つめた。  
「用が有るならドアにメモでも挟んで置けば良かったんだが……、  
どうしたね?。」

「父ちゃんと母ちゃん、探すのって難しいんでしょ?。なんかアタシにも出来ること無いかなんて思って。」

「……、入りたまえ。表で話す事じゃあ無い。」

私はミハルをソファーに座らせてお茶を煎れた。

「またミルクティーで良いね?。」

ミハルにお茶を出しつつ私は彼女の正面に腰を降ろした。

「で？、ジョンからはどんな風に聞いているんだい？」

「うん、役所と軍がグルに成って隠してるんだから正面からは無理だろうって。ヒゴーホー？で調べるしか無いだろうって。」

「まあ、その事に関してはこれから調べて見なければ分からないのだがね。合法で行ければよし、で無ければ非合法でも致し方無いだろうな。」

「ヒゴーホーって良くない事なんですよ。大丈夫？」

「ま！、下手をすれば逮捕だろうが……。」

「そんなのダメ！！。」

ミハルが突然叫んだ。そして手で顔を覆い泣き出してしまった。

私はハンカチを渡しミハルが落ち着くのを待った。

「どうしたんだい？、私の事は気にしなくて良いんだよ？」

「エ、グ、だつて、ジョンが、言つてた……、アイツ、ジオンだ、で、ただじゃ、済まないって。」

ミハルはそれだけ言うのがやっとだった。

(この娘は、私の素性を知った上で私を心配してくれると言つのか……。)

私の中でミハルと言う少女の存在が大きく変化し始めた。

「……手伝ってもらいたい事は山ほど有る。それに手伝ってもらつために教えなければ成らない事もね。」

ミハルはハツと顔を上げた。

「……！」

「さあ、分かつたら今日は帰って寝なさい。小さな兄弟達が待っているよ。」

「うん……、ウン！」

最後は元気よく返事をして笑ってくれた。

「よし！、じゃあお休み。」

「お休みなさい！」

言うが早いかミハルは事務所を後にした。

( さあ！、明日から忙しく成るぞ！ )  
私の顔もいつの間にか笑っていた。  
大きな歯車が回りだした様である。

ドアの呼び鈴が鳴ったのは朝食を済ませてコーヒーを煎れている時だった。

「アチツ！」

お湯を少しこぼしてしまった。

アンダーシャツにスラックスを履いただけの私はポットをキッチン  
のテーブルに置き、急いでワイシャツを着た。  
ドアを開けるとミハルが立っていた。

「やあ！、おはよう。今コーヒーが入った所なんだが一緒にどうか  
ね？」

「おはようございます。はい、いただきます。……所長さん？、背  
中、出てますよ？」

( しまった。 )

ミハルがイタズラっぽく笑っている。

「ああ、有難う。座って待っていたまえ。」

私はキッチンの角で身なりを整え、コーヒーをカップに移して応接  
用のテーブルに運んだ。

「さて、私は今日から行方不明者についての調査を開始する訳だが、  
先ずは正面から合法的に調べるつもりだ。だからまだミハルの手助  
けは要らないんだ。」

「えっ！？、でも……。」

ミハルは咎める様な目で私を睨んだ。

「ただ、その間に覚えておいて欲しい事が有るんだよ。だがその前  
に……。」

私は話を切ってコーヒーを一口飲んだ。

ミハルは身を乗り出して話を聞いている。

「一つはつきりさせておく事が有る。つまり私がジオン軍のスパイだ、と言うことなんだが……、それを手伝う事ががと言う事か分かってるのかね?。」

ミハルは少し考えてから、

「アタシは、父ちゃんと母ちゃんの事が分かればそれでいいの。」

「それだけでは済まんのだよ。」

「アタシにもスパイに成れって事?。」

「そこまで分かっているなら話が早い。どうかね?。」

「でも、それは……。」

考えがまとまらない様だ。

「分かっているさ、君の様な娘に戦争の手伝いをさせる……、ジヨンを責められやしない。いや、それ以上の悪党だな、私は。」

しばし沈黙が続いた。

「ではこうしよう。」

沈黙を破り私は話を切り出した。

「今回はあくまでも“手伝い”と言う事にしよう。」

「手伝い?。」

「そうだ。良くも悪くも、結果が出た所で終わり。その後についてはその時に決めよう。それでどうかね?。」

「うん、それなら良いよ。」

「よし、決まりだ!。まずは正攻法で行く為の“調査依頼書”にサインをしてくれ。」

私は昨夜作成した紙をミハルに渡した。

「ここに書けば良いのね?。」

「そう、日付は今日なので……、OK!。それではこちらへ……。」

ミハルを地下室へと誘った。

「うあゝ！、なにこれ……。」

地下室の様子を見てミハルは呆然と成った。

上の家より確実に広いのだから当然の反応だろう。

「今必要な物を用意するから座って待っていてくれ。」

私はミハルを折り畳み式のパイプ椅子に座らせて道具類の入った棚から腕時計型の超マイク口波通信機とモールス信号の符丁表、高解像度の小型ポラロイドカメラ、盗聴器、ノクトビジョン付きの双眼鏡、小型のハンドガンとその模擬弾、それら総てが収納出来るジューラルミンケースを選び出した。

「取りあえずは……、こんな物だろう。」

「アタシ、ピストルなんて撃った事無いよ?。」

「だろうな、だから訓練してもらおう訳さ。」

「必要な?。」

「使わないに越した事は無いんだが、もしも必要に成った時に使えないでは話にならんからね。」

ミハルは辺りを見渡してから言った。

「あの、訓練ってここですか?。」

「ああ、そうだよ。しばらくは隠ってもらおうよ。」

「えー?。」

「これがカリキュラムだ。それとこの合カギも渡しておこうな。」

私は学習予定表と合カギをミハルに渡して出かける準備を始めた。

「でもピストルは?。」

「そのタマは模擬弾と言って人に当たってもかすり傷程度しか付かないんだよ。ましてやコンクリの壁には傷も付かないさ。」

ミハルは諦めた様子で予定表のトップ、通信機のマニュアルを引っ張り出し、読み始めた。

「じゃあ頑張つてな。」

「イッテラッシャーイ。」

ミハルの不機嫌な声を聞き流して私は出かける事にした。

私は先ず役所の住民課を訪れた。

「お早うございます。私、こう言う者ですが公開資料の閲覧を申請したいのですが……。」

私は言いながら受け付けの婦人に法人名義の名刺を渡した。

「……、ふん戦災相互助け合い基金ねえ？、あなたここの市民じやあ無いんでしょ？」

「いえ、先日転入届けは出しましたが。」

「まだ1ヶ月経って無いでしょ。じゃあダメね。」

「市民の方からの調査依頼を受けています……。」

私は今朝ミハルに署名してもらった調査依頼書をミハルのIDのコピーを添えて差し出した。

「ちよつとまつて下さいね。」

受付嬢（と言うよりオバサン）は私の出した書類を持って自分の上司の所へ行った。

しばらく待って居ると奥で動きがあった。

件のオバサンの上司が出て来るものと思ったがその上司は奥の階段を昇って行ってしまった。

自分では判断が出来ない様だ。

（ふん、典型的なお役所仕事か……。）

私はそんな様子を冷ややかに見ていた。

もうしばらく待たされる様だ。

所長“ジャン”が出掛けてからミハルは自習を続けたが、何か奇妙な感覚に戸惑っていた。

（何たる、学校の授業より面白い？。）

ミハル自身は特に機械に強い訳では無かったし、マニュアルは分厚

く、開くのもためらわれる程なのだが……。  
カリキュラムを進める内に気が付いた事が有る。  
1つの課題が約15分から長くても25分程度で終わる様に作られているのだ。  
反復練習が必要な課題にはチェックシートに5本線の星形（、日本で言う正の字）を書いて行き、進み具合が一目で分かるように成っていた。  
つまり、集中力が切れる前にリセットされると言う事なのだ。  
「あ！、イツケナイー！！。お昼ご飯作らなきゃ。」  
教材その他をそのままに、ミハルは慌てて地下室を出て行った。  
気付かない内に正午に成ろうとしていた。  
弟達が腹を空かせて待っているのだらう。

たっぷり3時間以上は待たされた挙げ句、私が聞かされた答えは……。

「部署が違います。この内容だと“災害対策課”の方に成りますね。あと午前中の受付は11時30分までですよ。午後は13時からに成りますからね。」

いかにもな“お役所仕事”である。

私は“災害対策課”の場所を確認するために行ってみる事にした。場所を示した案内図にはそれらしい表示が見当たらなかったのでエントランスに戻って確認した。

「ああ、“災対課”なら入って直ぐ左に曲がって突き当たりの階段を下に行った所です。行けば直ぐ分かりますよ。」  
との事だ。

「有難う。」

私は一応礼を言いその場所へ向かった。

そこは地下の“書類保管所”の一画をパーティションで無理矢理区

切ったブースにデスクと椅子、電話がそれぞれ1つずつ置かれただけの急拵えの部署だった。

担当者も確認したいと思つて来てみたが不在の様だ。

来客用の椅子も無く私は所在なく立っていた。

「午前中の受付はもう終わったよ。」

私の中から男が声をかけてきた。

その男は白髪混じりのボサボサ頭をかきながら自分の席に着き、上の階から持つて来たマグカップのお茶を一口すすった。

「上でもそう言われましたよ。場所だけでも知つておこうと思ひましてね。」

「フーン……、ご苦労さん。大概はそれで帰っちゃうんだけどね。」  
まるでやる気の無い態度で男はお茶を飲んでいる。

「じゃあまた、時間に成つたら来ます。」

私は出直す事にした。

昼食が済むとミハルはまた地下室へ戻った。

改めてカリキュラムの予定を見ると座学は午前中で終っていた。

「え？、何これ……？、麻袋で土嚢を1個作つてここまで運ぶの？。」

「訳が分からず明日の予定を覗くと……。」

「明日は2個で、明後日は3個……、だんだん増えるの？。」

いつまで続けるのか不安になり予定の紙を捲つて行くと7日目までで終っていた。

「フウ、ま、いつか。」

取りあえずは1個だけ作つて地下室に運び込んだ。

庭の土は意外に硬く掘るのに苦労した。その上麻袋はかなり大きく土が入ると20kg以上にも成つて運ぶのにも苦労した。

「これ、毎日増えてくの〜!?!?。」

相当疲れたのか椅子に座るとテーブルに突っ伏してしまった。

私は役所の近くに店を出していた屋台でチップアンドフィッシュを注文した。

他のカフェ等は店が壊れたりして休業状態でその代わりに屋台が並んでいるのだ。

「景気はどうだい？」

私は情報収集も兼ねて屋台のオヤジに声を掛けた。

「良いわけ無いだろ。」

「商売仇が減ったのにかい？」

「そりゃそうだがよ、こう物価が上がっちゃまっちゃってけねえや。」

「フーン、あれかい？、運送費のせいかい？」

「そんだけじゃねえよ、TAX（消費税）が上がっちゃまってよ。…

…はいよ！」

「ああ、有難う、これで足りてるかい？」

「10セント足らねえな。」

「んじゃあこれで。」

「ちよつと待ってな……、アー今度はこっちが足らねえな。」

「じゃあ釣りは取っといてくれ。」

「そうかい？、悪いね。」

私はオヤジから新聞紙で作った包みを受け取り、別の屋台からソフトドリンクを買いジャンクフードを胃に流し込んだ。

この街の役所はかなり好き勝手しているらしい。

ミハルは冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出し何度か喉を鳴ら

して飲み、ボトルのキャップを閉めた。

そしてテーブルの上に乗っている物体をシゲシゲとながめた。

そこには小型のハンドガンが置かれていた。

次の訓練はそのハンドガンの手入れ、つまりは分解組み立てなのだ。

「ハーツ、アタシこんなの触った事無いんだけど……。」

説明書は午前中に読破して理解はしているのだが、いかんせん嫌悪感が先に立って触るのが嫌なのだ。

ケースから取り出すのがやっとだった。

ミハルはそれを取り出した時の感覚を思いだし自分の手のひらに視線を移した。

それは表面に防錆処理の為、ポリマーコーティングが施され黒と言うよりはダークグリーンに見えた。

思ったほど冷たくは無かった。

そしてその小さな外觀（全長12cm、全高10cm）から受ける印象より遥かに重かった。

そのズツリとした感触がまだ手に残っている。

（こんなので人を殺せちゃうんだ……、嫌だな。）

人の死と言うものを身近に感じられる今だからこそ、なおさらな拒絶反応なのだろう。

もし平常時なら簡単に手に取りゲーム感覚で撃つことが出来たであろうから……。

ただ時間だけが空しく過ぎていった。

私が“災害対策課”の受付前に着いたのは13時になる5分前であった。

担当の男はデスクに突っ伏して、あまつさえいびきをかいて眠っていた。

（まったく、緊張感の欠片も無い。）

今日、私は何度呆れなければ為らないのだろうか？。

時計は13時を回ったが目覚ましが鳴るでも、無く男は起きる気配すら無かった。

「そろそろ起きて欲しいんだがね!!。」

私は地上階まで届く程の大声で話し掛けた。

「アワア!。」

よほど驚いたのだろう、男は椅子から転げ落ちそうな勢いで跳ね起きた。

「やあ、お早う。」

「なんだアンタか、びつくりさせないでくれよ。」

「そろそろ仕事を始めて欲しいんだがね。」

私は自分の腕時計を示しながらわざとヒステリックな言い方をした。

「スマン、また寝過ぎしたか……。で？、どんなご用で?。」

「今回の空襲による人的被害の調査報告書を閲覧、コピーさせて欲しいんだ。で、私は代理人で代行依頼書がこれで本人のIDのコピーがこつちだ。」

私は矢継ぎ早に書類を押し込んだ。

男は目を白黒させながら書類を確認して、

「問題は……、無しか。ちよつと待つて下さい。」

そう言うつと資料倉庫の中に消えて行った。

男が私の前に戻って来るまでの間に60分以上の時間が過ぎていた。

「ハイこれね、お待たせさま。これコピーだから持つてって良いですよ。」

出てきた書類を見て私はまたもや呆れてしまった。

アレだけの時間をかけて今日の前に有るのはプリントアウトされた5枚程の束だった。

「原本の閲覧もさせて欲しいんだが。」

私は出された資料に一通り目を通してから言った。

「悪いが決りだね、部外者にはコンピュータを触らせられないんだ。」

「私が操作しなければ問題無かるう?。」

「ワツシにオペレーターをやれと言うのかね?。」

「別にアンタじゃなくても良いんだが、他に誰も居ないんじゃないやあ仕方ないだらう?。」

「ワカリマシタ!、じゃ、こつち来て下さい。」

男は投げやりな言い方で“ワカリマシタ”を言ってから資料倉庫の奥に有る端末機へ案内してくれた。

「どの位まで見たいんだね?。」

席に着きながら聞いてきた。

「取りあえず全部だ。」

「ッ!、全部!?。本気かね?。何時間かかると思っているんだ!」

「必要が無ければ飛ばして見るからそんなに時間はかからんさ。」

「ハア!、こちらへドウゾ。」

大きく溜め息をついてから資料倉庫の奥に私を招き入れた

「後ろに折り畳みイス有るから使って良いよ。」

私達は端末機の前に並んで座った。

私は必要性を感じた物だけをプリンターへ回し、 unnecessary ファイルはどんどん閉じて言った。

最終的に受け取った書類の5倍近い資料を30分程で揃える事が出来た。

「ほら、早かつたろう?。」

私が揶揄すると男は1つ咳払いをした。

「ウオホン!。手数料は15\$に成ります。」

「はい、……はいこれで、領収書をお願いします。」

そんな訳で必要な資料のコピーを揃えるだけでほぼ1日を費やしてしまった。

連邦の官僚主義は予想を遥かに上回る怠惰ぶりを私に見せてくれたのだった。

私が事務所に帰り着いた時ミハルはハンドガンを遠巻きに眺めている最中だった。

「ただいま、……？、どうしたんだ？」

「うん……、あれってホントにやらないとダメ？」

ミハルはテーブルの上に視線を送りつつ言った。

「何か問題でも有るのかい？」

「あれって人殺しの道具でしょ？。だから……。」

「そうか……、じゃあもう一度話をしようか。」

私は折り畳みイスを出してミハルの目の前に腰を下ろした。

私は両腕を自分の太ももの上に置き若干前屈みに成りながら視線をミハルと同じ高さにかけていてから話し出した。

「そう、あれ（ハンドガン）は人を殺す道具だ。だがミハルの様に非力な存在が他者から身を守る為に使うにも非常に有効な道具でも有るんだよ。」

「でも！、それでアレを使っちゃったら殺しちゃうじゃない。そんなの、ヤダよ！」

「優しいんだな、ミハルは……。だから、家族に……、あの小さな弟達に危険が迫った時はどうするつもりだね？」

「それは……。」

ミハルは言い淀んでしまった。

「良いかね？、今この時この場所は、つい数日前までとは別の世界だと思いたまえ。」

「え？。」

「同じ土地、住んでいる人も大体同じ、だが状況が違っているのさ。つまりは戦争って事だ。」

「戦争……。」

ミハルの表情が少しずつ強張って来た。

私は立ち上がり壁に貼られたチェックシートを見た。

「今日はもう帰りなさい。そして良く考えなさい。」  
私はそう言ってからミハルを残したまま地上の事務所に上がった。  
ミハルは顔を強張らせたまま恐る恐るハンドガンに近付いて行った。

「やはりな……！、穴だらけだ！」

役所から持ち帰った資料を調べながら私はつい独り言を言っていた。  
有るべき所の文章が削除されてしまい資料の意味が分からなく成っ  
て要るのだ。

結論がどの様にして導き出されたのか、データの改竄やごまかしが  
有ったのかどうかもこれでは確かめ様が無かった。

最初に渡された5枚の資料だけがそれなりの体裁を保っていた。

「なるほど、これだけしか渡したく無い訳だ。」

つまり担当職員はこの事を分かっていたのだ。

「これは根が深そうだな。」

私が考え込んでいると地下階からミハルが上がって来た。

あれから2時間近く経っていた。

ミハルの手はガンオイルで汚れ、いくつも擦り傷を創っていた。

なれない手で必死に銃の分解組み立てを繰り返した事が分かる。

「所長さん、アタシやるよ。弟と妹はアタシ……、アタイが守るし  
か無いんだ！」

私が声をかける前にミハルは絞り出す様な声で、しかし決然と言っ  
てのけた。

ミハルは私を真正面から見ている。

そこには、かつて大人に媚を売り庇護を求めてきた少女の姿は無  
かった。

「そうか、分かった。」

私がそれだけ言うとミハルは弟達の待つ場所へと帰って行った。

私は今ジョンの店に来ている。

ミハルが事務所から出て行った後、資料のまとめを中断してここに来たのだ。

「今夜はどうしたね?。」

ジヨンは“いらっしやいませ”の代わりにそう聞いてきた。

「コイツを見てくれ。」

私は数枚の写真をカウンターのの上に出した。

「アアン?、こりやおメエ、役所の連中じゃあねえか、コイツ等がどうしたんだ?。」

「いや、この中に顔なじみが居やしないかと思ってね。」

写真には住民課の受付とその上司、さらにその上役、災害対策課の担当者が映っていた。

ネクタイピンに仕込んだカメラで盗み撮りした物だ。

「顔なじみって言うか知り合いならコイツだな。名前は“サム・メイスン”だ。」

ジヨンが私に示した写真には災害対策課の担当者が映っていた。

「“サム・メイスン”……、どんな知り合いなんだい?。」

「リトルスクールの同級生さ、もっとも同じ街に住んでいてここ10年話もして無えけどな。」

「住所か電話番号は分からないかな?。」

「ちよつと待つてな!。」

ジヨンは奥の部屋に入って行った。

しばらくすると何やらアルバムのような物を持って現れた。

「へへ、ちつとばかり恥ずかしいんだがよ、リトルスクールの卒業アルバムだ。」

「ふん、見掛けによらず物持ちが良いんだな。」

ジヨンと言う男の以外な一面を垣間見た気がした。

「何だか捨てられなくてなあ、ガキの頃の写真なんてこの位しか残って無えからよ。」

ジヨンは照れくさそうにしながら巻末を開き住所一覧のページを出した。

「おう、これだ。“サム・メイスン”。」

「どれ……？、OK、後は住所が変わっていない事を祈ろう。」

私は手早くメモをとってカウンターの上の写真を懐に入れた。

「で？アンタ、マジで何かおっ始めるつもりなのかい？。」

「フフ、これ以上ジョンに迷惑はかけんよ。」

「いやいや、そうじゃねえ。事によっちゃ俺も一枚噛ましてもらおうかと思っつてな。」

「……本気か？。」

「聞いたぜ、アンタ“クラブマン”のチッコイ奴持ち込んでんだろ？。2級免許持っつてんだよ、俺あ。何かと使えるぜ？。」

「ほう……。」

私は少し考えてから答えた。

「その時は声をかけさせてもらおうよ。」

「へへ、待ってるぜ。」

私はジョンの店を後にした。

夜が明けた。

事務所に帰った私は役所から持ち帰った資料を基に質問状の作成に取りかかった。

気が付くと朝に成っていたのだった。

「フウ、大体こんな物かな？。」

入れたてのコーヒーを飲みながら最後のチェックをしている時にミハルがやって来た。

「おはようございます。」

「やあ、お・は・よ……う。」

私が大きく伸びをしながら“おはよう”を言うとミハルは目を丸くした。

「どうしたの？、もしかして徹夜？。」

「ん、ちよつと急ぐ事に成ったんでな。そうだ、昨日の報告がまだだったな、ソファーに座って待つてなさい。」

私はカップに残っていたコーヒーを飲み干してバスルームで手早く顔を洗った。

2人分のコーヒーカップと資料の束をテーブルの上に置きながら私は話始めた。

「結論から言うた、調査はしたが誰かが握り潰したって事なんだ。」

「え？、それって誰が？」

もつともな疑問である。

「それをこれから調べるのさ。その為の“武器”がついさつき完成したんだ。」

私は“公開質問状”と書かれた書類をミハルに見せた。

「この書類が武器に成るの？」

「そう、コイツが切り札に成るのさ。だが、その前にやっておく事が有ってね、すまないがコイツにサインをしておいてくれないか？」

私は“公開質問状”を3枚ミハルに渡した。

「？、同じのが3枚？」

「そうだ、最低3枚は必要なんだ。それじゃあ私は仮眠を取るからサインし終わったら私のデスクに置いて、地下室で訓練を始めてくれ。」

それだけ言つて私は寢室に向かった。

1人残されたミハルは仕方なさげにサインを記入していたが、ふとその“公開質問状”の内容に目を通して愕然とした。

「何よこれ……ジュニア・ハイの子供を相手にしてるんじゃないの？。」

ミハルから見ても明らかに低レベルなのだ。

実際には役所の隠し方があまりにあからさまなので質問状の内容もレベルを下げざるをえなかった、と言う事なのだ。

「何で大人達はこの事黙ってたんのよお。」

ミハルはそこまで言ってからジャン（所長）の言った“握り潰された”と言う言葉の意味に思い当たった。

「そっか、誰も恐くて言えないんだ。所長さん、本当に大丈夫なのかな？。」

しかし今のミハルには心配する事しか出来ないのである。

私が起きたのは8時30分頃だった。

ミハルが来たのが7時でしばらく話をしてから仮眠に入ったので大体1時間程眠った事になる。

私はシャワーを浴びようと寝室からリビングに出るとミハルはまだソファアに座っていた。

「？、どうした、分からない事でも有るのか？。」

「所長さん、1人で大丈夫なの？。」

初め私は何の事が分からなかったが、ミハルの手元にまだ“公開質問状”が有るのを見て理解した。

「まだ大丈夫だよ、その為に3枚準備したんだからね。後はそれ（質問状）の答えが帰って来るまで少し暇に成るから少しは君の訓練に付き合う事が出来ると思うよ。」

「残りの2枚が保険に成るって事？。」

私が思っていたよりミハルは頭の回転が早いようだ。

「そう言う事だ。分かったらソイツを私のデスクに置いて訓練を始めてくれ。」

そう言い残して私はシャワーを浴びる為にバスルームへ入った。

ミハルは少しだけすねた様な顔をして無言で地下室へ降りて行った。

バスルームから出た私はデスク上に置かれた3枚の“公開質問状”を並べ、隣の紙との会わせ目に公証用の割り印を押した。ちよつとミハルのサインの上に被さる様に見える。

さらに割り印の押された書類3枚を割り印が合わさる様に並べて写真を撮った。

これでこの3枚が同一の物である証拠が確定したのだ。

その内の1枚と昨日役所から持ち帰った書類のコピーを封筒に入れ、となり街から小包扱いで発送した。

行き先は“ロイター通信社”ヨーロッパ支社在席の編集者だ。

旧世紀から続くマスコミの中では最高レベルの信用度を誇り、第三者としてのスタンスを崩す事は決して無かった。

政府関係者にとっては嫌な相手なのだ。

私は発送手続きが終わってから電話をかけた。

『はい、こちらロイター通信社ヨーロッパ支社です。』

「私、【財団法人戦災相互けい基金】の西ヨーロッパ支所のジャン・バレットと申しますが、ベネット・オマリーさんはいらっしゃいますか？」

『すみません、法人名をもう一度ゆっくりお願いします。』

「はい、良いですか？ “財団法人”、“戦災”、“相互”、“助け合い”、“基金”、はい、そうです。ジャン・バレットです。」

『ベネット・オマリーですね？、少々お待ちください。』

「はい、よろしく願います。」

目的の人物は在宅の様である。

『はい、ベネット・オマリーですが、“ジャン・バレット”さん？。どの様なご用件ですか？。』

「初めまして、ベネット・オマリーさんご本人ですね？、リア（サイド6）支社の“ジェイソン・フジタ”さんからの紹介でして…

「……」  
『ジェイスンの！？、奴は無事なんですね！？。アア、失礼しました、開戦からこっち上との連絡が規制されちまって心配してたんですよ。』

「安心して下さい、彼は無事です。私が下（地球）に降りると言ったら各支社の連絡先と親しい編集者の名前を教えてくださいましてね、何とか無事にやってるから心配しないで欲しい。」との事です。  
『いやー、そうでしたか！、わざわざ有難う御座います。』

「それで本題の方ですが……。」

『アア！、これは、取り乱してしまつて申し訳ない！。』

「ではよろしいですか？、実は今“ベルファスト”に事務所を開設したのですが……、場所はお分かりになりますか？。」

『“ベルファスト”ですか？、軍港の街ですね？。』

「はい、そうです。そこで空襲時の行方不明者について調査をしているのですが、どうも軍と行政が結託して死者の数を改竄している様なんです。それで役所から発行された資料と私が作成した“質問状”をそちらに送りましたので先ずはご覧に成つて下さい。」

『成る程……、分かりました、そちらの連絡先は？、……はい、はい分かりました。それでは物が届いたらこちらから連絡しますのでそれまで“公開質問状”の役所への提出は待つていただけますね？。』

「了解しました。それではまた。」

私は電話を切つて帰路についた。

時刻が12時を過ぎようと言う時、私はアジトに帰り着いた。事務所のカギを開けようとすると、ちょうどミハルが内側からドアを開けた。

「ワアツ！、し、所長さん！？。びっくりさせないでよ！。」

「やあ、ただいま、済まなかったね。これから食事かい?。」

「うん、そう。弟達が待つてるから。」

「そうか、午後暇に為ったから訓練に付き合えるよ。」

「ほんと?!、良かったア。じゃ、また後で。」

「ああ、急がなくても良いからね。」

ミハルは私の最後の言葉に後ろを向いたまま片手を挙げて応え、そのまま自分達の家に飛び込んで行った。

「やれやれ、騒々しい娘だな。」

最初の印象からは想像出来ない程の変わり様だ。

私は冷蔵庫の中の有り合わせで昼食を済ませ、皿を食器洗浄機に放り込んでスイッチを入れた。

食後のコーヒーを飲んでいる時にミハルが土嚢を抱えて事務所に入ってきた。

「ネエ、所長さん!、これアタイ1人でやしないとダメなの?。」

私を咎める様な目付きで聞いてきた。

「いや、時間を短縮したいから私も手伝うよ。」

コーヒーをのみ終えて作業着に着替え、私は5個ほど土嚢を作り、

地下室へと運び込み奥の壁に並べ置いた。

「結局その土嚢って何に使うの?。」

作業を終えて休憩している時にミハルが聞いてきた。

「実弾訓練の時にターゲットにするのさ。」

「実弾……。」

ミハルの表情に脅えが見てとれた。

「ああ、今日はまだ模擬弾訓練だ。けどな、実弾を撃てなければ意味が無いんだ。分かるな?。」

「うん、分かってる。」

脅えの表情が消えた。

「よし!、では先ず基本的な構え方からだ。利き手は右だな?。右手でグリップを握る、その時人差し指はまだトリガー（引き金）に掛けてはダメだ、トリガーガードに添えておく。そう、それで良い。」

次にグリップを握った右手を包み込む様に左手を添える。足は大体肩幅位に開いて前屈みに成らない様に少し腰を落とす。両腕が曲がらない様に銃を正面につき出せば基本姿勢完成だ。な？、思ったより簡単だろ？。」

「あの、どうやって狙いを付けるの？。」

「そのスタイルではそのまま狙いを付けないで撃つんだよ。まあ5m位までならそうそう外す事は無いさ。」

「そ、そうなの？。」

ミハルは緊張した面持ちで銃を構えたまま固まっている。

「よし、じゃあ先ず私が見せてあげよう。」

銃をミハルから受け取り1つ1つの動作を確認しながら構え、奥の壁に張り付けたマンシレットターゲットに向かって2発続けて撃ち込んだ。

模擬弾特有の軽い発射音が耳を打った。

1発目は左脇腹に、2発目は右肩に当たった。

「狙いを付けなくてもこの位にはまとまる物なんだよ。」

そう言っつて私は銃をミハルに返した。

「さ、撃つてみたまえ。」

「う、うん。」

ミハルは恐る恐るトリガーに指をかけてゆっくりと引いた。  
タンッ！！

弾はターゲットの真上、20cmの辺りに着弾した。

「うん、初めてにしては悪く無い。」

「ええ？、外しちゃったのに？。」

「ターゲットの中心線はちゃんと捉えているじゃないか。」

「あ、そうなんだ！。」

嬉しそうにうなずいた。

ミハルには射撃のセンスが有るのかも知れない。

私達は拳銃射撃の訓練を続けた。

「さあ、次は持った銃でターゲットを指差す様にして撃つてご覧？。」

」

「こ、こう?。」

タンツ!!

弾はターゲットの胸元に命中した。

「よし!。」

「やったー!!。」

ミハルは飛び跳ねて大喜びした。

タンツ!!

私は反射的に身を硬直させた。

ミハルはバンザイをしたまま固まっている。

顔は笑った様な引き吊った様な表情をしていた。

銃口の先を見るとワックス製の模擬弾が天井に張り付いていた。

「……、撃たない時はトリガーに指をかけない事!、これで覚えたね?。」

「あ……、うん、ごめんなさい。」

ミハルはさっきのポーズと表情のまま言った。

「模擬弾で良かった。もし実弾だったらコンクリの天井で跳弾がど

こに飛んだか分からないからね。」

「……。」

それを聞いたミハルは無言で肩を落とすうつぶむいてしまった。

「さあ!、気を取り直して続けてくれ。」

「はい!。」

先ほどまでとは明かに違う緊張感の有る真っ直ぐな返事が返って来た。

タンツ!!

タンツ!!

何発か撃つとスライドが下がったまま動かなくなかった。

「あ、あれ?。」

ミハルは銃口を覗こうとした。

「止めなさい!。」

私はミハルの手首をつかんでそれを止めた。

「撃てなく成った銃では一番やつてはいけない事だ。」

「え？、あ、はい。」

何が何だか分からないようだ。

「良いかね？、銃弾には“遅発”と言う現象が希に起きる事を覚えておきたまえ。」

銃弾の発射プロセスは大まかに言って次の通りだ。

- 1) チャンバー（薬室）内にカートリッジが装填される。
  - 2) ハンマー（撃鉄）が引き起こされる。
  - 3) トリガーを引きハンマーをリリースする。
  - 4) ハンマーがファイアリングピン（撃針）を叩き、ファイアリングピンがカートリッジのプライマーを叩く。
  - 5) プライマーが急激に潰れる事でカートリッジ内のパウダー（火薬）に火が付き爆発、弾丸が発射されると言う訳である。
  - 5) の時、希にパウダーが徐々に燃えて爆発が5〜8秒ほど遅れる事が有り、それが“遅発”と呼ばれる現象である。
- そんな時に銃口を覗き込むのが如何に危険で有るかは言うまでも無かる。

「良いかね？、遅発の時は10数えてからスライドを引き、チャンバーから覗く様にして弾を確認しなさい。」

「は、はい。」

「さあ、ではマガジンを抜いて新しい弾を込めなさい。」

「はい!。」

私の指示に応えるとミハルはグリップ下のマガジンキャッチを手前に引きマガジンボトムを引っ張り、マガジンを抜き取った。

「銃を置く時はエジェクションポート（排莖口）の中が自分に見える様に置きなさい。」

「はい!。」

ミハルは銃を置き、新たな模擬弾をマガジンに込め始めた。

私はその合間にターゲットを二回りほど小さな物と交換した。

「さて、次は少し離れたターゲットを狙って撃つ練習を始めよう。」  
「は、はい！」

ミハルは再度緊張した面持ちで返事をした。

「先ず確認するが“利き目”は左右どっちか分かるかね？」

「？、キキメ？」

「どうやら知らないらしい。」

「目にも“右利き”と“左利き”が有るんだよ。」

「ああ！、“利き目”ね？。ウーン、分かんないな。」

「じゃあ調べて見ようか。棚の柱に重なる様に指を立ててごらん、そしたら指を動かさないで右目と左目を交互に閉じてごらん、柱との重なりがズレなかった方の目が利き目だよ。」

「ん〜……、右目を閉じるとズレるよ？」

「じゃあ右利きだな。OK！、スタンダードな教え方で良い訳だな。」

「？、もしか逆だったら何か違ったの？」

「利き手が右だったとしても左手で練習させるところだったよ。」

「良かった。」

胸を撫で下ろすミハルであった。

「では“サイト（照準器）”について説明しよう。」

「はい！」

「昨日、分解組み立てをやっているから分かると思うが、スライドの先端上部に付いている三角形の物が“フロントサイト（照星）”、同じく後端上部に付いている凹型の物が“リアサイト（照門）”だ。」

私はサイティング（照準）の説明を始めた。

基本的には下記の通りだ。

1）フロントサイトはリアサイトの凹みの中に収まる様にする事。

この時フロントサイトとリアサイトに隙間が有った場合は隙間がフロントサイトの左右に均等に成る様にする。

2）フロントサイトの上端とリアサイトの上端が横一直線に成る事。

3) フロントサイトの縦の中心とフロントサイトとリアサイトを合わせた上端横一直線がターゲットの中心を通る事。

以上の事を守りトリガーを絞れば銃は当たる様に出来ているのだ。

「次はサイティングがし易くなる構えを教えよう。」

「お願いします!。」

ミハルの飲み込みの早さに私は舌を巻いた。

「先ず右足を半歩前に出し、身体もそれに合わせて半身に構える。

そう、銃を右手で持ちターゲットの方に突き出す。左手でグリッブした右手を包み込む様にサポートする。この時右肘が曲がらない様にしっかりと前に突き出し、左手は逆に手前に引っ張る様にして腕がブレない様にする。」

「こ、こう?。」

ミハルの腕は左右で相反する力が加わりプルプルと震え出した。

「いや、そこまで力まなくても良いんだよ。銃が保持出来ていればね。」

「そーゆー事は先に言ってよ!。」

ミハルは私を睨んでから構え直した。

私は銃を持つミハルの腕を押ししたり引いたりした。

その度にミハルの銃はスツとターゲットの方に向き直った。

「よし!、上出来だ。ではそのままサイティングして見てくれ。」

「こう、かな?。」

ミハルはサイティングポイントを探して頭をグリグリと動かした。

「アア、いやそうじゃ無くて、右腕から右肩までを一本の棒だと思つてホツペタを押し付けながら覗いてご覧?。」

「こう……?、アツ、見えた!。」

つまり、自分自身の腕や肩をストック(銃床)の代わりにする事でより安定した射撃が可能になるのだ。

「ではそのままターゲットを狙って撃つて見なさい。」

「はい、アア……、サイトがボヤけて見えないよ。」

ミハルは左目をつぶって右目だけで狙いを付けようとしていたのだ。

「銃を下に外して両目を開いてターゲットをしつかり見据えるんだ。」

「はい。」

「ターゲットから視線を外さずに銃を持ち上げてご覧?。」

「あ!?。」

「“ここだ”と思った所でトリガーを引きなさい。」

タン!!!

ミハルは無言で銃を撃った。

弾はきれいにターゲットの眉間を貫いていたいた。

「よし!、OKだ!。今の感覚を忘れない様に毎日練習するんだよ。」

先ほどとは打って変わって喜んではいない様だ。

「ネエ、自分の身を守るだけなら最初の撃ち方だけでいいんじゃないかな?。」

ミハルはターゲットの弾痕を見つめて言った。

「いや、護身用ならなおさら狙撃は覚えた方がいいな。」

「どうして?。」

「狙いを付けられると言う事は怪我だけで終わらせると言う事なんだよ。」

「…………?。」

まだ良く理解出来ない様だ。

「良いかね?、最初の撃ち方では狙ったつもりが無くても相手に致命傷を与える可能性が大きいんだよ。」

「そう…………、そうなんだ。」

ミハルは自分が手にしている物を見つめ、押し黙った。

実際には殺意を持たなければそうそう人に向けて銃を撃つなど出来はしないのだが、今は訓練なのである。

いざと言う時に当てられなければ死ぬのは誰でも無い、ミハル自身なのだ。

その後スタンディング（立ち撃ち）の他、ニーリング（立て膝撃ち）

、プローン（寝撃ち）、バリケード（壁越し撃ち）等、一通りの撃ち方を練習して時間が過ぎて行った。

「今日はこの位にしておこう。」

「はい！、有難うございました。」

「いいかい？、もう一度言っておくが弟達を守る為にはミハル自身が健在である事が絶対条件なんだからね。」

「はい！！。」

「よろしい！、では銃のメンテナンスが終わったら帰りなさい。」

私はミハルを残して地下室を後にした。

残されたミハルはクリーニングキットのケースを開け、銃を分解し始めた。

私がミハルに渡した銃は、口径5.5mm、全長120mm、全高96mm、作動方式はショートリコイル式ロータリーバレルロッキング、発火方式はストライカー式（撃針発火式）のダブルアクションカートレス（薬莖無し）コンパクトオートである。

カートレス弾は手に入れにくいが隠密性を優先させたのだ。

分解の手順は……、

- 1) マガジンを抜き取る。
- 2) トリガー上部にあるテイクダウンピースを下に押し下げてアッパユニット（バレル、リターンスプリングがセットされたスライド）を前方に引き抜く事が出来る。
- 3) アッパユニットからリターンスプリングを外すとバレルを抜き取るとる事が出来る。

基本的なメンテナンスをする為にはここまでの分解で十分である。

ミハルはクリーニングロッドにウエス（布切れ）をセットしてクリーニング液に浸しバレルの中を掃除し始めた。

バレル内にクリーニング液を塗り終わるとスライドのブリーチ（バレルをふさぐ部分）面に液を塗った。

それぞれの汚れに液が染み込む間にロアーユニット（グリップ部分）の可動部を軽く拭き取り、新しいガンオイルを塗って行った。

バレルとスライドのブリーチ部はクリーニンググロッドの先端をブラシと取り替えて磨き、もう一度ウエスをセットして浮き上がった汚れを拭き取った。

最後にバレル内とブリーチ部にガンオイルを塗り、分解と逆の手順で組み立てて作業終了である。

ミハルは最後に動作をチェックした。

空のマガジンが入ったままスライドを一杯まで引いてから放した。マガジンホロアーに押し上げられたスライドストップのフックがスライドの切り欠きに引っ掛かりホールドオープン状態で停止した。銃の左側に有るスライドストップ解除レバーを押し下げればスライドはリリースされるのだが、ミハルはあえてマガジンを抜きスライドをもう一度引いてスライドストップを解除させた。

そのままスライドを放すとスライドは勢い良く元の位地まで戻った。スライドの後端部にコッキングインジケータが頭を出している。

ストライカーがハーフコック（半起こし）されているのだ。

ミハルはスライドの左側を親指で押し込んだ。それは一見するとスライドと一体化して見えるデコッキングボタンであった。

カチツ

さほど大きく無い音がしてコッキングインジケータが見えなくなっ

た。  
この機能を使えばチャンバー内に弾丸が有った場合でも安全にコッキング状態からストライカーを解放する事が出来るのだ。

それは持ち運び時の暴発事故を防ぐ為の機能だった。

良く見るとこの銃にはセイフティーレバーが付いていない。

実はグリップの背の部分に有るグリップセイフティーだけが唯一のマニユアルセイフティーでスライド内に有るファイアリングピンブロックがこの銃の安全性を高めていた。

グリップセイフティーはグリップをしっかりと握り込んだ時だけトリガーが引ける様にする仕組みで、ファイアリングピンブロックはトリガーを引いた時にだけストライカーから解除されて発射が可能

になるシステムなのである。

ミハル自身、そこまで構造を理解できてないのだが……。  
ミハルは銃をしまつ前にもう一度“それ”を見た。

その銃にはメーカー名やシリアルナンバー、ブルーフマーク（検査通過証明）などの刻印やプリントの類いは全て削り取られていた。

その時ミハルは以前聞いた“非合法”と言う言葉を思い出し、なにやら薄ら寒いものが背中を這い上がった様な感覚に捕らわれた。

（アタイもいつか“コレ”で誰かを殺しちゃうのかな……？。）  
そんな事を漠然と考えながら銃やクリーニングキットを片付けていた。

そして“戦争だから”“自分達の身を守るため”と言う言葉で何とか自分の心に折り合いをつけたのだった。  
こうして長い一日が終わりを告げた。

次の朝、私は6時頃自然と目を覚ました。

ここ数日の中で久しぶりにぐっすりと眠る事が出来た。

ベネット・オマリー氏から連絡が来るのは10時を回ってからに成るだろう。

私は昨日のミハルの事を思い出していた。

（射撃訓練は前倒しした方が良さそうだな。）

「よし！、一気にやってしまおうか！！。」  
私は1人氣合いを入れて必要量の土嚢を地下へ運んでしまつ事にした。

手早く顔を洗い作業服に着替えて表に出た。

作業を始めてから1時間程経った頃ミハルが表に出てきた。

「お早うございます！、今日は早いですね？。」

「やあ、お早う、昨日はいつもより早く寝てしまつたんでね、朝早くに目が覚めたんだよ。」

「だけどこれ、全部下に運ぶの?。」

土嚢は20個を超えていたのだ。

「いやなに、必要な分を先に作って置こうと思ってね。それじゃあ1つ持って降りてくれないか?。」

「ん、分かった。」

ミハルは手頃な土嚢を1つ引きずる様にして事務所へ入って行った。私は必要な数だけ土嚢を用意し終えて小休止を取っていた。

8時半頃だろうか?。

不意にミハルの家のドアが開いた。

「……姉ちゃん、どこ?。」

ミハルの妹、ミリーだった。

「お姉ちゃんは今勉強中だよ。」

「何でガッコーじゃ、無いの?。」

「ミハルはシニアハイに入学していないからねえ、それに今勉強してるのは私の仕事を手伝う為のものだから学校では教えてくれないんだよ。」

「フーン……?、だったら家でやれば良いのに。」

「寂しいのかい?。」

私が質問した時、再びドアが開いた。

「ダメじゃないかミリー!、また姉ちゃんに叱られちゃうぞ!。」

ミハルの弟、ジルであった。

「やあ、お早う。」

「あ!、お、お早うございます、所長さん。」

「だって姉ちゃん、ご飯の時しか帰って来ないんだもん!、こんなだったら前の方が良かったよ!。」

「何言ってるんだよ!、ここに来られなかったら今ごろアソコ(避難場)から追い出されてたんだぞ!。」

ジルは私を気にしながらそんな事を言った。

「それでも姉ちゃんと一緒に居られた方が良いもん!。」

「バカ!、公園とか下水道で寝ないといけないんだぞ!。」

「ウアーン！、兄ちゃんいじめる〜！！。」  
とうとうミリーが泣き出してしまった。

「2人共ケンカは止めなさい、なるべく早く帰られる様にミハルと相談してみるから、ね？。」

私は2人とそんな約束をしてしまった。

ミハルの小さな兄妹達が自分達の家に戻ってから間もなく事務所の電話が鳴っているのに気が付いた。

私があわてて事務所に飛び込んで見ると、ミネラルウォーターのボトルを持ったミハルが受話器を取っていた。

「はい、そうです“ 戦災相互助け合い基金 ”の事務所で間違い有りません。え？、はい、ミハルはアタイだけど、誰？。」

「電話を換わってもらえないかね？。」

私の申し出にミハルは不承不承従った。

「お電話換わりました、はい昨日電話したジャン・バレットです。」

「ベネット・オマリーです。件の資料を見ましたがひどい物ですな、このまま公表して気の利いたコメントの1つも書けばニュースソースとして十分ですよ。」

「まあそう慌てずに願います、それは我々にとって手段の1つに過ぎませんから。」

「なるほど……、所で先に電話を取ったのがあんたのクライアアントだね？。」

「ええ、そうですが？、それが何か？。」

「さっきの話ぶりだと私が誰だか解っていない様だったんだが？。」

「ああ、彼女にはまだ詳しくは話していませんよ、あなたがどんなリアクションをするのか見極めてからと思っていますね。」

「なるほど……、で？、アンタはどうしたいんだい？。」

「先ずは件の質問状を役所に渡して来るつもりですよ、もちろん貴

方にも渡しして有る事も伝えます。彼女には今日中に話しますよ、他に相談したい事も有るんでね。」

「するとこちらはアンタか彼女ミハルからの連絡を受けてから記事にすると言ふ事で……?。」

「話が早い、それでお願ひします。」

「それでは良い結果が出るのを祈ってます。」

「有難う、それではまた。」

私は受話器を置いてから傍らで聞き耳を立てているミハルに向き直った。

「済まないが出掛けて来るよ、帰りは多分15時過ぎになると思ふ。それから帰ったら今までの説明と今後の相談が有るから訓練は適当な所で切り上げてくれ、良いね?。」

「ん、了解。」

私にまくし立てられて半ば呆然としながらもミハルは返事をしてから地下室に戻って行った。

(やれやれ、これでは集中力が続かんだろうな……。)

私は今日の座学を諦めつつシャワーを浴びて身仕度を整え、資料と質問状を携えて役所へと向かった。

私は役所の地下階、“災害対策課”の受付にいた。

午前中の受付時間にギリギリで間に合った。

「やあ、お早う。」

私は受付カウンターの奥に隠れる様に座っている初老の職員“サム・メイスン”に声をかけた。

「ん?、アア、アンタは、アー……、“戦災…何とか基金”の……。」

「ジャン・バレットです。」

「そうそう!、バレットさんね。で?、今日は何の用だね?。」

「はい、先日いただいた資料の不明瞭な点についていくつか質問が有りました……、」

「あー、そう言う事は文書にまとめて持って来て欲しいんだがね？。」

「そう言われると思いましたよ。」

そう言いながら“公開質問状”をサムに手渡した。

「ほう、用意がいい……？、こ、公開質問状？。何だね、この“公開”ってねは？。」

サムはタイトルを見るなり騒ぎだした。

「私の知り合いに“ロイター通信社”の編集者が居ましてね、今回の件を話したら興味を持ちまして……、ただ私のクライアントのプライベートも絡みますから今のところ記事にはしない様に言い含めて有りますがね。」

私が言い終わる頃にはサムは顔面蒼白に成っていた。

「じゃ、確かに渡したと言う事で、此方にサインして下さい。」

私はもう一枚の質問状との間に複写紙を挟んでサムにサインを求めた。

「ちょ、待ってくれ、受付の時間は……。」

「ほう、今までの会話の流れで受付が成立していないと？。」

言いながら私はポケットからボイスレコーダを取り出して見せた。

「まあ無理にとは言わないが、後々厄介な事に成ると思うんだがねえ。」

「ウウ、分かったよ書きゃ良いんだろ？。」

「はい、そこに日付も……、結構！。期日はまあ1週間としますか。じゃあそう言う事でよろしく。」

私はサインの複写が入った方の質問状を引たくって懐にしまい役所から出ようとした。

「待ってくれ！、バレットさん、待って！」

振り返るとサムは受話器を片手に持ちながら私に追いつがって来た。

「どうしました？。」

「この質問状については私の一存では受け付けられないですよ。今市長に確認を取りますからちょっと待って下さい。」

サムは今にも泣き出しそうな顔つきで私に懇願した。

「ほう、すぐに答えが出るなら待ちもするがね、後はそちらの問題だろう？。私には関係の無い話だし、諸君らでじっくり話し合いたまえよ。」

そう言い放ち、私は役所の建物を後にした。

私は役所の駐車場からエレカを出し近くの空地に駐車させた。

役所の建物からはちょうど死角に成って見えない筈だ。

私がカーラジオのスイッチを入れるとスピーカーから男達の会話が聞こえて来た。

私がサムに渡した書類をまとめる為に使ったペーパークリップが盗聴器なのだ。

カーラジオも受信機として増幅はもちろんノイズキャンセラーを強化カスタムされていた。

しばしサム達の会話を聴く事にしよう。

「…何でワツシがこんな事を…」

コンコン！。

「災害対策課のサム・メイソンです。」

『入りたまえ。』

カチャ！。

「失礼します、これが先ほど申し上げました書類です。」  
カサツ。

「…フム、また厄介なのが来て来たものだな？、なあ、メイソン君。」

「

「はあ、全くです、どの様に対処したらよろしいでしょうか?。」  
「まあ、掛けたまえ。ハミルトン君、済まんがコーヒーを2人分持  
つて来てくれたまえ。」  
『かしこまりました。』  
「まあ何にせよマスコミにでて来られるのはどうしても避けなけれ  
ば成らんな。」  
「おっしゃる通りです。」  
カチャ。  
「お待たせいたしました。」  
コトツ…、コトツ。  
「有難う、もう下がってくれてかまわんよ。」  
「はい、失礼いたします。」カチャ。  
「それで…あのワツシはどの様にすれば…。」  
「…なぜ私が君を“災害対策課”の責任者にしたか分かっているの  
かね?。」  
「あ、あの、私が後2ヶ月で定年退職するから、後腐れが無いよう  
に、ですか?。」  
「まあそれも理由の1つでは有るがね、最大の理由は君が“無能”  
だからだよ。」  
ガタツ。  
「そんな…、市長!。」  
「君は余計な事は考えずに、何もしなくても良いんだよ。さあ、コ  
ーヒーを飲んだら持ち場に帰りなさい。」  
「…、分かりました。では失礼します。」  
ガタツ!。  
カチャ。  
「ハミルトン君、住民課の課長を呼んでくれたまえ。」  
『かしこまりました。』  
チャツ。

「もしもし、市長のモーガンだが、ハミルトン司令官に繋いでくれ

たまえ。」

「アア司令、はいモーガンです。折り入ってご相談したい事が……、はい、いえ、今度はマスコミ絡みでして……、いえ、まだそこまでは……、はい、詳しい事が分かり次第またこちらから連絡させてもらいます。はい……、では。」

チャッ。

「……。」

コンコン。

『住民課のランドルです。』

「入りたまえ。」

まだまだ耳を離せそうに無い様だ。

その後の会話を要約すると次の通りだ。

- 1) 基地司令官の命令で街のゴロツキに扮した海兵隊員が数人私の寝込みを襲い、質問状の写しを奪い取り出来れば私を拉致する。
  - 2) 市長に不利な証言をしそうなサム・メイソンを拉致する。
  - 3) 軍を通してロイター通信社に圧力をかける。
- それと、さして重要な事では無いのだが基地司令官と同じ名前の市長の秘書は基地司令官の娘なのだそうだ。  
全くヤクザやマフィア並みの連中である。  
市民に奉仕すべき行政のする行いでは無い。  
これが連邦政府の言う所の“絶対民主主義”の正体なのだろうか？。  
私は重要参考人としてサムの安全を確保すべく彼の帰宅時間を待った。

遅く成るかも知れないのでミハルに電話をする事にした。

……、ミハル？。

そうだ、ミハルに途中経過を報告すると約束していたのだ。

ここは考えどころだ。

私はミハルに連絡を取りいつも私が利用している食料品店（実際には雑貨店）の駐車場で落ち合う事にした。

少しの間サムから目を離す事に成るが役所に居る間は大丈夫だろう。急ぎ店に着くと、すでにバッグを抱えて二人の兄妹を連れミハルが待っていた。

「済まん、待たせたね。」

「ンーン、アタイ達も今着いたところ。」

ミハルが助手席に、ジルとミリーが後部座席に着いた。

「どしたの?。」

私が少しの間ミハルの顔を見つめてしまったのだ。

「いや……、君も後に乗るとばかり思っていたんでね。」

「今日はアタイにも手伝ってもらうからって言ったじゃない!。」

ミハルは口を尖らせ上目遣いに私を見返した。

もう一端の助手気取りだ。

「あまり時間が無い。2人はジョンの店であずかってもらえる様に頼んで有る。」

私はミハル達がシートベルトを締めたのを確認して車を出した。

我々は裏口からジョンの店に入った。

ジョンは開口一番、

「初仕事の子守ってこたあねんじゃネエかい?。」

と、腕を組んで言い放った。

「マアマア、まさか店をミハルに任せる訳にもいくまい?。」

「ああ分かつてる、ほんの冗談さ。で?、これからどうすんだい?。」

「まずはサム・メイスンの身柄確保なんだが……、彼に家族は居るか?。」

「確か若い頃に離婚してそれ以来独り暮らしのはずだ。」

「OK、あとはタイミングだな。じゃ、子供達の事頼む。ミハル!、行くぞ。」

「はい!。」

私達は市役所へと向かった。

我々が役所の駐車場に着いてから程なく役所から就業のベルが聞こえて来た。

「それで、この後どうするの?。」

ミハルがたずねて来た。

「まずはサム・メイソンを尾行する。」

「それから?。」

何やら楽しそうだ。

「サムが拉致される現場を撮影するのさ。」

「撮影だけ?。」

「相手の人数にもよるな。同時に相手が出来るのはせいぜい2人まで。1人がサムを押さえてたとして……、3人が限度だな。それ以上なら、さらに尾行して監禁場所に仕掛けるしかないな。」

「リョーカイ!。」

ミハルは変な手付きで連邦式の敬礼を真似て応えた。

私はミハルに撮影の準備をするように指示した。

ミハルはバッグの中から“ノクトビジョン付き双眼鏡”を取り出し、バッテリーとメモリーディスクの確認を始めた。

「ディスクは1.4ギガバイトの1枚だけで良いんだよね?。」

「十分だろう。」

双眼鏡の上部にあるボタンを押し込むと『パシャッ!』と言う軽い音がして蓋が持ち上がり、メモリーディスク用のスロットが開いた。そこには予め入れておいたメモリーディスクが覗いていた。

それは一辺が1インチ(約25mm)のハードケースに入った光デ

イスクである。

極普通に市販されているマスプロ製品だ。

ディスクが正しくセットされているのを確認して蓋を閉め直した。次に双眼鏡をひっくり返して裏面を確認し始めた。

そこには大きくは無いが目立つ色のインジケータが有った。

インジケータの両端にはそれぞれ“F”と“E”の文字が打刻されていた。

つまり“満タン”と“空”の意味である。

インジケータのゲージはあと少しで“E”に届きそうな所まで来ていた。

「あつ！、ヤバー！。」

ミハルは一言叫ぶとバツグの中をかき回し始めたが、ほどなく蛍光色に塗られたボンベを1本取り出した。

形はノズル付殺虫剤のスプレー缶に似ている。

ミハルは双眼鏡の裏面、インジケータの近くに有る“IN”と打刻された蓋を外した。

蓋はボールチェーンで本体に繋がれていて無くさない様になっていた。

蓋を外した穴にボンベのノズル先端をねじ込みボンベのボタンを押し込んだ。

『カチツ』と言う音がしてボタンがロックされた。

しばらく待っていると自動的にボタンのロックが解除され、インジケータのゲージが“F”まで進んでいた。

これで双眼鏡のバッテリーである燃料電池に水素がフルチャージされたのだ。

「準備終了しましたー！。」

ミハルは元気良く運転席の私に報告した。

「了解。」

やはりどこか嬉しそう……、と言うか浮かれている様だった。

私は役所の通用門の近くにエレカを停めた。

ここは正門と違い守衛が1人常駐しているだけで防犯カメラの類いは設置されていないかった。

その守衛も守衛室内から出る事は無く、有線テレビでサッカー中継を眺めていた。

役所の終業時間まで少し時間が有る。

私はミハルの今後について話をする事にした。

「どうもミリーに嫌われてしまった様だよ。」

「え?。」

不意に妹の事を言われてミハルは戸惑った様だ。

「今朝『お姉ちゃんを返して。』って言われてしまったよ。」

「アア、もうあの子つたら……、気にしないで所長さん。」

「私は別にかまわんのだが、お前さんはどうしたいのかね?。」

「え?、アタイ?。」

「そうだ、ジルとミリーにどう話すのか。それとも、このまま話さないで置くのか。それはミハル、お前自身で決めなくてはいけない事だ。」

「ちよつと待つてよ!、こないだ話したじゃない、今回の件が終つてから決めるつて。」

「そうだったな、だが状況は悪い方に向かつて進み出してしまった。」

「

「悪い方?。」

ミハルは私の言葉を反芻して問いかける目で私を見た。

「今日私は一手目を打つたに過ぎないんだが、彼らはその対抗策としていきなり軍と言う暴力装置を使つてきたんだよ。」

「……?。」

「彼らには最初からこちらの話を聞くつもりが無かつたって事なのよ。」

「今ここで決めなきゃいけないの?。」

ミハルは絞り出す様な声で私に言った。

「今すぐで無くても良い、だが今までより一歩踏み出す覚悟が必要に成ってしまっただよ。」

「どうして?。」

「私の読みが甘かったと言われればそれまでなのだが、連中は二つ三つ手続きを跳ばしてしまっただよ。」

「なんでそんな事すんのさ!?。」

ミハルが語気を荒げて言った。

「まだ確定した訳では無いんだが……。」

私は今ここでミハルに話すべきか少しの間躊躇したが、ミハルの眼差しに強い意思を私は感じ取っていた。

「まず間違い無く君らの両親はもう亡くなっているな。しかも連中はそれを知っていて隠している。」

「なんで?、何でよ!?。父ちゃんと母ちゃんが、アタイらが何したってのよ!?!。」

私はミハルを抱きしめたい衝動に駆られたが、それをこらえて言った。

「強いて言うなら、死んでもさしたる不利益が生じない存在だったからだろう。」

ミハルが涙を流しながら、しかし燃える様な目で“キツ”と私を睨んだ。

今はそれで良い。

その憎みをエネルギーに変えて生き抜けるのなら。

車内は沈黙に包まれていた。

一分一秒が異様に長く感じられる。

永遠に続くかとも思われたその時間も役所の通用門から“サム・メ

イスン”が現れる事で破られた。

「来たぞ、撮影の用意は?。」

「何時でも行けるよ。アイツがそうなのね?。」

私はそれに答える代りにエレカのメインスイッチを入れて何時でも車を出せる様にした。車内は一転して走行用モーターのインバーター作動音で満たされた。

それは大きくも無ければ決して不快な音でもなかった。

「あ!、アイツの車来たよ!。」

「分かつてる。」

私はサムの手を少しだけ先行させた。

こちらからは見失わずに相手から気付かれ難い距離が有るのだ。

しばらく行くとサムの手は大型ショッピングモールの駐車場に滑り込んだ。

サムは店の入り口近くに空いていた駐車スペースへ車を頭から入れて停めた。

私は気付かれるのを覚悟で通路を挟んだ真向かいの駐車スペースへ同じく頭から入って車を停めた。

お互いの車が尻を向け合う様にしたのだ。

始めから周囲に注意をはらってでもない限り中々気付かない物だが、サムもこちらに気付く事は無かった。

私は車を降りる前にバックミラーを動かして周囲に異常が無いか確認した。

「ん?、あれは!?。」

私は気になる車を見つけたのだ。

それは見るからにレンタカーと思われる黒のワンボックスカーだった。

空いた駐車スペースを探す様にゆっくりと巡回していたが、適当な空きスペースを無視してこちらに近づいて来たのだ。

サスペンションの沈み具合から80kg以上の人間が3人以上乗っているであろう事は想像に難くない。

運転席の有る前列以外の窓全てがフルスモークになっていて実際の人数は分からない。

しばらくうろろろしていたがサムの車の近くに空いた駐車スペースは無かった。

業を煮やしたのか、男が1人降りて来た。

派手な टीーシャツ にジーンズ、サングラスをにかけている。

見るからにチンピラ風ではあったが、二の腕や太ももの筋肉の盛り上がり方から訓練された者だと言う事が解る。

「あれは……、海兵隊かシールズだな。ミハル、今から撮影を始め  
てくれ。」

「え？、了解。」

私はコンソールのボタンを操作した。

リアウインドウの明度を下げてミハルが後を向いている事がバレない様にしたのだ。

私からも車のバックモニターでなんとか確認する事が出来た。

男はサムの車の運転席側、つまり向かって左側に駐車している車のドアにキイの様な物を差し込んだ。

その車はもちろん男の物では無かったがドアは何事も無かった様にすんなりと開いた。

「あれは、レスキューが使う強制開錠キイじゃないか！。あの車のドアはこれでもう二度とロック出来なく成ったよ。」

「？、そうなの？。」

ミハルは撮影を続けながら私に質問した。

「ああ、あれは元々ロックされた車の中で気を失った人間を助ける為の道具さ。その後の事なんて考えていないのさ。」

私もバックモニターを見つめながら答えた。そうこうしている内に男はドアを開けた車に乗り込み発進させた。

「フウーン、あのキイにはそんな機能まで付いていたのか……。」

現在、個人所有車のセキュリティにはキイの内臓メモリーによるIDの照合が一般的なのだ。

例えキイを偽造出来たとしても30桁からのIDまでは解析出来る物ではない。

多分あのキイには強制開錠だけでは無く、ID照合を無効化する機能も付いているのだろう。

「誰のかわからないが、あの車はもうオリジナルキイでは動かせないだろうな。」

通常のID照合が出来なく成った以上、まともにOSを立ち上げる事も出来なく成ったはずだ。

「……。」

私の独り言をミハルは黙って聞きながら撮影を続けていた。

男が車を退かして作ったスペースに黒塗りワンボックスが滑り込んだ。

「ナンバープレートは撮影出来てるね?。」

「バッチリだよ!。」

「OK!、このまま撮影を続けよう。」

「了解!。」

そんな会話をしている間にも男はワンボックスには戻らずに店の中へと入って行った。

5分ほど経った頃、サングラスの男が2人連れで出てきた。

1人はさつき車を移動させた男だったが、もう1人は両手に荷物の詰まったトートバッグを下げていた。

サムである。

男は左斜め後方にいてサムを誘導している様だった。

「ネエ、あのサングラスって…?。」

「ああ、無理やりかけさせられたんだな。」

サムと男はサムの車とワンボックスの間まで来ていた。

と、突然ワンボックスの後部ドアが開きサムが持っていたトートバッグが奪い取られ、サム自身も車の中に引きずり込まれた。

その時サムがかけていたサングラスがずり落ちて素顔が覗いた。

「ミハル!、今の録れたな!?!?。」

「バツチリよ！」  
後で分かった事なのだが、サムが車に引きずり込まれた時、誘導して来た男の右手にハンドガンが握られているのがはっきりと写っていたのだ。  
ともあれワンボックスカーは2人の男を乗せるとなにごも無かつたかの様にゆつくりと駐車場を後にした。  
我々がその後を着けたのは言うまでも無いだろう。

件の車は軍港に程近い民間の貸倉庫街に入って行った。

私は途中でミハルを下ろし、ジョンの所に行ってもらう事にした。ここからなら徒歩でも急げば14〜15分程度でジョンの店まで着けるだろう。

私はミハルにトレーラーのキイと伝言をジョンに届ける様に頼んだ。辺りはだいぶ暗く成って来た。

このままでは見通しの良い倉庫街の道でもヘッドライト無しで尾行を続ける事は出来そうもない。

私はミハルが置いて行ったバッグの中から双眼鏡用のヘッドセットアダプターを取り出し双眼鏡本体に組着けた。

双眼鏡の倍率を等倍にしてノクトビジョンモードに切り替えた。

『キュウーン』

独特な音と共に増光器が立ち上がった。

私はヘッドセットを被り辺りを見回した。

暗い所、明るい所共にはつきりと見る事が出来た。

ワンボックスは大分先に行ってしまったが、ここに来て速度を急激に落とした。

監禁場所に使う倉庫を探してシャッターの番号を確認する為どうしても遅く成らざるをえないのである。

私は車の走行モードを“サイレント”にセットし直してワンボックス

スに追い付くべくスピードを上げた。

と、ワンボックスは次の交差点を右に曲がり港の方に向きを変えた。加速中だった私は急ブレーキをかける訳にも行かず減速しながら一旦交差点をやり過ごした。

結局車は交差点を30mほど行き過ぎてから止まった。

連中に気付かれただろうか？

この暗がりの中、ヘッドライトを消し、ほぼ無音で後ろを通り過ぎたのだ。

気付いたなら直ぐに確認に来るだろう。

私は意を決して車をバックさせた。

交差点を過ぎる時にワンボックスを確認しようとしたのだが…すでに居なくなっていた。

「まだ間に合うか？」

私は双眼鏡のモードを左目だけサーモグラフに切り替えた。

路上には微かな熱を残したワンボックスのタイヤ跡を確認する事が出来た。

「よし！」

私は気を取り直して追跡を再開した。

この道を抜け切ると波止場に入ってしまう。タイヤ跡はその波止場へと続いていた。

私は波止場に出る20mほど手前で車を降りた。

用心深く辺りを見渡して驚き、その無神経さに呆れ返った。

ワンボックスは個人所有らしいクルーザーが停泊している真ん前に止められていたのだ。

表には見張りの1人も立って居なかった。

もしも私がやるなら貸倉庫を1つ借りて車ごと中に隠し、倉庫のそとにも最低2人の見張りを置くだろう。

連中は最初から追跡者を想定して居なかった様だ。

辺りに人影が無い事を改めて確認した私は、バッグからビーコンを取り出し車の上に置き、作動させた。

ビーコンでこの場所にジョンを誘導する為である。

私はバッグの中から高感度指向性マイクを取り出しジャックを双眼鏡に繋ぎ、映像のモードをもう一度ノクトビジョンに戻して録画を再開した。

ヘッドセットのイヤホンから人の話し声が聞こえて来た。

『……長！、これは一体どう言う事ですか？。ワッシをどうするつもり何ですか！？。』

サムが誰かに向かってわめいている様だ。

「メイスン君、分からんかね？、私は君を守りたいだけなのだよ。」  
市長は穏やかな口調でサムをなだめる様に言った。

「それならそうと役所に居る時にでも……。」

「これを見たまえ！」  
カチャン！

市長はサムの言葉を遮って何かをテーブル上に放り投げた。

「！、こいつは？。」  
「分からんかね、盗聴器だよ。君が持ち込んだ資料に付いていた物だ！」

連中もそうそう馬鹿では無い様だ。

私はできるだけ目立たない場所を選んで船室の窓の中を撮影する事にした。

「それで、何からワッシを守っていただけですか？。」

「まだ分からんのかね？。あのバレットと言う男だよ。それで無ければ今ごろ君は奴に拉致されていたらうな。」

「それで、その代わりに彼らが私を拉致したと言う訳ですか？。私は市長の顔を見るまで生きた心地がしませんでしたよ！」

「その事については謝罪しよう。彼ら海兵には速やかに連れて来て欲しいと頼んだだけなんだがね。」

「はあ、まあ良いです。それで、貴方は何を怖れているんですか？。」

「簡潔に言うのだ、君が“あの事”を連中に喋ったりしないか心配しているのさ。」

「あの事？、空襲の時の行方不明者の遺体の件ですか？。」

「……、メイスン君、私は君のそう言った無神経な所が嫌いなのだよ。」

市長は穏やかに、しかし刺し貫く様な鋭い視線をサムに向けながら言った。

「……。」  
サムは射すくめられたかの様に押し黙ってしまった。

「あー、諸君らはもう帰ってもらって構わんよ。ボーナスの件は私から指令に伝えて有るので期待してくれたまえ。」

船室の中でくつろいでいた4人の男達がそれぞれ市長に挨拶して外に出て行った。

私は物陰に身を隠して船室から出て来た男達を次々と撮影して行った。

男達は全員ワンボックスに乗り込み波止場から走り去った。

私は走り出したワンボックスのナンバープレートをビデオに納めて撮影を終らせた。

市長が船室から出て来る気配は無かった。

ほどなくジョンの運転するトレーラーが到着した。

ボタン！

「おう！、待たせたな。」

私がトレーラーに近づくと運転席からジョンが降りてきて言った。

「いや、ちよいど良い頃合いだ。……ミハルを連れて来たのか?。」  
トレーラーの助手席にミハルが座っていたのだ。

ジョンへの使いを頼んだ時に弟達とジョンの店で待つ様にと指示したのだが……。

「どうしてもって聞かなくつてよ。……それよりアンタの事務所がひどい有り様だったぜ?、大丈夫かい?。」

「なに、今夜全てが片付けばどうって事無いさ。」

「しかしこのトレーラーが無事だったとは驚いたぜ。」

「仮にも“引越し公社”からの借用車両だからな、連中も手が出せなかつたんだろう?。」

つまり、連邦軍の士官達にも事なかれ主義が蔓延していると言つ事なのだ。

「ミハル、来てしまったのなら仕事をしてもらうぞ。」

「!、ハイッ!。」

私に叱られるとも思っていたのか、嬉しそうな返事が返ってきた。  
「ではこれで船の監視を続けてくれ。」

私は双眼鏡からヘッドセットを外して小型無線器を渡した。

「無線の使い方は覚えているね?。」

「うん、大丈夫!。」

「OK、何か動きが有ったら直ぐに教えてくれよ?。」

「ハイ!。」

ミハルは元気よく、しかし基本に忠実に足音を立てない歩き方で波止場の暗がり消えて行つた。

「おい!、1人で行かせて大丈夫なのか?。」

ジョンが心配そうに聞いてきた。

「そんなに心配なら急いで準備するぞ!。」

私はジョンをトレーラーのコンテナ内に誘った。

「その箱にコロニー公社のノーマルスーツが入ってる。私は作業機の準備をするから、あんたは着替えてくれ。」

「何だ?、コロニー公社だ?。」

一般には中古品すら出回らない物だが私は官品として同じ物を3着（？）軍から受領しているのだ。

何の事は無い。

ジオンはコロニー国家であり、コロニー公社に取っては大口の客と  
言う事なのだ。

多少の無理（この場合ノーマルスーツメーカーとのコネクションの  
事）の1つも聞こうと言うものだ。

「そいつは良いぞ弾よりも遙かに早いスペースデブリにも耐えられ  
るんだ。拳銃弾なんてオモチャみたいな物さ。」

「そいつぁ良いが……、この格好で走り回るのは勘弁だぜ?。」

ジオンは装着し終わったノーマルスーツをチェックしながらうめい  
た。

「よし!、こつちもOKだ。アンタはこいつに載って待機してい  
くれ。」

私は作業機“クラブマン・クレイン”に気密装備（水蜜でもある）  
を施したのだ。

「何でえ!まあ待たされるのかよ!!。」

「そう怒らんでくれ、場合によっては“アンダーウォーター”だ、  
その装備で水深150mまでで5時間活動出来る筈だよ。」

「ホゥ?、筈、ネエ、そいつは良いがよ、フロートは付いてん  
だろつな?。沈んだらお仕舞いなんてな無しだぜ?。」

「もちろん付いてるさ、ほら、ここに収納されてるんだ。スイッチ  
も……、ほら、これがそうだ。」

私は機体を触りながら説明した。

「フーン、そんなら良いか。」

なんとか納得してくれたようだ。

実は今回がぶつつけ本番だと言う事は話さないでおこう。

私はジオンに水中稼働時用マニュアルを渡し、ボディーアーマーと  
フェイスガード付きヘルメットを身に付けた。

ボディーアーマーにはハンドガンタイプのショットガンが入ったホ

ルスターを初めから装着してあった。

私はショットガンを抜きマガジンを確認した。

中には暴徒鎮圧用のラバースラッグが5発、チャンバーの1発を足して6発入っている。

この弾は発射と同時に3本の腕を広げて広範囲を打撃する事で相手の抵抗力を奪うと言う代物だ。

私は用心の為に予備マガジンを2本ボディーマーのポケットに入れた。

「それじゃあジョン、無線はオープンにして待機していてくれ。」

「了解だ！。だがなあ、状況によっちゃあ勝手に動くんぜ。」

「OK！、そうしてくれ。」

私はコンテナから出てミハルと合流した。

「だ、誰！？。」

「私だ。」

ミハルは突然現れた黒い影にかなり驚いたようだ。

私はヘルメットのフェイスガードを上げて顔を見せた。

驚くのは仕方無いだろう。

ヘルメットからブーツまでが濃紺色なのだ。

星明かりの有る夜の闇には黒よりも目立たないのだ。

「びつくりさせないでよー。」

「すまん、で？、変化は無いね？。」

「うん、動く様子は無いみたい。」

「OK、銃は持ってるね？、よし、弾の確認は？、よし、いつでも撃てる様にしておきなさい。」

「は、はい。」

ミハルは緊張気味に答えた。

「何か緊急事態の時は無線器で報せてくれ。ジョンが直ぐに来てく

れるからね。」

「はい!。」

「じゃあ行って来るよ。」

「はい、気を付けて。」

私はミハルに左手を上げて応えながら右手で銃を抜きマニュアルセイフティーを解除した。

さて、ここからが本当の勝負だ!!。

クルーザーに乗り込むとまずは機関室へと向かった。

船室で電気を使っている以上誰かが機関室内にいて発電機を管理しているはずなのだ。

あの市長が自ら発電機を動かすとは到底思えなかった。

機関室のドアの前で私は中の様子をつかがった。

話し声は……、無い。

外から見た機関室の広さから察するに入れるのは2人が限度だろう。

私はドアの前から少し離れてから無線器に話しかけた。

「ジョン、聞こえるか?。聞こえたらそのまま話してくれ。」

「オウ、何でえ?。」

「市長はいつもの位の人数で外出してるか分かるかね?。」

「アア、たしか付き添ってるのはジジイの運転手1人だけのはずだぜ。」

「?、……ボディーガードではないのか?。」

「運転手がボディーガードを兼ねてるって話だ。」

「ウーム、何者だ?。」

「何でも“中国拳法の達人”だって話だ。」

「!、了解した。」

よりによって拳法使いとはな……、万が一でも長引いてはいけない局面なのだ。

私はボディーアーマーに付いているポケットの1つから小さなスプレー缶を取り出した。

それには無色無臭な神経系に作用するガスが入っているのだ。

私はガスマスク（活性炭式ではなく酸素ボンベ式）を装着してもう一度機関室に近づきドアの空気取り入れ口にガスボンベのノズルを差し込んだ。

私は出来るだけゆっくりと、音が立たない様にボンベのボタンを押し込んだ。

ガスボンベの中がすつかり空に成ってからしばらくすると機関室の中から“ズダンッ！”と人が倒れた様な音がした。

私は部屋のドアを開き中を確認した。

部屋はほぼエンジンで占められていたが、隅の方にパイプ椅子と男1人が横倒しに成っていた。

私は男に近づき部屋の壁にぶら下がっていたロープを使ってぐつたりと成った男をパイプ椅子に縛りつけた。

改めて男の顔を見てみると、一見東洋人の様に見える様にメイクされた白人の老人であった。

こう成つて見ると“中国拳法の達人”と言うのも怪しいものだ。

私は発電機の燃料残量を4〜5分で止まるギリギリまで減らしてから部屋を出た。

下手な細工よりも確実なタイマーなのだ。

そして私はこの船の客室……、サムと市長の居る船室の前で電源がダウンするのを待った。

船室の中からは市長のまくし立てる声が表まで響いていた。

「昼間私は君を無能だとは言ったが…そこまで間抜けな奴だとは思っても見なかった！」

市長……、モーガンはサムと2人だけの船室で先ほど迄の紳士的な態度が嘘の様に、かなり荒れている様子だ。

方やサムは恐縮しているのか声は聞こえて来なかった。

「あの兵士達の中にも家族が行方不明に成っている者が居ないとは

限らんのだぞ！。それを貴様は……！。」

いよいよモーガンの本性が現れ出した様だ。

「……。」

サムは相変わらず一言も発しない。

バンツ！！

「何とか言いたまえ！！。」

サムの煮え切らない態度にしびれを切らしたのだろう。

モーガンはテーブルを両拳を叩きつけて叫んだ。

「今回の件で前から気になっていたんですが……。」

サムが話し始めた。

思いの外落ち着いた口調だ。

「市長の経営してる保険会社ではどうして補償項目に“戦争による死傷”なんて入れたんですか？。こいつさえ無ければ支払い義務も無かったでしょうに……。」

もつともな話だ。

一般的な生命保険では交通事故や傷害事件、自然災害や火事などの一般的な生活の上で起こりうる事象を対象にするものだ。

いくら何でも戦争を一般の事故と同列に扱うのは無理が有る。

「そりゃあ君、掛け金を吊り上げる為に決まっているじゃあないか。この街自体が軍の関係者で溢れているんだ、良い商売さ。空襲迄はな。」

最後は苦々しく吐き捨てる様に言った。

「だいたい連邦軍に戦争を仕掛けて来る奴が居るなんて誰が考えるものか！」

連邦市民の意識など、その程度の物なのだろう。

アースノイドにスペースノイドの暮らしが理解出来る訳が無いのだ。確かに、地球でも地域によっては水に高額な値段が付けられたりするらしいが、コロニーでは水は愚か空気にすら税金がかけられているのだ。

納税能力の無い物は死ねと言わんばかりだ。

宇宙に暮らすと言う事は空気と水の代金を支払うために働き続ける  
と言う事なのだ。

そして、その取り立てをしているのが連邦政府なのだ。

我らが国父ジョン・ズムはエレズムとコントリズムの観点からコロ  
ニー国家独立を説いたが、我々一般市民にとっては重税を課す連邦  
政府の支配から逃れたい一心だったのだ。

「そう言えばあの男、ジャン・バレットの拉致には失敗したと言っ  
ていた様ですが……?。」

サムが我々の事を話し始めた。

ガチャツ!

乾いたクラツシュ音が響いた。

モーガンが壊れたクリップ型盗聴器をサムに投げつけたのだ。

「こいつの意味が分かんのか、君は!。襲撃の事なぞとつくにバ  
レていたんだ!。貴様がこんな物を持ち込みさえしなければこんな  
自体には成らなかつたものを……。」

「そんな!、そもそも市長が保険金を出し渋ったりしなければ……、

」

サムが抗議しかけた時、不意に部屋の灯りが消えた。

私の仕掛けた“タイマー”がようやく働いたのだ。

「……、なんだ!、どうなってる!?。」

モーガンがわめき出した所にドアを開け、私は入って行った。

「ルータン、どうした速く復旧させんか!!。」

「ルータン?、あのじい様の事かい?。」

私は落ち着いた口調で聞き返した。

「なんだ?、貴様誰だ!?。」

「市長さん、痛い思いをしたく無かつたら黙って付いて来て欲しい  
んですがね?。」

私はモーガンの問いかけを無視して言った。

「その声は……、ジャン・バレットか?。」

それまで黙っていたサムが言った。

「結構鋭いじゃないかサム、アンタにも来てもらおうぞ。さあ二人とも立ちたまえ！」

私はスタン弾入りのショットガンを専用ホルスターに収め、あらかじめ用意していたフラッシュライト（特殊警棒兼用）を左手に構えて相手の顔を照らした。

「さあ！、コイツで仲良く成って貰おうか？」

私は簡易型の樹脂製手錠をサムの方に放り投げた。

樹脂製のベルトが2本繋がった形をした物で1度ループさせてロックを効かせると外すためには専用のカッターで切断するしか方法の無い物である。

アラミド系繊維の“アイアンファイバー”が入っているので一般的なナイフでは切る事は出来ない物なのだ。

「なぜ私が……？、拒否する……！」

モーガンは激昂してわめき始めた。  
ドゥー！！

私はホルスターのショットガンをクイックドロで撃ち放った。

結果モーガンの座っていたソファアーには深々とYの字が刻まれる事と成った。

「自分の置かれた状況を認識して欲しいんだがね。」

モーガンは渋々と、サムはイソイソと簡易型手錠で自分たちを繋げたのだった。

二人の手首が繋がれたのを確認している所にミハルから連絡が入った。

『所長さん！、誰かそっちに行つたよ！。』

「？、そいつはどの辺りから出て来たんだ？」

『所長さんが最初に入った部屋からだよ。』

「？、OK、君はそのまま待機していてくれ。」

「はい!。」

私が通信を終えて二人に向き直るとモーガンが睨み付けていた。

「なんだ!、誰と話していた!?!。」

あいも変わらぬ高圧的な態度を続けていた。

「言える訳が無かるう?。大切な協力者なんだからなあ。さて市長!、済まないがドアを開けてくれたまえ。」

私は言いながら市長をドアの方に押しやり彼の肩越しにショットガンを構えた。

私はモーガンとサムの陰に隠れる形に成った。

モーガンが渋々ドアを開けると、そこにはルータンが右手に大型のマチエツト(銃)を降りかぶっていた。

私のフラッシュライトで逆光に成り目の前の人影が誰なのか確認出来ないままルータンはマチエツトを降り下ろそうとした。

「止めんかー!!、バカものー!!。」

暗闇の中、モーガンの絶叫が響き渡った。

絶叫を聞いたルータンのマチエツトは途中で軌道を変え、モーガンの残り少ない頭髪を数本風ぎ払うに留まった。

目標物を失ったルータンはもんどりうって倒れ込んだ。

やはり“中国拳法の達人”と言うふれこみはデマの様である。

私はモーガン達を退かすとショットガンとフラッシュライトをルータンの顔に向けた。

「さあ立ちたまえ、お前さんあの粘着テープからどうやって抜け出したんだい?。」

「……。」

ルータンは無言のまま右手に持ったままのマチエツトを横に風いできた。

ガッ!!

マチエツトは私のブーツに仕込まれたスチールプレートに少しだけ傷を付けて止まった。

「グワワッ!。」

ルータンは意味不明の呻き声を上げて右手を抱え込んだ。固い物を殴り付けて右手が痺れたのだろう。

「狙いは悪くないんだがねえ……。」「ガチャンッ!!」

私は爪先に鉄芯の入ったブーツでルータンのマチェットを蹴り飛ばした。

「さて、ご老体、そのまま立ってくれたまえ。」「……………」

ルータンはだまっただままユックリと立ち上がった。

「もう一度聞くが、どうやって脱出したのかね?。」

私の質問にルータンは口元をニヤケさせながら抱えていた手を前に出した……。と、その刹那手首のスナップだけで手に隠し持っていた刃物を私の顔目掛けて投げた。

その物体は狙い変わらず私の右目に迫って来た。

私は咄嗟に首を左に捻り“それ”をやり過ぎし、同時にショットガンのトリガーを絞っていた。

ドッ!!

物体は私のフェイスガードを掠めて後の壁に当たり、ショットガンから発射されたスタン弾はルータンの左肩に張り付き鎖骨を砕いた。

「ウグウウ……………」

私は左肩に手を添えてうずくまり、呻いているルータンを無理矢理後ろ手に取り押さえ簡易型手錠で拘束した。

後の壁には奇妙な形のナイフが突き刺さっていた。

私はそのナイフを手に取り刃にライトを当てて確認した。

その刃はオイル状の液体で濡れていた。

何かの毒薬なのだろう。

本人は予め解毒剤を飲んでおいて、相手にこの刃物で少しでも傷を付ければそれで終わりと言う訳である。

「暗器（隠し武器）使いとは恐れ入ったよ!。」

ドカッ!

私はルータンの左肩に警棒兼用のフラッシュライトをおみまいした。  
「グガア!!。」  
私はうずくまったルータンをその場に放置してモーガンとサムを連れ出す事に成功した。

私は2人を連れて船から降りた。

ミハルの居る辺りを見たが、ちょうど街灯の陰に成っていて人相ま  
で確認する事は出来ないだろう。

しかし用心に越した事はない。私は2人を少し迂回気味にトレーラ  
ーまで誘導していった。

「ネエ所長さん、アタイはこの後どうすれば良いの?。」

私が離れて行くのが不安に感じたのだろう、ミハルから質問の通信  
が入った。

「そうだな……、私がこの2人をコンテナに收容するのを確信出来  
たらトレーラーの助手席に戻ってくれ。」

「了解!。」

「オウオウ!、オレはどうすんだい!、また出番無しかい!?。」  
今度はジョンである。

「すまんがもう少しそこで待機していてくれ。」

「このまんまかよ!?。」

「我慢してくれ、今夜中にケリを着けておきたい事が有るんだ。」

「チツ!、ワーツタよ!!。だがな、下らねえ使われ方だったら後  
で只じゃ置かねえからな!!。」

「了解した。」

ジョンの方も何とか収まりが着いた様である。

「クツ!、ケリを着けるだ?。」

モーガンが振り返って私を睨み付けながら言った。

「わ、ワツシらをどうするつもりなんだ?。」

サムは不安げな顔で私を見ていた。

「中で教えてやるよ。」

私は2人をコンテナの奥に押しやった。

そこには固定された小さなテーブルと突き当たりの壁に折り畳み式のソファアーベッドが設置されていた。

そこはコンテナの奥に設えた隠し部屋だった。

私はソファアーベッドを展開して2人を座らせてドアを閉めた。

部屋はほぼ密閉空間に成った。

私は灰皿をテーブルに置き、私用に持ち込んだパイプ椅子に腰を下ろした。

「……、私は何も喋らんぞ!!。」

私がタバコ(！)に火を着けて一息着いた時にモーガンが痺れを切らして言った。

「フーツ、さて、そいつは困ったな。」

私が2〜3回タバコをふかしただけで狭い部屋いっばいに煙が充満した。

「何かって言うてもコイツしか無いが……、飲むかね?。」

私はトートバッグからミネラルウォーターの1ガロンボトル(ポリタンク)とプラスチックのコップを出した。

「まず君が飲みたまえ、そうしたらいただこう。」

「用心深いこつて、じゃあ遠慮無く……。」

私は水をコップに並々と注いでから一気に飲み干した。

「……ふう、ではどうぞ。」

別のコップに水を注いで2人に渡した。

2人は無言のまま水を飲み始めた。

モーガンはコップをテーブルに置くとまた私を睨み付けた。

サムは空に成ったコップを持ちながら視線をそのコップに向けていた。

「2人とも落ち着いた様だね?。」

私が声をかけるとモーガンは視線を外し、サムは下からぬめ上げる

様に私の方を見た。

「前から疑問に思っていたんだが…何で死体を隠したりしたんだ？。」

「」

「！、……………」

「そりゃあ……………」

私の質問にモーガンは沈黙を続け、サムは何か言いかけてから止めた。

「フム、質問を変えよう。じゃあなぜ軍が協力してるのかね？。」

「軍？、…………ク、クツクツク…………あははは。」

突然モーガンが笑いだした。

「本当に君は“軍”が協力してると思つとるのかね！？。」

「シ、市長？。」

モーガンの様子を目の当たりにしてサムは狼狽していた。

「ハヒヒツ…………キ、貴様何をした？。」

モーガンが笑い顔をひきつらせながら言った。

「私はサディストでは無いのでね、それに君らも同じ喋るなら痛いよりは楽しい気分の方が良いだろう？。」

「…………これか！、この水に何か仕込んだのか！？…………ヒヒツ…………」

「」

サムにも効いて来たようだ。

「ま、そんな訳で気持ち良く話して貰えるかな？。」

「キヒツ。」

「ハヘツ。」

2人とも笑い声で応えた。

訓練次第である程度の苦痛には耐えられる様に成るが、快感に抗う事は難しいものなのだ。

2人の話は今回の件以外の贈収賄にまでおよび、とりとめが無くなつて来た。

私はタバコの銘柄を換えて吸い始めた。

そのタバコを一本吸い終わる頃にはあれだけ五月蠅く騒いでいた2

人は安らかな寝息を立てていた。  
モーガンはテーブルに突っ伏し、サムはソファアーベッドに横たわっていた。

2人の話を統合すると次の様になる。

まず事の発端は基地指令ジョージ・アンダーソン准将が予め掴んでいた空襲の情報を信じなかった事から始まった様である。

曰く……、『ジオンの様なスペースノイドに地球の何が解るものか。宇宙では確かに一歩及ばなかったのだろうが、地上での戦争にあの様な巨大人形兵器などナンセンスだ。だいたい連中が航空兵力を持つているなど信じられん。』……だ、そうである。

全く持つて根拠の無い自信と言う物ほど恐ろしい物も無い。

しかも良くない事は重なる様で、3ヶ月前から準備していた基地祭の日程と重なってしまったのだ。

戦争中そう言った催しは延期なり中止なりにするのが普通であろうが、何を思ったか強引に開催してしまったのだ。

そして何より基地指令が隠したい事とは、基地のシエルターに優先して収容したのが基地祭のセレモニーに列席した政府高官や自分たち軍の高級士官達であった事、そして自らの恐怖心からまだ収容人数に達していないシエルターを封鎖して他の民間人を見殺しにしてしまった事なのである。

そしてモーガンもその列席者の1人だったのだ。  
こうして2人の利害が一致したのである。

『オウ、いきなり静かに成っちまったけどどうなってんだ?。』

「ああ、2人には眠ってもらったよ。」

『……殺つたのか!?!』

ジョンが凄い声で問い質して来た。

「ハハツ、言葉通りに眠っているだけさ。」

『フウ、で?、どう言うカラクリだ?、ホントに水に仕込んだのか?。』

「いいや、コイツは本当にただの水だよ。自白剤と睡眠薬は私のタバコに含まれてるのさ。銘柄によって入ってる薬剤が違うんだよ。ちなみに私は無効化処理を受けているから何とも無いのさ。」

『ホゥウ?、アツ!、そうだと副作用とか習慣性とかはネエンだろうな?。』

「せいぜい酷い二日酔いが2〜3日って程度でお仕舞いさ。」

『フウン……、なら良いがよ、どうすんだい?、連中の話は証拠にや成らんのだろう?。』

「そうだな、そのためにアンタはそうやってスタンバイしている訳なのさ。」

『なるほど。』

2人の話で大雑把には有ったが目標の座標を特定する事が出来た。場所は軍港の警戒水域に有る岩礁である。

『コイツ(クラブマン・クレイン)でホントに大丈夫なんだろうな?。』

ジョンの声はいつになく不安気だ。

「まだコイツの潜水能力を疑ってるのか?。」

『それも有るがよ、コイツで軍の警戒水域に入って大丈夫かってえのっ!?!。』

もっともな話だ。

「海上航行すればさすがに見つかるだろうがな、ソイツには潜航能力が有る事を忘れなさんな。潜って行けば大型のイルカがサメと見分けはつかんよ。」

『いきなり潜って行けっか!?!。』

「ソイツには湾内の海底地形と海流のデータを入れてある。それで

心配は無かるう?。」

「……、そんなデータをいつの間に……?。」

極秘データのハッキングは我々スパイの常套手段だ。

「コンソールの左端に後付けのスイッチが有るだろ?、ディスプレイに海底地形を立体表示するからそれを頼りに目標まで行ってくれ。」

「自分の位置は表示されるのか?。」

「海に入ったらスイッチを入れてくれ。立ち上がったディスプレイに表示されているはずだから。」

これは軍が索敵用に使ってるアクティブソナーとシンクロさせたシステムで直接及び間接の音紋を解析する事で現在地を特定するのである。

それは現在我軍が実用化しつつある海洋戦力の為の評価実験も兼ねているのだ。

行動プランはこうだ、まずクラブマンで目標の軍用コンテナに取り付き固定しているワイヤーとウエイトを取り除き、代わりに次元作動式のフロートを取り付ける。

後は時間を見計らって漂着予定ポイントへ行き我々が発見者となりマスコミに情報を流せば良いのである。

私はジョンを作業開始予定地点に運ぶ為にトレーラーを移動させた。ジョンは到着までの間に作業機の中で動き易い様にとノーマルスーツを脱ぎ捨てた。

拉致した2人が眠っている隠し部屋には外側から鍵をかけてある。助手席には暗い表情でミハルが押し黙っている。

2人のバカ騒ぎをずっと無線で聞いていたのだから気分が滅入るのも仕方が無いだろう。

「ミハル、気分が優れない様なら帰って休みなさい。」

「イヤよ、アタイも行く!、行かせてよ!!!。」

ミハルは弾かれた様に答えた。

「辛いぞ、それでも行くのか?。」

「そんなの……、分かってるけど、父ちゃんと母ちゃんにちゃんとお別れ言わなきゃ……。」

「それが君のケジメって訳か?。」

ミハルは無言で、虚空を睨みながら力強くうなずいた。

予定のポイントに到着するとジヨンは手慣れた操作でクラブマンを海に向かわせた。

入水後、打合せの通にスイッチを入れて暫くすると何かの起動音と共にそれまで透明だったキャノピーが乳白色に曇り3DのCGが投影された。

「ヒュ〜、コイツあスゲーや。」

画面には海底の地形だけでは無く海流の流れやリアルタイムに動きまわる魚群や漂流物まで写し出されていた。

「後はコイツの操作性だが……。」

ジヨンは言いながらレバーを動かしてみた。

「……、ほとんどスペースポッドと一緒に、うん悪くねえ。」

ジヨンは浅瀬の岩場に降りて試しにモニターのスイッチを切り、ヘッドライトのスイッチをONにした。

明度は段違いに低いが、そこには今まで表示されていたCGと寸分違わぬ風景が広がっていた。

「……、いくらなんでも凄すぎるぞ、これは……。」

もう一度モニターを立ち上げ直してからジヨンは予定行動に移った。

〜つづく〜

## 第2話：軍港の街にて 2

ジョンのクラブマンを降ろした後、私はトレーラーを合流ポイントへ走らせた。

入水ポイントから目標、合流ポイントと緩やかながら湾内に海流が流れているのだ。

その流れに乗れば多少だが時間の短縮とエネルギーの節約が出来るのである。

「ジョンの事をどう思う?。」

私は唐突なタイミングで助手席のミハルに話しかけた。

「……?。」

自分に向けられた質問に面食らったのだろう。

助手席から乗り出して私の顔を覗き込もうとした。

「ヤツは何故あそこまで私達に協力するんだろうな?」

私は質問をより具体的な内容に変えた。

「え?、だってジョンを呼んだのは所長さんだよ?。」

「まあそうなんだがな、わざわざ危険を犯す必要がヤツには有るのかな?。」

「ウウーン、それは…私達の後見人だから…。」

「後見人?、それは施設に入っている時の事だろう?。今、君と弟達の身元引き受け人は私なんだよ。つまり、今のヤツは君達兄弟に対して責任全く無いんだよ。」

「……。」

ミハルは何か答えようと口を開きかけたが、結局何も答えられなかった。

「……、そもそもヤツは何者だ?。」

「バーのマスター。」

ミハルはぶっきらぼうに答えた。

「それは表の顔だな。」

「所長さん、さつきから何が言いたいのよ?。」

ミハルの不信感私に向けられた様である。

「私の素性に気が付いたのはジョン1人だけだ。もちろんヤツと話していて私がヘマをやらかした訳では無いし、いわゆるジョン訛は訓練で完璧に消して有る。では何故分かったんだ?。君に私の事を話した時、ヤツは何か言つて無かったか?。」

「そう言えば、“アイツからは独特の匂いって言うか雰囲気を感じる”とかつて言つてたような……。」

「それから?。」

「それで、“ヤツはジオンのスパイだな。もし警察か軍に捕まったら只では済まんな。”って。」

「私もアイツからその“独特の匂い”って奴を感じているのさ。」

「じゃあジョンもスパイだって言うの?。」

ミハルは“まさか”と言つた表情で聞き返した。

「スパイでは無いとしても潜入捜査官か何かじゃあ無いかな?。」

「……。」

ミハルの顔はますます“まさか”の色を濃くした。

「ジョンがただのお節介なら問題は無いさ、だがもし私の感が当たつたなら、ヤツが連邦捜査官だつたらきつと私達を止るだろうな。」

「もし、もしもそう成っちゃったらアタイはどうすればいいの?。」

「もしもヤツが阻止行動に移つたら私が全力でヤツを止めるか時間を稼ぐ。そして私が戻れない時は、ミハル、君がやるんだ!。」

私はカードケース(名刺入れ)を手渡した。

「そこにはマスコミの連絡先があらかた入れて有る。今回の件を話せば必ず食い付いて来るはずさ。」

ミハルは手渡された分厚く膨らんだ合皮製のカードケースを見つめた。

「大丈夫……だよな?、所長さん。」

ミハルは恐る恐る聞いた。

「多分な、だがこの世には“絶対”はあり得ない事だからなあ。」

そしてトレーラーのキャビネットは沈黙に支配された。

合流ポイントに到着したのはジョンが上陸する予定時間の12〜13分程前だった。

私はトレーラーを道の路肩に止めると偽装のために作業着と作業ヘルメットを着用した。

それは見た目の薄さとは裏腹に拳銃弾なら確実に止めてくれる優れ物だ。

ただし衝撃吸収能力には期待する事が出来ない。

私はさらにクラブマンの収容スペースを確保するために偽の工事看板を立ててトレーラーの周りをカラーコーンで囲った。

夜が明けて辺りは明るく成り、車の通行量も少しずつ増え始めた。

私は後続車両がトレーラーに追突しない様に交通誘導をしながらジョンの到着を待つ事にした。

ジョンのクラブマンが姿を現したのは予定時間を20分程過ぎた頃だった。

ジョンが岩場にたどり着き登って来る間に私は交通の合間を狙ってリモコンを使いトレーラーのバックドアを開け放ち、リフトを下げ、クラブマンの収容準備を整えた。

トレーラーの横迄上がって来たクラブマンは、しかしトレーラーのリフトに乗ろうとはしなかった。

「どうしたジョン、トラブルか？」

私はインカムに話しかけた。

『なあ……、コイツのOSは軍用の物だよな？。なんでオレをパイロットに選んだんだ？。』

「どうしたんだ？、私達を手伝いたいって言い出したのはアンタの方だぞ？。」

『しかしな、コイツは立派な軍事機密なんだろう？。もう一度聞くがよ、なんでオレをパイロットに選んだ？。』

ジヨンは言いながらクラブマンを交通誘導をしている私の方に向けた。

「正直に言うとな、アンタを拘束しておきたかったんだよ。アンタの正体が何者であっても海底作業中は地上で余計な事は出来んからなあ。」

『やっぱり……、気が付いてやがったかよ!!。』

言うが早いか、ジヨンはクラブマンのマニピュレータを振り上げながら私めがけて突進させた。

しかし、クラブマンは所詮作業機に過ぎず、その動きは決して速いとは言えなかった。

想定した通りの攻撃を難なくかわした私は、クラブマンの背後に回り込み燃料電池のメインブレーカーをOFFにした。

ジヨンもそれを読んでいたのでだろう。

攻撃がかわされた時点でシートベルトを外し、キャノピーを開いて外に転がり出た。

ジヨンの手には大口径のリボルバーが、私の手にはアーマーピアッシング弾の詰まった小型オートマチックが収まっている。

ジヨンは懐のホルスターから、私は作業着の工具入れから各々抜き放ったのだ。

私達は動かなく成ったクラブマンを挟んでお互いを牽制しあっていた。

「結局アンタは何者なんだ？。」

「ヘンツ！、人に素性を聞く時や自分から名乗るもんだぜ!。」

「私は“突撃機動軍戦略諜報部海洋分隊”所属の諜報大尉だ。まさか本名まで明かせとは言わんだろうな？。」

「突撃機動軍？、キシリアの秘密警察かよ。オレあ“連邦軍特別立法第三者委員会”所属の雇われ潜入査察官だよ。」

私の感はどうやら当たった様である。

「その“潜入査察官”殿が何だつて私みたいなジオンのスパイに協力したんだ?。」

私はクラブマンを右に回り込みながら質問した。

「この基地司令官、アンダースン准将つてのは悪い噂の絶えないヤツでなあ、ジャブローは何とか尻尾を捕まえて更迭したがつてた訳よ。」

ジオンも私の動きに呼応して右に回り込み始めた。

「それで?。」

「今回の隠ぺい工作の件は初めつから分かっちゃあいたんだがよ、なかなか証拠がな……、それでアンタの話に乗っかる事にしたのさ。」

「それが何だつてこんな状況に成るんだ?。」

私は皮肉を込めて言った。

「やりすぎだわ、このまま突つ走つたらアンダースン准将だけじゃなく連邦その物の支持率が急落しかねえからな。」

「やはりそんな所かよ。」

私はさらに右側に回り込んだが、そこにジオンの姿は無かった。

ジオンもほぼ同じタイミングで回り込んでいたのだ。

「そう言うアンタはどうなんだ?。ミハルなんぞに肩入れしてよ。」

今度はジオンからの質問(牽制)が浴びせられた。

「最初は誰でも良かったんだがね、あの子は逸材だよ。お前さんは気が付かなかつたのかね?。」

「何の逸材だつて?。オレアアイツの身元引き受け人だつただけさね。それにアンタと違ってスカウトはやって無いんでな。」

「ほう?、それにしても可愛がつてもらえだの、私がジオンだだのとミハルに種々と要らん事を吹き込んでくれたじゃあないか?。」

「ただの探りだろうが。初めて合つた時にオレアアンタの事をジオンのスパイだと直感したんだがね、確信迄はもてなかつたんだ。そんな時にちょうどミハルの話が出たんでなあ。」

「それで彼女を道具に使つたつて訳かい!。」

私は回り込む速度を上げた。

次の瞬間私とジョンは正面から鉢合わせに成った。

ジョンも現状に焦れてきたいたのだ。

ドンッ！！

ダッ！！

私達はお互いの姿を見た瞬間、反射的にお互いに向かって引き金を引いていた。

ミハルは走っていた。教えられたタイムリミットが迫っていた。

あと10分以内にロイター通信社の記者、ベネット・オマリーに連絡が付かなければタイミングが狂ってしまうのだ。

ミハルの向かった先はジョンの店だった。

ミハルの知る限り、この近辺で確実に繋がる電話がそこに有ったのだ。

ミハルはジョンの店の裏口に回った。

ジョンが世話をしている子供達の集まり、“朝食会”は終わっている時間で、そこには誰も居ない筈だった。

しかし裏口の前に男が2人しゃがみ込んでタバコをふかしていた。

「トニー、ヴィンセント、あんた達今朝は随分と早いじゃない?。」  
呼ばれた2人はギョツとしてタバコを地面に捨てながら立ち上がり、ミハルに振り返った。

「何だよミハルかよ……嚇かしやがって。」

「テメエ、ちよっと見ない内に随分と生意気な口きくように成ったじゃねえか?。」

口数の少ないヴィンセントがミハルに凄んでみせた。

「あらそう?、後で謝るからそこ通してよ。」

ミハルは自分でも驚くほど落ち着いて以前まで苦手だった2人をあ

しらっていた。

「そうは行かねえなあ。ボスが帰って来るまで誰も通すなっ  
て命令なんだよ!。」

そう言うとトニーは得意気に一枚のメモを取り出しヒラヒラと見せ  
びらかした。

「悪いけど、アタイ急いでんのよ。」  
ダントツ!!

言うが早いか、ミハルはパンツの後ろポケットに入れていたハンド  
ガンを抜き撃ちした。

弾丸はトニーの鼻先でヒラヒラと踊っていたメモを撃ち抜き四散さ  
せていた。

一瞬の静寂の後2人はわめき出した。

「な、何だよお!。」

「あわあ!!。」

ミハルはなおもハンドガンをウエーバースタイルで構えながら言い  
放った。

「3度は言わないよ!、退きな!!。」

2人は意味不明な事を叫びながら違う方向に走って逃げた。

「情けない奴ら……。」

ミハルはハンドガンをポケットにしまい込み何事も無かったかの様  
に裏口へと入って行った。

気が付くと私は空を見ていた。

ジョンに撃たれて仰向けに倒れたのだ。

意識が戻った途端右胸の下辺りがごっそりえぐり取られた様な激痛  
が走り、身体中の体温が急速に抜け落ちて行く様な、嫌な感覚に襲  
われた。

私は恐る恐る右胸をさすってみた。

そこには大口徑（多分50口径だ）のホローポイントが直径20m程に変形して貼り付いて、肋骨を陥没させていた。確かに貫通はしていないかった。

アドレナリンの影響でか視界が狭く成って来た。

トレーラーまでたどり着けば戦闘薬で気付けする事が出来る。

いや、その前にジョンだ。

手応えは有ったのだがどう成ったのか確認しなければ…。

私はふらつく身体に鞭打って立ち上がりクラブマンに手をつた。

クラブマンに寄りかかりながら私はジョンを探した。

「ヨオ、調子は……グツ！、どうだい？」

よろよろと立ち上がった私を見て、ジョンの方から話しかけて来た。見るとジョンは右手を抱え込んでうずくまっていた。

良く見れば身体中からかなり血を流している。

私の撃った弾がジョンのリボルバー、それもシリンダー（弾槽）に当たり、残っていたカートリッジを一気に暴発させ、その衝撃で銃が粉々に弾け飛んだのだ。

その銃を握っていたジョンの身体に飛び散った破片が襲いかかり引き裂かれたのだ。

「どうもこうも無い、アンタのおかげで立ってるのがやっとだよ。」

「こっちやぁ立つ事も、ウグツ……出来やしねえんだ、贅沢、言うない。」

相討ちでは有ったがダメージは私の方が少ない様だ。

「少し待ってる。」

私は激痛と闘いながらトレーラーへと向かった。

ミハルがベネット・オマリーを伴って“現場”に到着したのは予定より30分ほど過ぎてからだった。

“現場”とは『漂着したコンテナを発見する“予定”の場所』のこ

とである。

現場近くの路肩に所長のトレーラーが止められていた。

運転席を覗くと“所長”、ジャン・バレットの姿は無く、助手席に包帯を身体中に巻かれて手足を拘束されたジョンが横たわっていた。どことなく不自然な寝姿だった。

「何か薬で寝むらされている様だな。」

「……うん。」

ベネットの言葉にミハルはうなづき返した。

ミハル達はトレーラーから離れて海岸沿いの岩場を探したが、やはり所長の姿は無かった。

「何か連絡を取る方法は決めて無かったのか?。」

ベネットに質問されて、ミハルは自分がまだ小型の無線機を持っていた事を思い出した。

「アッ!、これ……、ちよつと待ってて!。」

ミハルは無線機のスイッチを入れて送受信テストを始めた。

『ザー、ザー、……こちらジャン・バレット、感度良好。やあミハル、待ちくたびれたよ。オーバー!』

「こちらミハル、ごめんなさい。所長さん、今どこに居るの?。オーバー!。」

『トレーラーの進行方向に約300m程行った岩場だよ。君達が近づいたらこちらから合図するよ。オーバー!』

「了解!。アツチに向かつて300mの所だつて。」

「リョーカイ。それじゃあ行こうか。」

「うん!。」

2人は改めて歩き始めた。

目的地に近づくとつれ、ミハルは言い様の無い不快感を強めて行った。

隣を歩くベネットの顔をチラッと見ると彼はその視線の意味をくみ取り答えた。

「私は何度かかいだ事が有るんだが、この匂いだけは慣れ無いな。」

「匂い？……ウブエツ！！。」

ミハルはその場でしゃがみ込み嘔吐してしまった。離れた所から徐々に近付いたので鼻が慣れていたのだが、口に出して言った途端、その正体を実感してしまったのだ。

それは腐敗臭だった。

それも植物のそれとは全くの別物、動物の肉が腐った時の匂いだったのだ。

ミハルは自分で吐き出した胃液を見ながら（そう言えば昨日から何も食べて無かったな……）と思いついていた。

「大丈夫かい？、気休めだがどうだい？」

ベネットは携帯用ティッシュペーパーと一緒にミント味のタブレットをミハルに差し出した。

「……有難う。」

ミハルはティッシュペーパーで口元を綺麗に拭き取り、渡されたタブレットを3粒口に含んだ。

途端に刺すような刺激が口の中に広がり、ミハルは顔を歪ませた。

「最初は辛いだろうけど飲み込まない様にすればこの匂いも何とか紛れるだろう？」

ベネットに言われて、ミハルはそのタブレットを飲み込む事も吐き出す事も出来なく成ってしまった。

そして2人はまた歩き出した。

しばらく行くと潮騒の音が大きく成り、海岸が近い事を教えてくれた。

大きな岩を越えるとそこには……、漂着した巨大な軍用コンテナが目に見えび込んできた。

コンテナは何かに激突したらしく壁の一部が裂けて中から遺体がこぼれ出ていた。

説明の必要は無いだろうが、それこそがこの悪臭の発生源なのだ。

「やあ、遅かったな。」

ミハル達がコンテナの惨状を半ば呆然と眺めているところに私は声をかけた。

「キヤツ！、… 所長さん大丈夫？。」

ミハルは私の顔を見るなりそう言った。

「大丈夫……、とは言いがたいが、そんなに酷い顔してるかね？。」

「えっと、そのー、かなり…。」

言い難いのだろう、ミハルは言いよんだ。

その代わりに隣の男が言った。

「あつちで一緒に転がっていてもおかしく無い程だよ…ベネット・

オマリーだ。」

「アア、貴方が……、ジャン・バレットです。」

「所長さん、無理しないで。」

オマリー氏と握手を交わしている私に、心配顔のミハルが言った。

「ああ、薬も切れる頃だし休ませてもらうよ。」

後の事をオマリー氏に託して私はトレーラーに戻った。

私はトレーラーへと戻った。

途中で完全に薬が切れてしまい、それまで遮断されていた激痛にさいなまれ、ふらふらに成りながらもどうにかたどり着く事が出来た。私は助手席で眠るジョンを横目に運転席の後ろに有るソファアに移った。

先ほど強力な薬を使ったばかりなので痛み止すら飲むことが出来ない。

もしまた神経系に作用する薬を使用すれば命を落とすおそれが有るのだ。

（この痛みでは眠れやしないだろう）と思いながらソファアに身体を預けた。

その途端、私の意識は途切れた。

ブラックアウトしてしまったのだ。

いつ目が覚めたのだろうか？。

電球型の蛍光灯をぼんやりと眺めている自分に気が付いた。

目が眩む程では無いが十分に眩しく光っていた。

それはコンクリート打ちっぱなしの天井からぶら下がっていた。

見覚えの有る天井だ。

どうやら私は事務所の地下室に寝かされて居るようだ。

私が寝かされているのはキャンプ用の折り畳み式簡易ベッドだった。

右側を見ると同じ様にジョンが寝かされている。

覚醒が進むに連れて色々な事を思い出した。

と同時に左大腿部から先が少し痺れている事に気付いた。

何かの後遺症か？、とも思ったがそうでは無かった。私は左太もも

にその少女の温もりと重さを感じているのだ。

「ミハル……。」

そつと声をかけてみたが静かな寝息が帰って来るばかりだった。

「少しそつとして置いた方が良い、今しがた寝入ったばかりなんだ。」

「

声のした方へ首を動かすと、ベネット・オマリーが階段から降りて

来る所だった。

「すまないがミハルを少し持ち上げてくれないか？。ベッドから降

りたいんだ。」

「分かった、ちょっと待つてくれ。」

ベネットは静かに近寄るとミハルの肩をそつと持ち上げた。

私はそのすきにベッドから脚を退け、代わりに毛布とまくらを丸め

てミハルの下に入れた。

ベネットはその上にミハルをそつとのせ直した。

「……、大丈夫の様だな。」

ミハルの寝息は乱れる事なく続いていた。

我々は地上階に上がる事にした。

「ウツ!。」

地上に上がった私は日没の太陽に目が眩んでしまった。

「大丈夫かね?。」

ベネットは私にコーヒーを手渡しながら言った。

「ああ、ありがとう。少し座れば落ち着くさ。ンツ、チツ!。」

私はコーヒーを一口啜って口の中を危うく火傷しそうに成った。

「それで?、私はどの位眠っていたんだろうか?。」

気持ちが落ち着いた私はベネットに質問した。

地下室から地上階に上がるまでの間に私は身体の状態をチェックしたのだ。

ダルさや関節の痛み、それに日光を直に浴びた時の感覚等から推測すると3日か長ければ1週間は眠り続けた様に思えた。

「3日半って所だな。」

「そうか……、で?、状況を説明して欲しいんだが……?。」

「そうだな、どこから話そうか?。…ミハルの件だが、あのコンテナの中には彼女の両親は居なかった。モーガン氏の生命保険会社は保険金の支払い超過に陥り事実上破産、市長職は続けられそうも無い。そのあたりを受けて保険会社のメインバンクに取り付け騒ぎが起きた。これまた倒産だな。基地司令だったアンダーソン准将は司令官を解任された上に査問委員会の喚問を受ける事に成った。そんな所かな?。」

ベネットは矢継ぎ早に話ながら3日分の新聞を私に手渡した。

「ん?、査問委員会?。軍事法廷じゃ無いのか?。」

「そうだな、軍事的な背信行為とは言い兼ねるからな。」

ベネットは自分のコーヒーを啜りながら私の疑問に答えてくれた。

「すると次ぎは民事裁判か?、被害者の会は?。」

「地元の弁護士会が立ち上げの準備をしてるらしいな。」

「ミハルはそこに登録させた方が良さそうだろ？。」

私の言葉を聞いたベネットは何故か浮かぬ顔をした。

「さっきも言っただがミハルの両親は発見されなかったんだよ。つまり……。」

「つまり、“被害者の会”は行方不明の偽装が確認されなければ登録出来ない……、って事か。」

「その通りだ。」

「……。」

「……。」

私達はしばらく無言のまま、お互いの仏頂面を眺めていた。

「モー！、何で起こしてくれないのよー！」

ミハルは地下室から上がって来るなり私達に向かって怒鳴り付けた。

「君は休んでなきや駄目だ！」

ベネットが怒鳴り返した。

「ヤア、お早うミハル。」

私は場を和ませようと、わざとのんびりした口調で言った。

「アア、お早うございます……、じゃ無くて！、アタイ本気で心配したんだからね！」

「おかげで助かったよ。この3日間、1人で良く頑張ったね。」

「うん、オマリーさんが色々と助けてくれたから……。」

「だから“さん”付けしなくて良いって……。」

ベネットが照れた様に言った。

「あつ、そつだ所長さん！、なんであいつらを逃がしちゃったのよー。」

ミハルは何かを思い出し、不機嫌そうな顔で言った。

「うん？、あいつらって市長達の事か？」

あの日はミハルをトレーラーから降ろした後で拉致していたモーガン市長とサム・メイソンの2人を適当な場所に解放していたのだ。解放したと言っても眠っている2人の拘束を解き、公園のベンチに

移しただけなのだが……。

「所長さん、警察に逮捕されちゃうと思って……。」

「ハハツ、地下室に寝かされてたのはそれでか……。」

「笑い事じゃ無いんだからね！、モー。」

ミハルは膨れっ面で私を睨んだ。

そんなミハルを見て私は（そうだ、この娘はまだまだ子供なんだ）と改めて感じた。

「あの2人の事なら大丈夫だ。あの夜、自分たちに何が有ったのかも覚えていないだろうさ。」

「へ？、なんで……？。」

「最後に彼らを眠らせた薬なあ、目が覚めると5〜6時間位の記憶が曖昧に成るんだよ。」

もちろん私にはインプラントの解毒効果が有るので影響は受けない。

「それに君が撮影したビデオが有るじゃないか。」

「おいおい、ジャーナリストの目の前で堂々と違法行為の話をするのは止してくれ。」

ベネットが呆れ顔で抗議した。

「ベネット、あんたもう私の正体分かってるんだろう？。」

「ま、良いじゃないか。俺は特ダネを物に出来れば深くは追及せんよ。」

「……賢いやり方だな。」

「ネタ元は大事にせんと、この商売やってけないのさ。」  
私とベネットは改めて握手を交わした。

「あの……、それでジョンの方はどうするの？。」

「そうだな……、本人に聞いてみるか？。」

私達は軽い食事を取ってから地下室へ降りる事にした。

「生きてるか？、ジョン。」

私とミハルは地下室に戻りジョンに話しかけた。

「アア……？、アンタか……。」

ジョンは息も絶え絶えに応えた。

さっき見た時は気付かなかったがジョンは簡易ベッドに縛られていた。

私はナイフで縄を切り、ジョンの拘束を解いた。

「さて…、アンタこれからどうしたい？。」

「取り合えずシヨンベンに行かしてくれや。」

結局私とミハルでジョンを支えて地上に上がる事に成った。

地上に上がりトイレを済ませて人心地着いたのだろう、ジョンはテーブルの上に置かれた新聞にざっと目を通した。

「フー……、最悪だぜ。」

ジョンは左手で自分の後頭部の髪を掴みながら呻いた。

「で？、これからアンタはどうしたいんだ？。」

「どうするもこうするも……。オメエ等のおかげでオレあ失業だわ。」

「……」

「……」

横からミハルが聞いて来た。

「オレアよ、今回の騒ぎを無くするか、最悪もつと小規模な物にするつもりだったんだ。それがこの騒ぎだ、オイラのスポンサー様もさぞやご立腹だろうぜ。」

「で？、アンタのスポンサーって誰だったんだ？。」

「……エルラン中将だ。」

「ほう？、たしかレビル派の武官だったな？。……渡りを付けられ無いか？。」

「てめえ、何考えてやがる？。」

「アンタの失業をチャラにしてやろうと思ってね。」

「オメエ、エルランの事“レベル派の武官”って言ったがよ、どんな男が分かってんのか？」

「私が言ったのはあくまでも“こちら側”でそう思われているって事さ。アンタみたいな男を使ってる所を見ると一癖二癖有りそうだな。」

「ヤツア表面こそ軍人として振る舞ってるが、今やヨーロッパと小アジアの諜報機関トップなんだぜ。」

「願っても無い話だ、是非とも繋がりを持ちたいな。」

「マジかよ!。」

「ジヨンは私の目を覗き込んだ。」

「そうすれば私の真意を確かめられるとでも言う様に……。」

「で?、オメエのボスは誰なんだ?。」

「ジヨンは私の目を睨みながら言った。」

「マ・クベ中佐だ……。いや、今度昇格して大佐に成ったんだっけな。」

「アア?、キシリアの腰巾着か?。奴が降りて来るのか?。」

「“そちら側”ではそう思われているんだってな?。もう来てるよ。」

「私も負けじとジヨンの顔を睨み付けた。」

「なるほど……、こいつア面白れエかめな。」

「だろ?。」

「ジヨンと私は同時にニヤニヤと笑いだした。」

「な、何よ2人とも……、気持ち悪いよ!。」

「私達の会話に付いて来れない苛立ちからかミハルは不機嫌顔で言った。」

「さて、そうと決れば早速……、と行きたい所だが……、なあジヨン、アンタの知り合いに我々の言う所の“信用出来る”医者は居ないかね?。」

「そうだな、マズは医者だな。ちよつと待つてくんな。」

「ジヨンはテーブルの角に置かれていたメモ付のペン立てを取り、住所と人の名前を書き出した。」

「コイツを喚びな。」

と言つてメモを手渡した。

私はジョンから受け取ったメモに目を通してからベネットに渡した。「すまないが代わりに迎えに行つてくれないか？。ミハル、道案内を頼む。」

「え？、所長さん行かないの？。」

「未だ脇腹の具合がどうも……。長時間の運転は出来そうも無いんだ。」

「さつきジョンを運ぶのに無理したの？。」

「オレのせいだよ。」

ジョンは目をむいた。

「はは、そう言う訳じゃ無いんだが、メモの住所が……。」「私がそう言つとベネットはメモをミハルに手渡した。」

「アア、街の正反対なのね。……あれ？、この住所つて人は住んで無い筈だけど？。」

そこは宇宙移民完了区画だったのだ。

「なんせモグリの医者だからなあ。」

ミハルの疑問にジョンが応えた。

ミハルとベネットが車を出すのを確認してから私達は話を再開した。「しかしよ、何の土産も無しじゃあエルランだつて乗つて来ねえぜ？。」

「もちろん分かつてるさ。挨拶代わりに極秘情報を二三見繕つて持つて行くさ。」

「随分簡単に言つじやねえか？。」

「こちらの御家事情つて訳さ。その代わりそちらも何か交換情報がないとな……。」「

「そう言やあ海軍がそこいら中の艦ふねをかき集めて何かおつ始めるつ

て聞いたなあ。」

「ほう……、面白そうな話じゃないか。」

「んん、まだ詳しくは知らねえんだが……。で？、そっちのネタは何でえ？」

「現在ギレン主導で進めているジャブロー攻略用の極地戦用MSの資料が……。」

「有るのか！？。」

「もうすぐ手に入る予定だ。」

「チツ！。氣い持たせやがって……。」

我々の交渉は既に始まっているのだ。

この裏取り引きが元になり、ジオンは連邦のハワイ奪還作戦を、連邦はペズン計画の詳細を入手する事になる。

余談では有るが、連邦のハワイ奪還作戦を早期に知り得た事でジオンでは水陸両用実験機“ザク・マリントップ”と“アツガイ”を実戦配備に移す事に成った。

特にF型ザクのジェネレータとフレームの一部を流用する事で、初めての本格的な水陸両用MSとして完成した“アツガイ”の対艦攻撃能力の高さから、後に『ミッドウェイ海戦』と称されるこの戦いは5：1の戦力比にも関わらずジオン軍の圧勝に終わった。

私の“クラブマン・クレイン”からのフィードバックデータが役立つたのである。

私とジオンの密談が終わってしばらくするとミハル達が老婆を伴って帰って来た。

その老婆は見るからに路上生活者風に薄汚れていて、とても医者には見えなかった。

「やい、ジオン坊！、お前また何かやらかしたなあ！？。まったく、いつまで経ってもヤンチャが治らないだから……。」

老婆は開口一番ジョンを罵った。

「シスター、オイラこれでも怪我人なんだぜ?。」

ジョンは老婆を“シスター”と呼んだ。

「なあジョン、話してる所済まないが私に紹介してくれないか?。」

「ンア?、アア、この小汚いばあ様はシスター・キヨカだ、まあオレッチのお袋さん見てえなもんだわ。シスター、コイツはジャン・バレットだ、表向きはNGOの支局所長だとか言ってるが裏の顔は俺と同業……ってか、商売敵だな。」

「小汚いとはお言いだね!、この悪ガキが!!。」

シスター・キヨカはそう言うなり、後ろ手に持っていた杖でジョンの向こうずねを叩いた。

「ギャツ!!。」

完全に不意を突かれ、かわす事も出来ずにジョンは短い悲鳴を上げると喋らなく成った。

と、言うよりも喋れない程痛いのである。

「あの、シスター・キヨカ、とにかくジョンの傷を見てやって下さい。」

私はたまらず割って入った。

「シスターで結構……、ジャンと言ったね?、おまいさんの方が先の様だね。」

「は?、いや私は……。」

「確かに見た目の傷はジョン坊の方がひどい様だね。けどアンタは内臓がやられてるね。」

シスターは私の顔を舐めるように診ながらそう言った。

「あの……、内臓ってどう言う事ですか?。」

心配顔のミハルが割って入って来た。

「アタシもね、長いことジョン坊みたいな悪ガキ達を相手にして来たから分かるのさ。このアンチヤンは相当ヤバイ薬を使ってるのが顔に出ちまつてるんだよ。」

「……、そんなに酷い顔してますかね?。」

私は半分おどけながらシスターに質問した。

「ああ酷いね。」

そう答えると、シスターは私の顔を両手で持つ様にして詳しく調べ始めた。

「肝臓にすい臓、腎臓……、舌をお出し……、ああ、こりゃあ胃も大分痛んでるねえ。」

接診、それも顔だけでここまで分かるものなのだろうか？。

「私の事は結構です。ジョンを看てやって下さい。」

「……アンタ、覚悟の上なんだね？」

私がつなずくとシスターもつなずき返し、ジョンの手当てを始めた。シスターの作業……、ジョンと私への手当てが終わったのは次の日の明け方だった。

私の外傷はやはり右脇腹の肋骨が三本綺麗に折れていた。

シスターの見立てでは安静にしてさえいれば3ヶ月で繋がることだった。だったので湿布を包帯で固定しただけで終わった。

問題はジョンの傷で、ミハルは傷に食い込んだ銃の破片を綺麗に取り去ったつもりだった様だが、シスターはさらに大小20個以上の破片を取り出したのだ。

長時間に渡る手当てを終えた割にシスターはケロッとした顔で後片付けをしていた。

一方疲労困憊な様子なのは手当てを受けたジョンの方であった。

なんとシスターは麻酔無しで破片の除去と傷の縫合を行ったのだ。

「麻酔なんて使わない方が治りが早いのだ。」

とはシスターの弁である。

シスターが黙々と後片付けをしている横でミハルは突っ伏して眠っている。

「あんだ、この娘をどうするつもりだい？」

シスターが唐突に、しかし片付けの手を止めずに話しかけてきた。

「さつきから眺めてるみたいだけど、ずいぶん気にしてるんだねえ？。」

私はどうやら、無意識の内に眠っているミハルを見つめていたようだ。

「私は……、遅かれ早かれこの土地を離れなければなりませんから。」

「フンツ、おまいさんもヤクザな商売って訳だ。泣きを見るのは女子供ばかりさ。」

正直耳の痛い話だった。

「怪我の具合が落ち着く迄はここに居て生き抜く為の技術を彼女に教えるつもりですが……。」

「ハッ！、生き抜く為の技術だって？。そんなもの本当に役にたつのかね？。」

シスターは私の話を遮った。

「……さて、どうですかね？。私はただ彼女に死んで欲しく無いだけなんですがね。」

「それはおまいさん個人としての考えかね？」

「さあ、どうでしょうか……？。どの道彼女を利用する事に変わりは有りませんが……。」

「フンツ！。それで？、おまいさんはどうしたいのさ？。」

「改めてジョンにたのもうかとも考えたのですが、お互いの立場上無理だろと思ひまして……。」

「それで？。」

「何か個人で出来る商売を紹介していただけませんか？。」

「そりややつぱりジョン坊に話した方が良いねえ。」

「いや、彼は連邦軍に近すぎますから……、できるだけ影響を受けさせたくないんです。」

「……スナック菓子の路上販売みたいなので良けりゃあ紹介してやるよ。」

これで私が居なくとも食うだけなら何とか成るだろう。

後片付けが済むと彼女は事務所のソファ―に横に成り、大いびきをかき始めた。

私も、少し体を休ませるだけのつもりで自分のベッドに横になったのだが、いつの間にも眠ってしまったのかランチが出来たと言うミハルの呼び声に起こされたのだった。

シスターはミハルの作る食事がよほど気に入ったのか2人分をペロリと平らげてしまった。

ジョンはあきれ顔で嫌味を言ったが、シスターは無視で答えた。

食事が済むとベネットは、シスターを送ったその足でそのまま帰ると我々に告げた。

「特ダネもモノに出来たし、ここに長居する理由も無くなった。」  
「のだそうだ。」

ジョンはジョンで帰るきっかけが欲しかったのだろう。

「シスターも帰った事だし……。」「とだけ言って、まるで傷の痛みが無くなった様にそそくさと帰って行った。

その夜、私は今までの残務処理を済ませて、（ミハルはジョンやベネット等の泊まっていた部屋の片付けを済ませて、）ミハルの“今後”について改めて話をした。

私とミハルは事務所のソファ―セットに向かい合って座っている。

私はミハルが初めてここに来た時の事を思い出していた。

ミハルは居心地が悪いのか、私から少しだけ視線を外している。

「さて、改めて聞こう。」

私と話始めるとミハルは私に向き直った。

「私の仕事……。つまりジョンのスパイを引き受けてくれないかね？。」

「分かった、OKだよ。」

ミハルは何のためらいも無く答えた。

今私の目の前に居る少女は、あの大人に媚びへつらう事しか出来なかったミハルと確かに同じ少女のはずなのだが…はまるで別人の様だ。

「今回は父ちゃんも母ちゃんも見つからなかったけど、もう諦めは付いたからね。それに、弟達を食わせていかなきゃなんないだろう？。」

ミハルの口調がいつの間にかタメ口に成っていた。

「ご両親の事、弟達には話すのかね？。」

「んーん、アタイの胸に仕舞っとくよ。あの子達にはまだ希望を持たせてやらないとぬ…。」

ミハルは少し寂しそうに笑顔を作りながら言った。

「この短い間に成長したな。」

「……、アンタの“せい”なんだからね。」

「私の“せい”……かね？。」

「そうさ、“おかげ”なんて絶対に言っちゃならないんだから。」

私は苦笑する他なかった。

「では……。」

私は1つ咳払いしてからミハルへと向き直った。

「ミハル・ラトキエ、君を“ジオン突撃機動軍戦略諜報部現地活動員107号”としてここに採用する。」

「はい!。」

ミハルはぎこちない動きで連邦式の敬礼をして応えた。

それで良いと私は思った。

現地徴用のスパイなど、軍属ですら無いのだから。

「準備金としてこれだけ置いて行く。」

私は金貨の入った袋をミハルに手渡した。

「こんなに……。」

「次が何時になるか解らんからな。」

それを聞いたミハルが不満げな視線を向けてきた。

「当面の生活はシスターが某かの商売を紹介してくれるように話してある。」

「結局自分で稼ぐしか無いんだね。」

「明日からはその商売にも応用出来る技術を覚えてもらう。」

「エ？、ナニナニ？。」

ミハルは少女らしい興味の示し方をして見せた。

「自然な会話の中での誘導尋問と、自然とターゲットに近づく方法だ。」

「そんなのが本当に商売の役に立つの？。」

「勿論だ。誘導尋問では客の趣向が聞き出せる。自然に近づく方法は……、売り子が客から敬遠されてたら商売に成らんだろう？。」

「ウツ、確かに……。」

納得した様である。

それから5日間は何事も無く過ぎた。

私宛の書簡が届いたのは6日目の昼過ぎだった。

封の開けられた封筒の中には連邦政府の「検閲済み」印が押されたNGO本部からの業務命令書が入っていた。

しかし私に届いた本当の書簡……、指令書はその封筒の内側にX線にも反応しない特殊インクで書かれていたのだ。

勿論中を覗いただけでは文字が書かれている事にすら気が付かないだろう。

私は封筒をある手順にしたがって開いて行った。

この手順を間違えると速乾性の薬剤が封筒全体に回って書かれている内容が読めなく成るのだ。

無事に開き終えたら別の薬剤のスプレーを吹きかけ、ある波長の紫外線ライトを当てると一定時間だけ文字が浮かび上がって来るのだ。その内容は、『現在の任務を早々に打ち切り“第三次降下作戦”の

為の情報収集と後方攪乱の任に当たられたし。』であった。  
私も軍人である、命令には従う他は無い。  
気がかりなのはミハルである。

この5日間で教える事が出来たのは“基礎”だけだったのだ。

その夜、私はミハルに何も告げずにこの事務所から出て行くつもりだった。

残った機材やトレーラー等は後続の同僚が回収する手筈に成っていたから私は身体1つで次の任務地へと行く事が出来るのだ。

私は灯りの無い部屋で身支度を整え、最低限の装備をスーツケースに詰め込んでいた。

その時、私以外には誰も居ない筈の部屋の中に突然第三者の気配が現れたのだ。

私は咄嗟に右手で警棒兼用のフラッシュライトを掴み取り身構えながら気配の方を照らした。

そこに居たのはミハルだった。

ミハルはライトの光に目を細めながらも身動き1つせず私を見ていた。

「何にも言わないで行っちゃうつもりだったんだ？」

ミハルは私の行動を批難してそう言った。

私には返す言葉がなかった。

「……私を引き留めるつもりなら。」

「そんなこと！、出来ないのは分かってるよ。」

私の言葉がミハルに遮られ、しばらくの間部屋を沈黙が支配した。

「分かった、今度の事は許してあげる。だから……。」

ミハルはゆっくりと私に近づいて来た。

「1人じゃ分かんない事、最後に教えて。」

ミハルはそっと私にもたれ掛かった。

「……………」  
私は無言でその小さな肩を抱き寄せた。  
それがミハルとの最後の会話だった。

ジャン・バレットが消えて数日の後、ジャンの同僚を名乗る男達が現れて事務所の中のを洗いざらい持って行ってしまった。それどころかミハル達の住んでいる簡易住宅まで持って行くと言い出した。

最初は不安だったが、一軒家に管理者として住めると分かりミハルはホッと胸を撫で下ろした。

男達は引越ただけで無く、家具の据え付けまでやって行ってくれたのだった。

勿論上下水道やガス、電気等のライフラインもそのまま使えた。そして男達が去った後、そこには“ジャン・バレット”なる男がいた形跡は跡形も無くなっていた。

それから5ヶ月が過ぎ、ミハル達が一軒家に馴染んだ頃“それ”は現れたのだった。

今まで感じた事の無い家全体を揺るがす振動にミハルは何かを直感した。

ミハルはカメラを手に家を飛び出したのだったが、“それ”を目の当たりにしてすっかり困惑してしまった。

『まるで安っぽい子供のオモチャじゃないか。』

ミハルが撮影するのも忘れて眺める先に有る“それ”は、白を基調に赤、青、黄色で飾り付けられた出来の悪い木馬の様に見える。

ご丁寧にか飛行機から引っこ抜いた様な羽まで付いている。

“それ”をジオンが“モクバ”のコードネームで喚んでいる事をミハルは知らなかった。

しかし近づいて来ると、その巨大さと戦闘によって付けられた傷跡で“それ”が軍艦なのだという事を教えてくれた。

ミハルは慌てシャツターを切りまくった。

そして“それ”の画像が入っている筈のデータカードを風向きが陸から海へと吹いている時間内にヘリユームの風船に仕込み、飛ばした。

風船は一定時間内に中のガスを放出して海に着水、その後アクティブソナーの様な音を一度だけ出すように出来ていた。

しかし、そのデータカードに入っている“それ”の画像はミノフスキークラフトの影響でピント用の赤外線が攪乱されてまともに写ってはいないのだった。

“それ”が軍港に入るのを確認したミハルはシスターから紹介された“駄菓子売り子”の商売道具であるバスケットを自転車のカゴに載せて走り出した。

「ねえ兵隊さん、なんか買ってよ。」

「ん？、ろつくなもん無いのねえ？。」

それが運命の出逢いだと言う事をミハルは知らない。

くエピソードく

私の名は……今は“ジャン・バレット”では無い。  
その後、私は活動の場をヨーロッパからアフリカに移し、終戦を東  
南アジアで迎えた。

戦中に聞いた『スパイ107号からの情報に基づきシャア・アズナ  
ブル大佐が南米要塞ジャブローの宇宙船用ドッグ入口を発見した。』  
との一報は、久し振りに私の心を踊らせたものだ。

ミハルの噂を耳にしたのは後にも先にもその一度だけだった。

私は今、過去を捨て、顔を変えてアースノイドとしてホンコンシテ  
イに暮らしている。

軍から渡されて使い続けた薬がどんな物だったのか、今となっては  
知る由もないが、何れにせよ長生きは出来ないだろう。

今の私は民間企業の雇われボディーガードなのだ。

あの“ルータン”と名乗っていたモーガンの運転手を思い出す。

そう言えば今日は私の雇い主“ルオ・クーミン会長”がフリージャ  
ーナリストに会う予定に成っていた。

名前は……、“カイ・シデン”とか言っただろうか？。

｝ f i n ｝

### 第3話：ある連邦基地にて

（プロローグ）

俺は連邦空軍戦闘機パイロット、スレッガー・ロウ少尉だ。

今は次の赴任先、南米のジャブロー基地へ向かう兵員輸送機の到着を待ちブラボー小隊の仲間達と待機中だ。

連邦宇宙軍の再編成に伴い、今まで所属していた部隊から小隊ごと引き抜かれたのだ。

少しの間だけ俺の話に付き合ってくれないか？。

酒でも飲みながらさ。

「ヨウ、兄弟、どうしたんだ？さっきから俺の方なんか見て……。俺は基地内のPXで買って来たばかりの冷えていない缶入り黒ビールの封を切った。

「頼むから冗談でも“ホレた”なんて言うんじゃないぞ。」

俺はそう言いながら泡がこぼしながら缶ビールに口を付けた。

俺が“兄弟”と呼んだ相手、“エドワード・カーペンター曹長”は俺と同期入隊で同じ隊に配属されたいわゆる腐れ縁って奴だ。

ある意味“兄弟”と言えなくも無いのだが……。その話は止めておこう。

「……少尉殿は性格変わっちゃったよな。」

エドワード……。エディは溜め息混じりにそう呟いた。

「変わっちゃまった……。か、確かにそうかもな。」

「ほら！、それだよ。」

俺の答えを聞くなり奴が食い付いて来た。

「入隊したての頃はもっとこう……。抜き身のナイフみたいで良く言

いがかりを付けちゃあ他の中隊の連中をまとめて申しちまって独房入りしてたよな。」

「お前も一緒にな?。」

俺とエディは入隊直後にあるきっかけで大喧嘩をやらかしたが決着が着かずそれ以来の親友：朋友に成った。

「俺は巻き込まれただけだろが!。」

そう、問題を起こすのはいつも俺とつるんでいる事の多いエディは俺の“連れ”として巻き込まれていたのだ。

「お前は元々パイロットとしての腕は確かなんだ。もっと早く昇格してもおかしくは無かつたんだ。」

「済まん、俺はともかくもお前の昇格まで遅らせちまったな。」

俺は手元に残っていた缶ビール5本の束から1本抜き取りエディに手渡した。

エディは缶ビールを受け取り、封を切りながら言った。

「まったく……、親父にどやされっぱなしだぜ、おおっと!。」

缶から吹き出した泡にエディは慌てて口を当てた。

それを見ながら俺も缶に口を当てて残っていたビールを一息に飲み干した。

「確か半年位前からだったよな?。」

エディは俺が飲み終わるのを待ってそう言った。

「半年前?、何がだ?。」

「とぼけんなよ!。他の隊の連中の挑発に乗らなく成ったのがだよ。」

「!。」

「……。」

『カシユッ!』

俺は無言のまま缶ビールを開け、口を着けて半分ばかり飲み込んだ。

「ふう、故郷のお袋がさ、死んじまったんだよ。」

俺は意を決してエディの質問に答えた。

「そいつぁ……、す、済まん。」

「なあに、かまわんよ。」

俺達はそろって缶ビールをあおった。

「それにしても水臭いじゃないか。何で今まで教えてくれなかったんだよ。」

エディは缶ビールを飲み干してから言った。

「何て言うか、俺が軍に志願したのは故郷から、って言うかお袋から逃げ出す為だったんだよな。」

「そんなに仲悪かったのか?。」

「いや、その……。」

俺は思わず口ごもり、視線をエディから外してしまった。

「おい、何だよ!?、そのあからさまに怪しい反応は!。」

「だから話したく無かったんだ。」

俺はそう言うってから2本目の缶ビールを空にした。

しかしエディは俺から視線を外さずに、俺から話し始めるのを待っている様だった。

「クソ、分かった!、話すよ、話してやるよ。」

俺は3本目の缶ビールを開封して一気に飲み干した。

「俺の故郷は北アメリカの中西部に有る……有った地方都市だったんだが、コロニーの破片にやられて壊滅しちまったんだ。」

俺は手元に残った未開封の缶ビール2本を弄びながら話し始めた。

「少数だが避難民が居ると聞いたんで連絡の取れる難民キャンプに片っ端から聞いて回ったんだが、逃げ出すお袋を見たって噂すら聞けなかったよ。」

俺は話を区切り、胸ポケットからネックレスチェーンに通した指輪を取り出した。

「結局、こいつしか残らなかつたな……。」

この指輪は俺が家を出る時にお袋が俺の荷物の中に紛れ込ませた物だった。

「なあ、スレッガー、どんなお袋さんだったんだ?。」

見ると話を聞いていたエディの方が泣き出しそうな顔をしていた。それが妙に可笑しいのと、たかがビールではあったが酔いが回って

元々硬くもない口が滑り出した。

「ガキの頃は自慢のお袋だったんだ。どの友達のマムよりも若くて綺麗で……。」

俺が話し出すとエディからは相づちしか返って来なくなった。

俺の家庭はお袋と俺だけの、いわゆる“母子家庭”だった。

父親が誰なのか、結局聞けず終いだっただが俺はそれで構わないと思っっている。

お袋の商売は表向き“家政婦”と言うことに成っていたが、収入のほとんどをコールガールで獲っていた。

初めて街角に立ったのが13歳の時で、俺を産んだのは14歳の時だったそうだ。

だから俺は物心付くまでの間、知らない男や女達が家に入りする様な環境で育った。

俺がリトルスクールを卒業するまでの間、お袋の女友達（全員娼婦だった）が俺の勉強を見てくれたり、遊び相手に成ってくれたりしたんだ。

俺はガキの頃から背丈はデカイ方だったがジュニア・ハイスクールに上がる頃には170を超えていた。

その頃から人前で“マム”って呼びかけるのをお袋から禁止された。普段着用の服もそれまでの子供用からポンビキ兄ちゃんのお下がりをもらって着る様に成った。

俺は嫌だったけど、考えてみりゃ170以上で子供用の服なんて有るわけ無いんだよな。

それまで遊んでくれてた姐さん達の態度が変わって来たのもその頃だった。

実際面食らったよ、それまでは全くのガキ扱いだっただのに、「男はそんな事言っちゃダメよ。」なんて、急に男扱いされ始めたんだ。

そうやって“ご婦人の扱い”ってヤツを覚え込まされたんだな。

「まるで“ヒモ”か“ジゴロ”の英才教育だな。」

それまで黙って聞いていたエディが茶々を入れた。

「全くだ……。」

俺は同意する意外無かった。

それは13歳の夏の出来事だった。

スクールバスから降りた途端にどしゃ降り雨が降って来やがった。バスに乗ってる時から雲行きが怪しいとは感じていたが、これ程ひどく降って来るとは思わなかった。

勿論カサなんて気の利いた物は持ち合わせていなかったし、人から借りようにもバスから降りたのは俺1人だったから借りる（嚇し取る）相手もいなかった。

仕方なく全力疾走で家まで帰ったんだが、帰り着いた途端に止んでしまった。

俺が天気毒づいていると家の奥から顔見知りの姐さん、リンダ姐さん（勿論源氏名だ）が出て来た。

「ああら、ずぶ濡れじゃないの…早くシャワーに行ったらっしやい。」

「そう言う自分の首にかけていたタオルを俺に渡してくれた。」

「ありがとっ、そうするよ。」

俺は変声期のハスキーボイスで答えながら、「ウアッ！、酒臭せーっ。」と心の中で叫んだ。

その酒臭いタオルをそのまま使うのは嫌だったが、何故かリンダ姐さんはバスルームの前まで着いてきてしまった。

俺は仕方なく酒臭いタオルを持ってバスルームに入り、着ていた服を全部洗濯カゴに放り込んだ。

俺がシャワーを浴びている最中に誰かがバスルームのドアを開いた。

俺は『しまった、カギかけるの忘れてた。』と思いながら…。

「じゅめん、直ぐ終るからちよつと待ってて。」

と、シャワーカーテン越しの相手に話しかけた。

すると…。

「良いのよ、一緒に入っちゃうんだから。」

そう言うなり裸のリンダ姐さんがシャワーカーテンを開けて入って来てしまった。

「で、俺はその“リンダ姐さん”に“筆下ろし”されちまったんだ。」

「……自慢か？、自慢なのか！？。人が大人しく聞いてりゃ、この野郎！！。」

当然の反応である。

俺は激昂するエディをいなしながら言った。

「まてまて、俺はその時まで精通前だったんだぜ。男女が何をするかは知ってたけど何が起きるかなんて知らなかったんだ。気持ち良いどころかメチャクチャ痛かったんだぜ。」

それは骨盤の内側をまるごとわしづかみにされた様な、それまで感じた事の無い痛みを伴う血の混じった射精だった。

出来上がる前の器官を無理やり開かれたのだ、それが当然だろう。

「その話、お袋さんには……？。」

「言える訳無いだろ！。それにな、お袋は居たんだよ。泥酔して寝ちまってたけどな。」

「それって…どういう事だ？。」

「ん、後でポンビキの兄ちゃんに聞いたんだけどな、娼婦の間で昔から言われて来た事だそうなんだが、“男の子の初精で10歳若返る”んだそうだ。リンダ姐さんの養ってた“ヒモ野郎”が他の若い女に乗り換えようとしてたんで焦ってたんだとさ。」

「??、今一解らねえな…。」

「これもポンビキの兄ちゃんから聞いた話しなんだけどな、姐さん連中は皆俺の“初精”を狙ってたそうなんだが、皆で牽制し合って手が出せない状態だったそう。お袋はお袋で俺が誰かと二人つきりに成らない様にガードしてくれたんだが、とうとうリンダ姐さんに酒で潰されちまつたつて訳なんだ。」

「成る程……、でも本当にそんな効果有るのか?。」

「さてな、医学的根拠って奴は無いと思うぜ。」

中国の“道教”や“神仙道”等に見られる“房中術”が元ネタの様だが、かなり曲解されていると言わざるをえない。

「で?、その“リンダ姐さん”は若返つたのか?。」

「さあ?、分からんね。その後見なくなつたからなあ。仲間から総すかんで食らつたつて話だ。」

「成る程な……、女の嫉妬つてのは恐ろしい物だなあ。」

エディは“何か”を納得した様である。

“初精”を失つた俺は以前の様にちやほやされなくなった。

それでも若い男子の“エキス”を欲しがる姐さんは居るもので、それなりの頻度で言い寄つて来るのだった。

俺も嫌がっていたのは最初だけで快感を覚える様になると『来るものは拒まず』で、ほとんどサルの様だった。勿論、“児童福祉法違反”や“未成年者略取”等の違法行為である事は承知の上である。

俺やお袋への礼金(口止め料)で俺達の生活は少しだけ楽に成つた。だが、そんな『爛れた』生活も俺の16歳の誕生日迄で終わりを迎えた。

彼女達が言うには“エキスが取れるのは15歳まで”なのだそう。シニアハイスクール時代の俺はSEXで吐き出せなくなったフランストレーションを暴力で晴らす様になった。

同年代の女子に興味は無かった。

そんな俺にお袋が言ったのは……。

「卑怯な真似だけはするんじゃないよ。」

と言う一言だけだった。

俺はその言葉だけを胸に卒業迄を過ごした。

多勢に無勢と言う状況がほとんどで負けた回数の方が圧倒的に多かつたが不思議と仲間には恵まれた方だと思う。

生傷の絶えない三年間だった。筋の通らない事をしなかつたせい、それなりの人望も集まつた。

そのおかげで警察に（随分と世話には成つたが）逮捕される事も無く、学校を退学させられる事も無く、無事に（？）卒業する事が出来た。

卒業式の当日、俺は仲間達と卒業パーティーをするつもりだった。

生徒会主催のパーティーからも一応誘いが有つたのだが、さんざん迷惑をかけてきた俺達が顔を出すとせつかくの雰囲気壊れてしまつたろうと思ひ揃つて出席を断つた。

仲間達と話し合った結果、一旦家に帰つてから再度集まる事に成つた。

俺が家に帰つてみるとそこには珍しく誰の姿も無かつた。

いつもならお袋が姐さん達の誰か、或いはポンビキの兄ちゃんが休んでいるのだが……。

俺はザツとシャワーを浴びてから普段着……、チンピラ風の白地に縦のピンストライプが入つたスリーピースに着替えた。

この服は以前の様なポンビキ兄ちゃんのお下がりでは無い。

体格が遥かに上回っているのだ。

何にしてもこれが俺の一張羅なのだ。

俺は丸縁のサングラスを胸ポケットに入れて白いソフト帽を被り外に出ようと玄関のドアノブに手をかけた。

と、そこには、今まで気が付かなかつたがドアにメモが貼り付けられていたのだった。

そのメモにはお袋の文字でこう書かれていた。

『卒業おめでとう！。どうせお前の事だから生徒会のパーティーには出ないをだろ？。アタシ達でお祝いしてあげるよ。いつものプールバーで待つてるから友達誘っておいで。P.S.解ってるとは思うけど皆の前ではアタシの事“姉さん”って呼ぶんだよ！。』  
お袋には敵わない。

仲間が集まった所でお袋達とのパーティーの事を話した。

全員参加する事になった。

みんな俺のお袋（みんなには“姉”と紹介してある）が目当ての様だった。

プールバーに入った途端…。

パーティー！！

パンパーティー！！

クラッカーのシャワーが俺達に襲いかかってきた。

「コラー！、遅いぞスレッガー！」

「待ちくたびれて先に始めちゃったわよー。」

「さあさ、みんなボーツとしてないでこっちにお出でよ。」

「せっかく成人したんだから一緒に呑みましょ？。」

「今日はアタシらのおごりなんだから、とことん呑むんだよ！」

そう言うお袋や姐さん達はすでに出来上がった顔をしていた。

仲間達は嬉々として自分好みね姐さんの傍に座って飲みなれない酒を呑み始めた。

俺と言えば、お袋と付かず離れずの距離に座ってこの店で一番安いバーボンをロックでチビチビと呑みながら仲の良い姐さんと談笑

していた。

カコーンッ!!

喧騒の中、玉のぶつかり合う音が響いた。

誰かがビリヤードを始めた様だ。

しばらくして俺は尿意を覚えて席から立ち上がった。

すると、居た筈の仲間数人が見当たらなく成っていた。

俺は立ち上がって辺りを見渡し、

「あゝ、もしかしてトイレ並んでんのかなあ?。」

……と呟いた。

「あら、違うわよ。酔い潰れた子を介抱するんだって、何組か上の部屋に上がってったわよ。」

今まで一緒に話しをしていた姐さんが教えてくれた。

「ア?、なんじゃそりゃ?。」

「良いじゃない、アタシ達だったまには商売抜きで若い子と仲良くしたいんだもの。」

姐さんは悪びれもせずにそう言った。

「……、どっちの為のパーティーだよ。」

俺は呆れながらも腰を据えて呑む事にした。

もちろん小便は済ませてからだが……。

「しっかし良くあのオーナーがOKしたなあ。」

俺はこのブルバーの強面オーナーを思い出して言った。

そのオーナーはお袋達のグループをまとめている元締めでも有ったのだ。

「アタシ達が直談判したのよ、たまにはガス抜きさせろって。」

姐さんはそう切り返して来た。

「最初はボス（オーナーの事）も渋ってたんだけどさ、アタシ等が仕事をボイコットするって言ったら慌てちゃってさ、お前等を満

足させられる男達を雇うのにいくらかかると思ってるんだ!?!。』  
つて、頭抱えちゃってさ、失礼しちゃうわよねえ……。』  
姐さんも大分酔いが回って来た様で口の回転が上がってきた。  
その話を聞いて俺は……。』いや、失礼でも何でも無い。』と心の  
なかで呟き、苦笑した。

「あー!、何笑ってんのよ、もう……。そんでね、頭抱えてるオー  
ナーにあんた達の卒業パーティーを持ちかけたのはエリー（お袋の  
源氏名）なのよね。」  
「ブフツ!！」

俺は口に含んでいたバーボンを吹き出してしまった。

「おい!、マ…、エリー姉さん!！」

俺は立ち上がり、お袋に怒鳴った。

「あら、どしたの?、恐い顔しちゃって……。』

お袋はそう言いながら俺よりも恐い目付きで俺を睨み付けた。

俺がみんなの前で“ママ”と言いそうに成ったからだ。

俺は一瞬気圧されたが気を取り直して言った。

「俺のダチを何だと思ってるんだよ!?!。」

「良いじゃない、皆嫌がつてる訳じゃ無いんだし……。ね!。」

お袋は事も無げに言っただけ。

「卒業しちやえばあんた等皆成人なんだしい、身内のホームパ  
ーティーに友達を招待したんだから全然問題無いじゃない?。」

「ハ、名目じゃ無くて目的が問題なんだツテノ!。」

今度はオーナーならぬ俺が頭を抱えた。

「ホーラツ!、始めちゃったんだから楽しみましょ?。」

そう言いながら目の前に座る姐さんが新しいグラスを俺に渡してく  
れた。

俺は座り直して受け取ったグラスを傾けた。

「アツ!、旨え!?!、何だ?この酒!?!。」

俺は姐さんの手元に有るボトルを見てギョツとした。

それは“メーカーズマーク・オーナーズリザーブ”だった。

「コッ、この店で一番高い酒じゃねえか!！」  
「騒ぎなさんなって、ボスの許可は取り付けたって言ったじゃないの。」

姐さんはグビグビと呑みながらそう言った。

「だいたいボスが大切な物を残して有ると思ってるのかい?。」  
「だ、そうである。」

あのオーナーの性格ならその通りかもしれない。

「……にしても、アンタ強いねえ。本当に18?。」

「エリー姉さんに言ってくれ、每晚付き合わされてりゃ強くも成さ。」

俺もすすめられるままに呑み続けた。

俺がハッキリと覚えていられたのはそこまでだった。  
目を覚ます迄の間はぶつ切りのフラッシュバックだ。

## 薄暗い部屋

仰向けに倒れこむ俺

下半身に絡み付く女の感触

“ほら、元気出しなさいよ”

遠くで響く女の声

“酒のせいだ”

応える俺

吸われる俺……快感

“まだよ、もつとちようだい”

“ああ、こつちにこいよ”

女を抱き寄せる俺

朝、と言っても11時過ぎだったが……俺は猛烈な喉の渇きにたまらず目を覚ました。

「……み、水……。」

「はいよ。」

いまだ焦点の定まらない俺は差し出されたコップの水を貪る様に音を立てて飲んだ。

俺はコップを置き立ち上がろうとしたが腰に力が入らずにジタバタと足を動かしただけに終わった。

「もうちよつと寝てなさい、アンタが一番頑張ったんだから。」

俺に水をくれた女がそう声をかけた。

「誰だ?。」

俺は霞む目をこすり女が誰なのか確認しようとした。

「アンタ5人も相手にしたんだよ。」

タバコの匂い。

女が吸い始めた様だ。

ようやっと焦点が定まってきた。

「今回のパーティーは大成功だったわねえ、また次もお願いしようかしら?。」

女の姿を見た俺はギョツとした。

「お、お袋!?!」

そこに居たのはシースルーのキャミソールを一枚だけ着けただけのお袋だった。

「なんて格好だよ!。下着はどうしたんだよ!?!」

「アハ、欲しいって言うからアンタの友達にあげちゃった……。それにアンタ、人の事言えないわよ。」

俺は手で下半身にかけてられたシーツをめくって見た。

俺は絶句した。

さつきから妙な感触がするとは思っていたのだが……。

俺の分身には使用済みのコンドームを繋いで作ったヒモが巻き付けられていた。

ご丁寧に蝶々結びでリボンの様に飾り付けられている。

それを見た途端、朝の生理現象で屹立していた俺の分身はへなへなと下を向いてしまった。

「それにしても……、フフ、昨日は凄く良かったわよね。」

お袋はまるで俺に報告している様に言った。

「若い子をつまみ食いするのが癖に成りそうよ。……アンタも凄く良かったわよ。」

俺はハッと成った。

「おい!、まさか俺はアンタまで……!?!」

しかしお袋はクスクス笑うばかりで否定も肯定もしなかった。

俺は居たたまれなくなりコンドームの残骸をかなぐり捨てて立ち上がった。

(早くこの部屋から出て行きたい。)

その時俺を支配していたのはそんな思っただけだった。

俺は脱ぎ捨てられた俺の服をかき集めた。

「パンツ!、俺のパンツは!?!」

「あきらめなさい、お汁でべちゃべちゃだったから捨てちゃったわ

よ。」

「……。」

俺はかまわず素肌の上にズボンを履き、シャツとジャケットを羽織って部屋を飛び出した。

(クソッ!、何だってこんな事に……。)

俺はお袋が帰って来る前に自分の部屋から必要と思われる物をバッグに詰め込んで出てきた。

家にお袋は居なかったが他の姐さんが2〜3人リビングでくつろいでいた。

俺が自分の部屋を出入りしている時、声をかけるでも無く終始ニヤニヤと笑いながら俺をながめていた。……様な気がした。

俺はそれがたまらなく嫌だった。

(まさか昨日の事を見られてたんじゃあ。)

後から思えばそれは俺の自意識過剰だったのだろう。

その時の俺はきつと、鬼の様な顔をしていて声もかけられなかったはずだ。

俺は苛立った顔を隠す事無く足早に家から遠ざかった。

それから1週間は家に帰らず仲間の家を転々とした。

とにかくお袋や姐さん達とは会いたくなかった。

だが泊めてくれた仲間から聞かされるのはあの日の事ばかりで俺の憂鬱は増すばかりだった。

夜眠れば眠ったで悪夢……俺の初体験の夢……に悩まされた。

ただそれだけなら良いのだが相手の“リンダ姐さん”の顔が途中でお袋の顔に変わっているのだ。

そして気が付けば下着の中で果てていた。

(何て夢だ!!)。)

俺は眠る事さえ恐ろしくなった。

（お袋は何で笑ってたんだ？。）

（俺は何で？、酔っていたとは言え気が付かなかったんだ？。）

（お袋は……悦んでいた……のか？。）

（俺は……望んでいた……のか？。）

考えれば考えるだけ思考は危うい方向へと流れていった。

いずれにせよお袋と会って決着を着けなければ俺は一步も前に進めなくなっていた。

家を出てから8日目の朝、俺は前の晩泊まっていた仲間の家を逃げる様にして出てきた。

朝飯を断つたは失敗だったと、ポケットの中に残った一枚のダイム硬貨を玩んだ。

アメリカ中西部の秋風は乾いて埃っぽかったが、日差しとは裏腹に冷たく混乱した俺の頭を冷やしてくれた。

俺は公園でパン屋の車が来るのを待つことにした。

毎朝この時間になるとホテルのモーニングサービスでの余りを回収して公園のホームレスに配っているのを思い出したのだ。

公園のベンチに座って待っていると何処に隠れて居たのかホームレス達が集まりだした。

皆老人が身体の何処かに障害を抱えていた。

ある程度健康な者は政府機関が強制的に宇宙移民プログラムに放り込んでしまったからだ。

連邦政府のかかげる“宇宙開拓計画”はいつの頃からか“移民”“

植民”とは名ばかりの“棄民”政策に成り下がっていた。

そろそろ来るのかと思っていると遠くから独特などこか調子ツパズレな音楽が流れて来た。

ホームレス達が“今日はヤケに跳ばすなあ”等と話しているのが聞こえて来た。

公園内の曲がりくねった道を速い速度で近づいているために音のドップラー効果が顕れていたのだ。

パン屋の車が止まり降りて来た男の姿を見て俺はギョツとした。服装は確かにパン屋のそれだった。

店名の入った紙製の調理師帽、モスグリーンのカッターシャツに同色系のスラックス、それにエプロンにも店名が入っていた。

しかし問題なのはその男が193cmの俺よりも一回りでかいという事なのだ。

いや、身長は俺の方が高い様だったが、その質量と言うか存在感が大きいのだ。

それもただ太っていると言うのでも、ボディビルで無理に筋肉を付けたと言うのでも無い、均整の取れた肉体なのだ。

俺は緊張しつつも当初の目的であるドーナツを手に入れるべくホームレス達の最後尾に並んだ。

配給が始まりドーナツが次々とホームレスへ渡されて行った。

いよいよ俺の番に成った時、それまで黙々とドーナツを手渡していたパン屋の男が突然話しかけて来た。

「若いの、お前本当にホームレスか？」

「いや、そう言う訳じゃあ……。」

俺がうつ向いて口ごもっていると男は黙って撤収の準備を始めた。

「ちょっと待った！、こ、これだけしか無いけど売ってもらえないかな？」

俺はポケットの中に唯一残っていたダイム硬貨を出して言った。

「……仕事はして無いのか?。」

男は手を止めて俺をシゲシゲと見つめながらそう聞いた。

「派遣会社には登録してあるけど……まだ連絡が無いんだ。」

「そんな物しまつて助手席に乗りなさい。」

「どうしようってんだ?、オッサン!。」

「サリバんだ。」

「え?、あ、俺はスレツガー、スレツガー・ロウだ。」

「スレツガー・ロウか……、聞いた名前だな。まずは働いてもらう、その報酬としてなら分けてやれるぞ。」

俺はその男、サリバンに従う事にした。

車が動き出すとサリバンが話しかけて来た。

「スレツガーって言ったな、お前どんな仕事に就きたいと思ってるんだ?。」

まるで教師の物言いだな、と思いつつ俺はサリバンの言葉を聞いていた。

「別に……まともな仕事だったら何だって良いさ。」

それが俺の本音だった。

お袋がどう言つつもりで今の商売を続けているのかは知らないが、あと10年が良いところだろう。

それまでに何とか2人分位は稼げる様に成らなければ……と、思っていたのだ。

「そうか……、だかな、そんなこつちやあ雇い主に食い物にされるのが落ちだぞ。」

「かもね……。」

会話はそこで途絶えた。

しばらくするとパン屋の看板が見えてきた。

車はその看板を少し通り過ぎた所で止まった。

そこは倉庫の様な建物でシャッターが半分上がっていた。

「まず車の荷台に有るトレイを全部運び込んでくれ。」

俺は荷台から持てるだけのトレイを持ってサリバンの後に続いた。

「その台の上に重ねて置いてくれ。」

「解った。」

俺は2往復で全てのトレイを運び込んだ。

「次はどうするんだい!?!」

サリバンは奥で何かの作業を始めていた。

「速いな!、その左側に“強力粉”って書いた袋が有るから持って来てくれ!。」

サリバンは手を動かしながら奥の方から叫び返した。

“強力粉”の袋はすぐに見つかった。

さすがに業務用だけの事は有る、袋には“60ポンド入り(約27kg)”と書かれていた。

その袋が1ダース以上積み上げられていた。

俺は一番上に有った袋を1つかつぎ上げてサリバンが作業している部屋まで持っていった。

「1つで良いのかい?。」

「あと二袋持ってきてくれ。」

サリバンは赤ん坊が水遊び出来そうなほど大きな金属製のボールに延々と卵を割り続けながら言った。

「袋はそこに置いてくれ。」

俺は指示通り厨房のテーブル(作業台?)の左端に袋を置いた。

俺が2つ目の袋を運んで来た時、サリバンはシャツの袖を二の腕まで捲り上げて手の先から肘までを時間をかけて念入りに洗っていた。3つ目の袋を運んで来た時にはマスクと肘まである抗菌手袋を着けてパン生地を練り始めていた。

テーブルの上には巨大なボールが6つ、上皿量り、“ドライイースト”と書かれた袋、無塩バター、砂糖と塩の容器等が並べられていた。

「これで3つ目だけど良いのかい?。」

「ああ、ありがとう。すぐに済むから少し待っていてくれ。」

サリバンの手際の良さと言ったらまるでオートメーションの機械だ。次から次とテンポ良く材料をボールに移して捏ね上げ、出来上がった生地を長方形の金属容器に移し替えた。

“すぐに”と言うほど速くは無かったがその作業をながめているだけでも時間を忘れる事ができた。

「さあ、済んだぞ！。飯にするから上がってな。」

サリバンは手袋を外しながら顎をシャクって厨房の角に有る階段を指し示した。

「まだ何かやるのかい？」

「ああ、このボールを洗わにゃいかんのでな。」

6つ重ねられた巨大ボールをペチペチ叩きながら言った。

「手伝おうか？」

「有り難いが衛生上ちよつとなあ……。それに道具を他人に触らせたくないんだ。」

俺は自分の手や服を見回してから、「解った。」と言う他無かった。「まったく……待ってって言ったり行けって言ったり、わがままなオッサンだぜ。そう言えば上って誰か居るのかい！？。」

「ああ、私の女房が朝飯の準備をしてるはずだ。……手、出すなよ？。」

「何だ、そりゃあ？。」

俺は苦笑しながら階段を上がって行った。

木造の階段を軋ませながら俺が上がって行くと開け放たれた玄関の奥から女が話しかけて来た。

「ミツチエル？、今日はずいぶん速いのね？。すぐに出来るからもう少し……あなた誰！？。」

振り向き様に叫ばれてしまった。

「え、え」と……おじやましてます。旦那さんに上がってろって言

われたもんで……。?。」

それだけで話は通じた様だった。

それにしても……何処かで会った事の有る様な……。

「!!。リンダ姐さん!?。」

初めは見違えたが、あのリンダ姐さんだった。

俺は思わず叫んでしまった。

「あなた……、もしかしてスレッガー?。」

女……リンダ姐さんも俺が誰なのか解った様だったが、その態度には脅えが混じっていた。

「ママア、誰か来たの?。」

奥の部屋から4〜5歳位の男の子が現れた。

「パパがまたお客さんを連れて来たのよ。」

「ごめんよ、騒々しくて……。」

俺はそう言いながら男の子の見事なブロンドの髪の毛をぐしゃぐしゃと掻き回した。

「ウゝツ、止めてよ!。」

俺達のそんな様子をリンダ姐さんは伏し目がちに見ていた。

ブロンド……。

俺は何か引つ掛かる物を感じていた。

サリバンの髪は白髪のたっぷり混ざったロマンスグレーだが、ベースは濃いブラウンだろう。

リンダ姐さんは燃える様な赤毛なのだ。

あの子がサリバンの子供共で無い可能性はかなり高い。

「さあダニー、朝ごはんはもう直ぐだからお部屋で良い子にしてよ  
うね〜。」

リンダ姐さんは子供を奥の部屋に行かせた。

「リンダ姐さん、あの子は……?。」

「ドロシーよ!。」

姐さんはそう言って俺の話を遮った。

「ドロシー?。」

「そつよ！、もう“リンダ”なんて商売用の名前で呼ばないでちょうだい！」

「じゃあ、ドロシー……さん。」

「“ドロシー”だけで良いわよ。アンタも成人したんでしょ?。」

“リンダ”改め“ドロシー”はそう言っただけの朝食を仕上げ始めた。

話すタイミングを逸した俺は、そんなドロシーの後ろ姿を眺める他なかった。

朝食が出来上がるのとほぼ同時にサリバンが上がって来た。

「ミッチェル！、お客さんを連れて来るなら先に連絡ちょうだいって言ってるでしょう?。」

「オイ！、人前で“ミッチェル”って呼ぶなよ!。」

サリバンは頬を赤くして怒鳴り返した。

「まさかとは思ってたんだけど“ミッチェル”ってアンタの事だったのか……。」

俺まで恥ずかし様な気になるのは何故だろうか?。

「ちよつと！、そんな事どうだって良いでしょ!?!。それに、スレ

ッガーはアタシの身内みたいな物なんだから……。」

「どうだ?、驚いたろ?。」

この2人の会話は噛み合っているのか、いないのか、俺にはさっぱり解らなかった。

「サリバン、アンタ俺の事何処まで知ってるんだ?。……ッテカ、

ドロシー、何処まで話したんだよ!?!。」

サリバンはニヤニヤしながら顎をシャクってドロシーに話をするように促した。

「まったく……、そういう事を女のアタシに喋らすかね?。」

「いい！、だいたい解ったから言わなくて良いよ!?!。」

俺はあわてて叫んだ。

ああは言ったが正直な所聞きたくなど無いのだ。

「でもね、アンタに関係の有る事でアンタ自身知らない事も有るん

だよ。」

「ハア？、何の話だ？。」

俺はドロシーの言った事に一抹の不安を覚えた。

「アンタも気になってたんだろう？、ダニーがブロンドなのをさ…

…。」

「何でそんな事が解つちまうんだよ！！。」

「女の感……だよ。」

これだから女には敵わない。

「解つた！、あれだ、前に付き合ってた、え〜と……ニックとか言

つてたっけ？、あのヒモ兄ちゃんの子供だ、そうだろ？。」

俺は思い付きを口にした。

「残念ねえ、ニックのブロンドは染めてたのよ。それにアイツがア

タシと別れるまでの1ヶ月、指一本触つて来やしなかったんだから

……。」

「フフン、18で5歳の子持ちか……。」

サリバンがニヤニヤと笑いながら核心を突く一言を言った。

「……マジかよ！？。」

俺は自分の血の気が退いて行く音を聞いた。

「勘違いしないでちょうだい！。あの子は……ダニーはアタシ達の

子供よ。」

顔色が変わった俺を見てドロシーはそう言った。

その言葉を聞いて俺はさらに混乱した。

「何言つてんだよ。訳解んねえよ！。」

「ま、今のお前じゃ父親には成れないって事さ。元々お前の意思で

ドロシーを抱いた訳じゃ無いんだろ？。それにだ、もしもこの事が

バレたら“未成年者略取”でドロシーが捕まっちゃうからなあ……。」

「

「そう言う事！。アンタに認知しろなんて言えないのさ。」

二人の話を聞いて、俺はホツとした半面馬鹿にされた事に気が付いた。

「オイ！、いい加減にしてくれよ！！。オッサン！、アンタどう言うつもりで俺を連れて来たんだ！？。まさか俺をいたぶって遊ぶ為じゃ無いだろうな！？。」

俺は思わず声を荒らげてしまった。

直ぐ隣の部屋でダニーがうかがって居る事も忘れて……。

『ウエ〜ン！。』

ドア越しにダニーの泣き声を聞いた時、俺は我に帰った。

ドロシーはダニーの泣くのをそのままにしてテーブルに朝食の皿を並べ始めた。

テーブルのセットが終わる頃、ダニーは泣き疲れたのか泣き声が小さく成った。

「ダニー、入るわよ。」

ドロシーはダニーが落ち着いたのを見計らって部屋へ入って行った。

「ごめんねダニー、もう泣かなくて良いのよ。」

母親に抱き締められて安心したのだろう、ダニーが泣き止んだのはそれから直ぐの事だった。

「スレッガー、入っといで。」

ドロシーに呼ばれて俺は恐る恐るダニーの部屋に入った。

部屋の中には目を真っ赤にはらしたダニーとそれを抱き締めながら頬擦りするドロシーが居た。

「おじちゃん、おじちゃんはボクのパパなの？。ボクを連れて行ってちょうの？。」

ダニーは哀しそうな目で俺を見ながらそう言った。

「そんなこと、あるもんか。ダニーはドロシーとミッチェルの子供だ。何処にも連れてきやしないさ。」

「本当？。」

「ああ、うそは言わねえ。男の約束だ。」

「うん！。」

ダニーがやっと笑顔で応えた。

それを見て俺は何故だかホッとしていた。

少し遅く成ったが約束の朝食にありつく事ができた。

朝食が済むとサリバンは仕込んだパンを焼く為にさっさと工房へ行っってしまった。

ドロシーは4人分の食器を洗い始めた。

その間俺はダニーの相手をしていた。

「スレッガー、アンタが子供好きで助かったよ。」

俺自身、こんなに子供好きだったとは今まで気が付かなかった。

「さ、ダニー、もう十分遊んだでしょ？。部屋に戻って少し休みなさい。」

「やーだー！、もっと遊ぶー！！。」

ドロシーは俺からダニーを引き離そうとしたがダニーは駄々をこねた。

ちようど腹もこなれて来る頃でダニーは少し眠そうな目をしていたが意地に成って遊び続けようとしていた。

しかし睡魔には勝てずダニーはゲーム盤の上に倒れ込む様にして眠ってしまった。

「すごいな、何時もこんななのかい？。」

俺はダニーを抱き上げながらドロシーに聞いた。

「まさか……、何時もはもっと聞き分けてくれるんだけどねえ……。」

俺達はダニーを彼のベッドに寝かせて、そつと部屋を後にした。

「で？、ミツチエルが連れて来たって事は、アンタ、ホームレスでもやっってるのかい？。」

ドロシーはコーヒーを入れながら言った。

「ちょっと、家出をね……。」

「何よアンタ、ママを一人にして平気なの?。」

「そのママ……お袋が問題なんだ。」

「気が付くと俺は、家を出てから鬱積していた物すべてをドロシーにぶつけていた。」

「ふうん、へビーな話しだねえ。」

「お袋はどうしちゃったってんだ?。」

「アンタ、AIDSって聞いたこと有るかい?。」

「……たしか旧世紀に流行した病気で今は撲滅されたって聞いたけど……。」

「そうね、宇宙世紀に入る前に特効薬が完成したのよね。」

AIDSの特効薬……一見有難い薬の様に聞こえる。

だがそれは“科学薬品”では無かった。

自分自身の幹細胞から万能細胞を作り出し、それをさらに加工した物を脊髄の造血細胞内に割り込ませるのである。

新しく入った細胞は造血細胞と融合して全く新しいタイプのT細胞を作り始めるのだ。

そのニューT細胞の遺伝子情報は通常の二重螺旋ではなく、三重螺旋構造なのでレセプターのタイプが全く合わなくなりAIDSウイルスがどんなに変容しても感染する事ができなかった。

また、感染してしまった白血球を見分けて攻撃し、AIDSウイルス込でアミノ酸レベルまで分解する事により無力化するのである。

ただし、良い事ばかりでは無かった。

ニューT細胞の攻撃シーケンスは次の通りである。

近くの細胞に接触。

ある刺激を与える。

リアクションを読み取る。

リアクション有りなら攻撃。  
リアクション無しならスルー。

ここで問題に成ったのは約300人に1人と言う確率で健康な筈の細胞が感染した時のリアクションを返してしまう体質の人が居る事だった。

それは致命的な副作用だった。

それでも、過剰反応者にはいくつかタイプが有り、筋肉細胞や脂肪細胞等の後でリカバーしやすい細胞が攻撃の対象に成る事が多かった為と不治の病と恐れられて来たAIDSを唯一完治出来る治療法である為に、そんな副作用は黙殺されたのだった。

それでも高所得者はクローン技術を応用して造らせた損傷部位を交換手術で対応する事が出来たのだが、そうでない者はそのまま見棄てられる事に成った。

貧乏人は旧来の延命治療を受け続けるか、新型治療法の副作用で死ぬかしか無かったのだ。

「けど、お袋は十分健康そうに見えるぜ？。手術を受けたなんて記憶も無いし……。」

「アンタのママは卵巣が殺られたのさ。アンタを産めたのだって奇跡みたいなもんだっただよ。」

「……そんな……、俺は子供が出来ないのは避妊を徹底してるからだとばかり……。」

「フンツ！、あの商売”がそんな綺麗事だけでやって行けるもんか。アタシだって何度墮胎したことか……。」

ドロシーは目に涙を溜めながら吐き捨てる様に言った。

「……。」

言葉が出なかった。

しばらくの沈黙の後、ドロシーは思い出した様に話し始めた。

「そう言えば、アンタのママはまだあの男の事を待ってるのかしらね?。」

「男?、どいつの事言ってるんだい?。」

「フフ、アンタが言ってるのはヒモ連中の事だろう?。そうじゃ無くてさ、あの子の初めての相手……、アンタの父親の事さ。」

俺は戸惑った。

今まで父親の事はあえて考えまいとしていたからだ。

「父親?、お袋からは一度だってそんな話聞いた事無かったぜ?。」

「スレツガー、アンタわざと目を反らしてやいないかい?。アンタのママがポケッとする時に着けもしない指輪を眺めてたじゃないか。あれはアンタの父親からもらったプレゼントなのさ。あの子は婚約指輪だと信じてたけどね。」

「アウ……。」

俺は何か言い返そうと思いつながら口を開いたが、結局言葉が出て来なかった。

「……今のアンタを見ると“あの男”を思い出すよ。」

「俺は!!、お袋の想い人の身代わりかよ!。」

「アンタが話してた日は、そうだったのかもね。」

「どんな、ヤツだったんだ?。」

「自分のママから聞き出しな!。」

ドロシーは甘ったれるなど言わんばかりに叱り飛ばした。

いずれにせよお袋との決着を着けなければ俺が前に進めない事に変わりは無いのだ。

「話は済んだのか?。」

俺達の会話が途切れるのを待っていた様なタイミングでサリバンが戻って来た。

「今日の出来はどう?。」

ドロシーはサリバンの質問には答えずにサリバンの仕事具合を聞いた。

「何時だつて最高さ。」

「フフ、じゃあアタシは店に行ってるわね。」

「ああ、俺も直ぐに行く。」

ドロシーと入れ違いにサリバンは俺の前に座った。

サリバンはティーカップに残っている冷めたお茶を一息に飲み干した。

「お前、軍に入る気は無いか?。」

サリバンは唐突に喋りだした。

「なんだよ、藪からぼくに……。」

「お前みたい奴をほっとけないだけさ。」

「軍ネエ……考えた事も無かったよ。」

俺は“問題外だ”と言うニュアンスを込めて答えた。

「だろっつな……。だがどうするつもりだ?。何か当てが有る訳じゃ無かるっ?。」

「そりゃあ……当ては無いけど……。」

俺が答えに詰まるとサリバンはここぞとばかりにたたみかけて来た。「軍隊は良いぞオ。給料も良いし、普通に過ごしてれば自然と金が貯まるし、何より退役後には従軍年金がタンマリもらえるんだからなア。」

「そんなに良いのかよ?。」

俺の質問にサリバンは口の端を片方ニイッと吊り上げて笑った。

「実はな、この店は俺の従軍年金を担保に入れて作ったんだ。」

サリバンは自慢気に話した。

「それにお前、今のままじゃただの乱暴者で終わっちまうぜ?。」

「……………」

俺が考え込んでいる所へサリバンはまくし立てた。

「軍に入ればお前、乱暴者が世の中の為になるんだから良いことづくめじゃねえか。」

「だけだよ、赴任先は何処に成るのか解らねえんだろ?。」

「なあゝに、陸軍か海軍に入隊出来りゃあいきなり宇宙って事も無いさ。」

「ウーン……………」

俺は迷っていた。

始めは歯牙にもかけていなかったのだがサリバンの話を聞かされる内に心が揺れ始めたのだ。

「そう言えばお前、フィリップ・ヒューズって奴の事知らないか?。」

「

「アン?、フィリップ・ヒューズ?。フィリップ……………、フィリップ……………、ってあのフィリップの事か!?。」

フィリップ・ヒューズは俺より1年先輩で在学中、顔を合わせれば下らない言いがかりを付けては良く絡んで来たものだった。

そう言えば奴が卒業してからは見なくなっただし噂も聞かなくなっただ。

「多分そいつだ。フィリップも俺の誘いに乗って海軍に入ったんだ。今じゃ戦闘機のパイロットだそつだ。」

それを聞いて俺の気持ちは決まった。

「フィリップ・ヒューズってお前の事目の敵にしてたあいつの事か?。」

思い出した様にエディが言った。

「奴とは昔から馬が合わなくてな。」

正直な話、俺の赴任先にフィリップが居ると分かった時は本気で除隊を考えた程だったのだ。

「同じ分隊じゃ無かったのがせめてもの救いさ。」  
そのフィリップも1ヶ月程前に新設されたMSの実験部隊に引き抜かれて行ってしまった。

今頃どうしているのか、俺達一般兵には知るよしも無かった。

俺は帰って来た。

今居るのはお袋の部屋のドアの前だ。

俺の手には軍への入隊案内書が握られていた。

帰り際にサリバンから渡された物だ。

コンコンッ！

「……。」

返事は無かったが中にお袋の気配を感じる事が出来た。

ドアノブを回してみた。

鍵はかかっていなかった。

俺は意を決してドアを開いた。

俺の目に飛び込んで来たのはベッドの上に座り込み、虚ろな眼差しで指環を眺め続けるお袋の姿だった。

「……。」

俺は何と声をかけるべきなのか解らなかった。

俺は所在無く部屋の戸口にもたれながらお袋を眺めていた。

フツとお袋が顔を上げて俺の方を見た。

だが、その目は未だ虚ろなままだった。

「ああ、あんた、帰ってくれたのね？」

おかしい、お袋が俺の事を『あんた』なんて呼んだ事はこれ迄一度だっけなかった。

「ママ……？」

俺が声をかけるとお袋に表情が戻って来た。

「ス、スレッガー？、お前……！！。」

お袋は俺が俺であることを認識すると掌の指環を握りしめて視線を逸らした。

「……今、俺の事誰と勘違いしたんだよ?。」

「フウ……、もう想像出来てんだろ?。お前のダディさ。」

お袋は顔を伏せながら言った。

「どんな奴だったんだ?。」

「……、強くも無いくせに喧嘩っ早くて生傷が絶えなかったねえ。

仲間の面倒見も良くってさ……、アタシもそう言う所に惹かれたのかねえ。」

「……。」

(何か言わなくては)と、気ばかり焦って俺は何も言う事が出来なかった。

「……どんだんあの人に似てくるのね。」

お袋がぽつりと言った。

「そんなんであんな事を……!。」

もちろんパーティーの時の事だ。

俺は怒りにまかせて思ってもいかなかった事を口走ってしまった。

お袋の顔が歪んだ。

「アタシだって!、後悔してるんだよ。」

バサツ!!

俺はその言葉にたまらな持っていた入隊案内書をお袋の足元に叩き付けた。

「俺は軍に志願する。今日はその準備のために戻っただけだ。」

「お前も……、アタシを捨てて行っちまうのね。」

「この街もお袋も俺は嫌いじゃねえ。けどな、この街でありつける仕事なんてたかが知れてる。」

「アタシが養ってやるから……。」

お袋はそこまで言っつて口をつぐんだ。

俺の顔が怒りに歪んだ為だ。

「そのセリフ、俺のダディって奴にも言っただんじゃあ無いだろうな

「?。」

お袋は何も言わずまた顔を伏せた。

「バカな!、男のプライドを何だと思ってるやがる!!。」

俺は吐き捨てる様に言っつて踵を反した。

「男つて……、何なのよ!!。」

俺は肩越しにお袋のわめき声を聞き流して部屋を後にした。

「それがお袋との最後の会話に成つたつて訳さ。」

「最後つて、未だ死んだつて決つた訳じゃ無いんだろ?。」

「まあな、数多い“行方不明者”の1人つてヤツさ。」

俺はエデイの質問に他人事の様な答えを返した。

エデイはそれが気に食わない様子だった。

『オオツ!、俺達のファーストクラスが到着したぞ!。』

どこかで誰かが叫んだ。

俺達よりもアルコールの摂取量の多いヤツが居た様だ。

「さあつ!、俺達もケツを上げようぜ。」

俺は最後に残つていた気の抜け切つたビールを喉の奥に流し込んでからバッグを拾い上げた。

「あつ!、最後に1つ聞かせろよ!。お前のお袋さん、その指環を何時紛れ込ませたんだ?。」

お前なあ、最後の最後に下らない質問すんじゃないネエよ。最後の夜、俺が荷物から離れたのはシャワーに行った時だけだ。ちなみにだ、シャワールームに行く為にはお袋の部屋の前を通らなきゃ成らないのさ。解つたか!?。」

「アツ、ああ、解つたよ。」

「サツ!、俺達も行こうぜ!!。」

空に上がったら一眠りだ。

ジオン空軍に見つかりや御陀仏だが……、寝てりゃあ痛くも無かる

うよ。

くエピローグ

俺達の乗った輸送機は無事ジャブローに到着した。

しかし、その直後にキャリフォルニアベースのジオン軍が総力戦を仕掛けて来たのだ。

情報によれば宇宙船用ドッグの入口が露見したとの事だった。

到着したばかりの俺達だったが全員に出撃命令が下った。

用意されたトリアーエズとティンコッドはロールアウトしたてで慣熟飛行もしていない戦闘処女ばかりだったが命令には従うほか無かった。

ジオン軍の攻撃は確かに激しい物だったがオデッサ後の物量不足は払拭する事が出来なかった様で、物の2時間で決着が着いた。

もちろん俺達、連邦軍の勝利だ。

後の敗残兵狩りは陸軍の連中に任せれば良いだろ。

勝利したとは言え、無傷で済む訳も無く俺達の中隊長は脇腹に一発食らってしまった、今は病院の集中治療室に放り込まれてしまった。

来た早々運の悪い人だ。

無傷で帰ってきた俺達は軽い休憩の後に集められ、新たな移動先の部隊と全員に1階級の特進辞令が伝えられた。

俺は『第13混成独立部隊』、エディは『第16混成独立部隊』と言う海軍宇宙戦隊に移動と成った。

エディがペガサス級強襲揚陸艦“サラブレッド”に、俺は同級強襲揚陸艦“ホワイトベース”に、それぞれ宙空両用攻撃機“コア・ブースター”のパイロットとして乗り込む事に成った。

「ここでお別れだな?。」

俺は宇宙港の分かれ道でエディに握手を求めた。

「終戦後にまた会おうぜ。」  
「エディはがっちり握手を返してくれた。」  
「ああ！、この戦争もすぐに終わるさ。」  
「お互いに握手を解き、敬礼して別れた。」

ホワイトベースか……、どんな連中が居るのだろうか？。

艦長兼部隊長が俺と同じ中尉と言うのがちよいと気には成るが……。目の前に迫った搭乗口には年若い下士官やウエーブ（女性水兵）がタムロしている。

俺は近くに居た下士官に声をかけた。

「責任者は居るかい？」

「アンタ誰？」

「居るのか！？」

「ブライトさん！！。」

「どうした！。」

「本日付けで就任したスレッガー・ロウ中尉だ。」

「エエト……、目録に有ります。」

“責任者”の隣に居たウエーブが答えた。

「俺もツイテルねえ、こんな別嬪さんと一緒に出来るとは……。俺の部屋何処？」

〈 f i n 〉

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2310f/>

---

U.C.War Life

2010年12月4日13時49分発行